

526

32



始



526-32



大正震災記

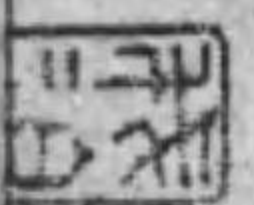
發兌 大正震災記錄編纂會

大正
12.12.20
內交

復興院總裁 後藤新平閣下題字
內務大臣 岡野敬次郎閣下題字
文部大臣 永田秀次郎閣下序文
東京市長

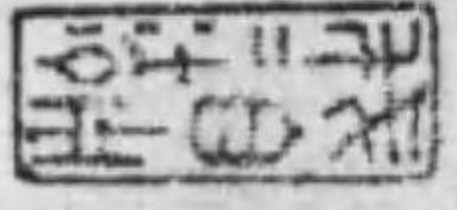
國民新聞長井修吉編

五世五



字題下閣平新藤後。臣大務内

己卯如石
生心化道五
大正十二年十月
新筆題

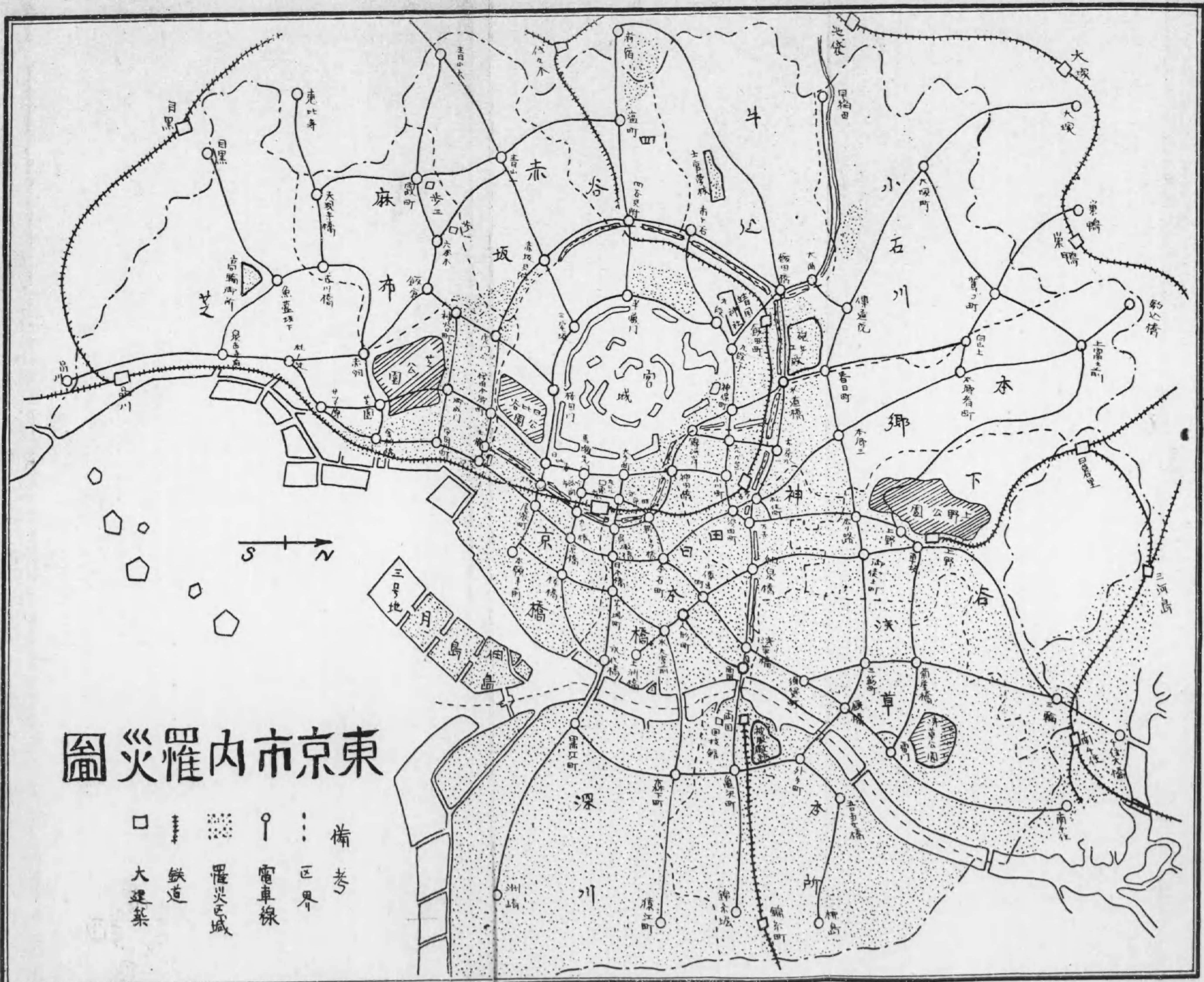


字題下閣平新藤後 臣大瑋内

至正年
自強不息
寶

大正癸亥秋日

文部大臣岡野敬次郎

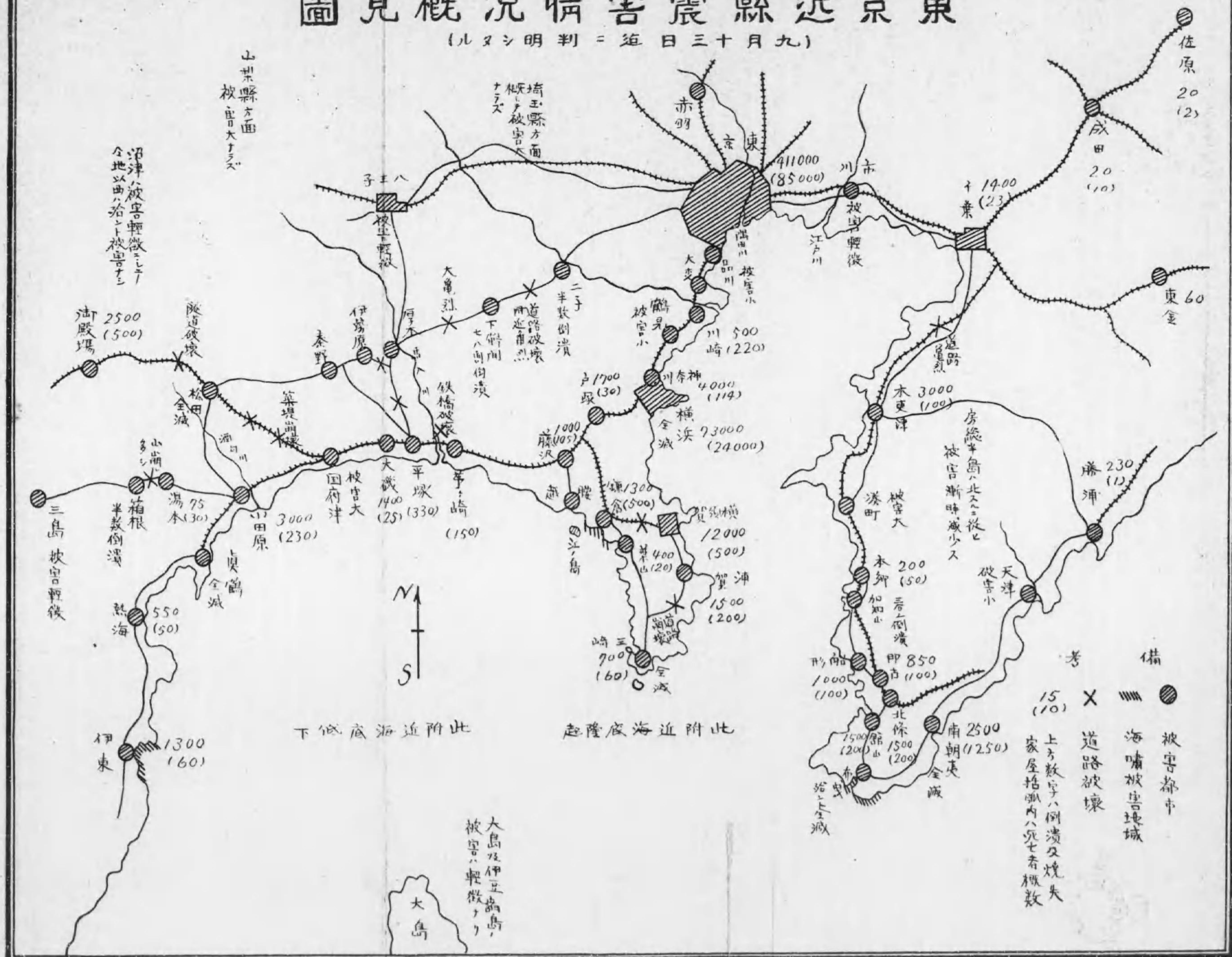


東京市內罹災圖

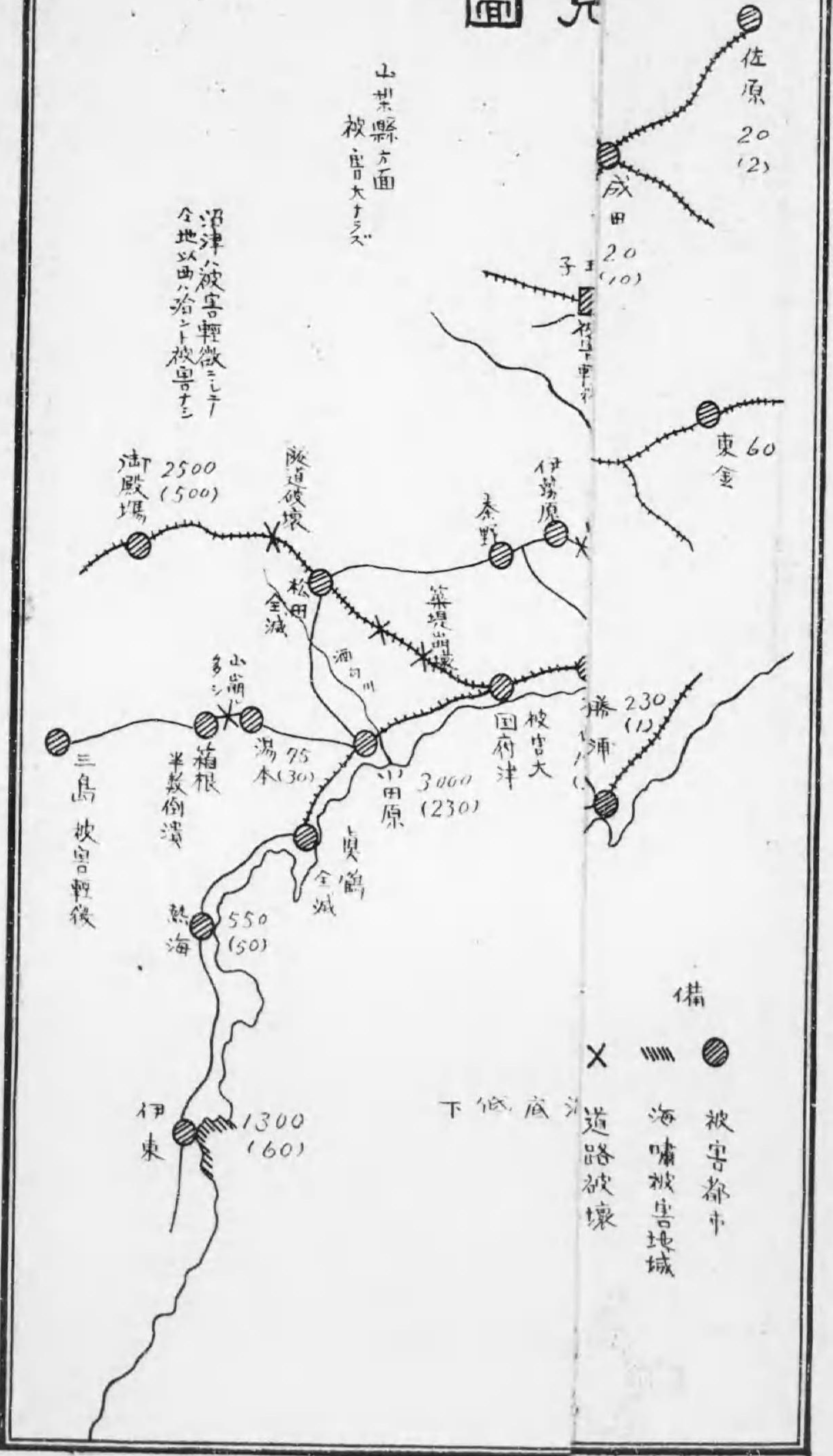
- 大建築
- ≡ 鐵道
- ⋯ 罹災區域
- 電車線
- ⋮ 區界
- 備考

東京近縣震害概況見圖

(九月三十日通判明シル)



見圖

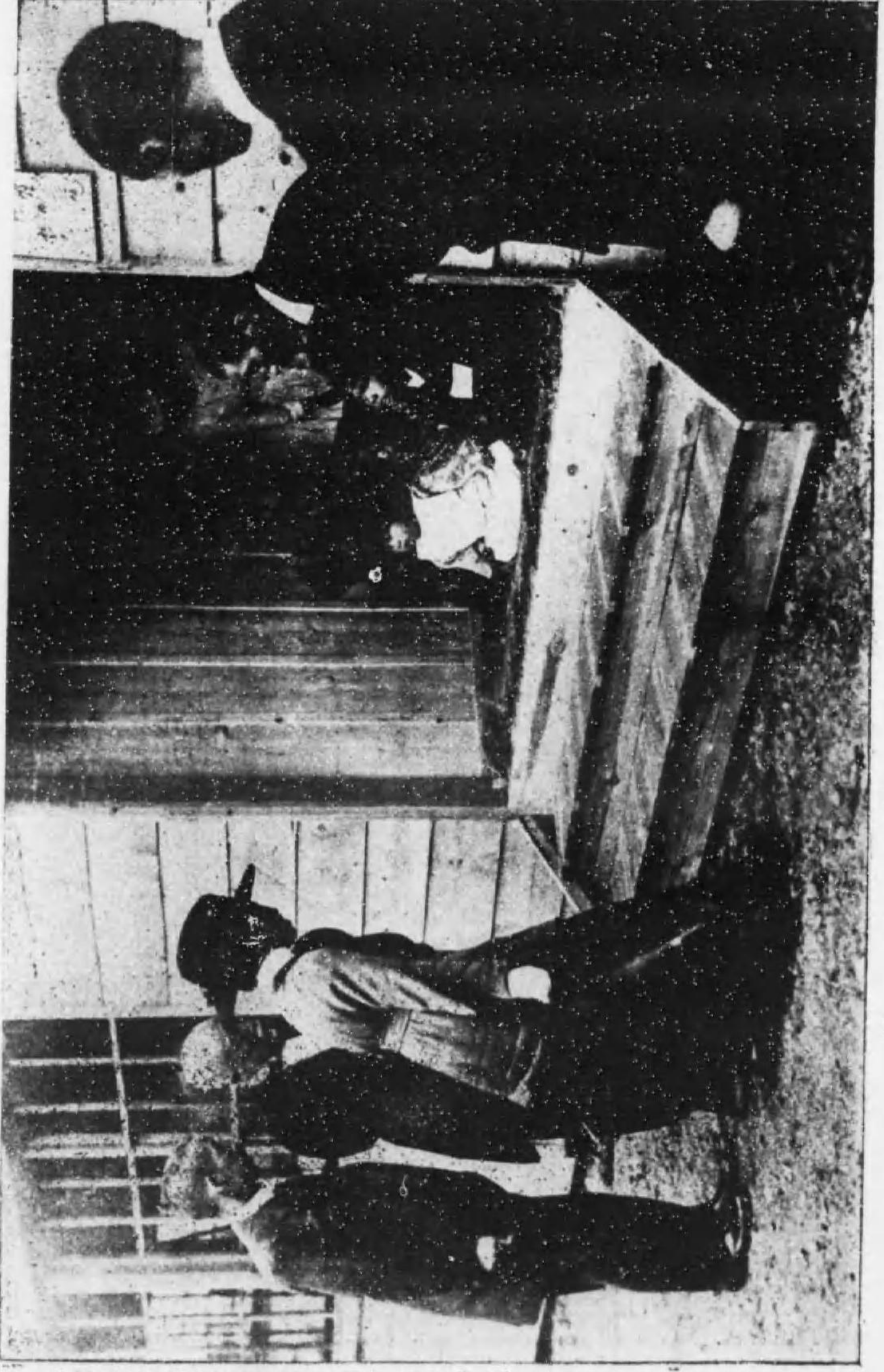


皇陛下には九月廿九日午前十一時廿五分上野苑御邊啓遊はされ

宮后皇ふ給せら皇顔玉

御出迎の山水首相以下に、一々慰問の御言葉を賜はり、
 災警の幸都に第一歩を印せられた。

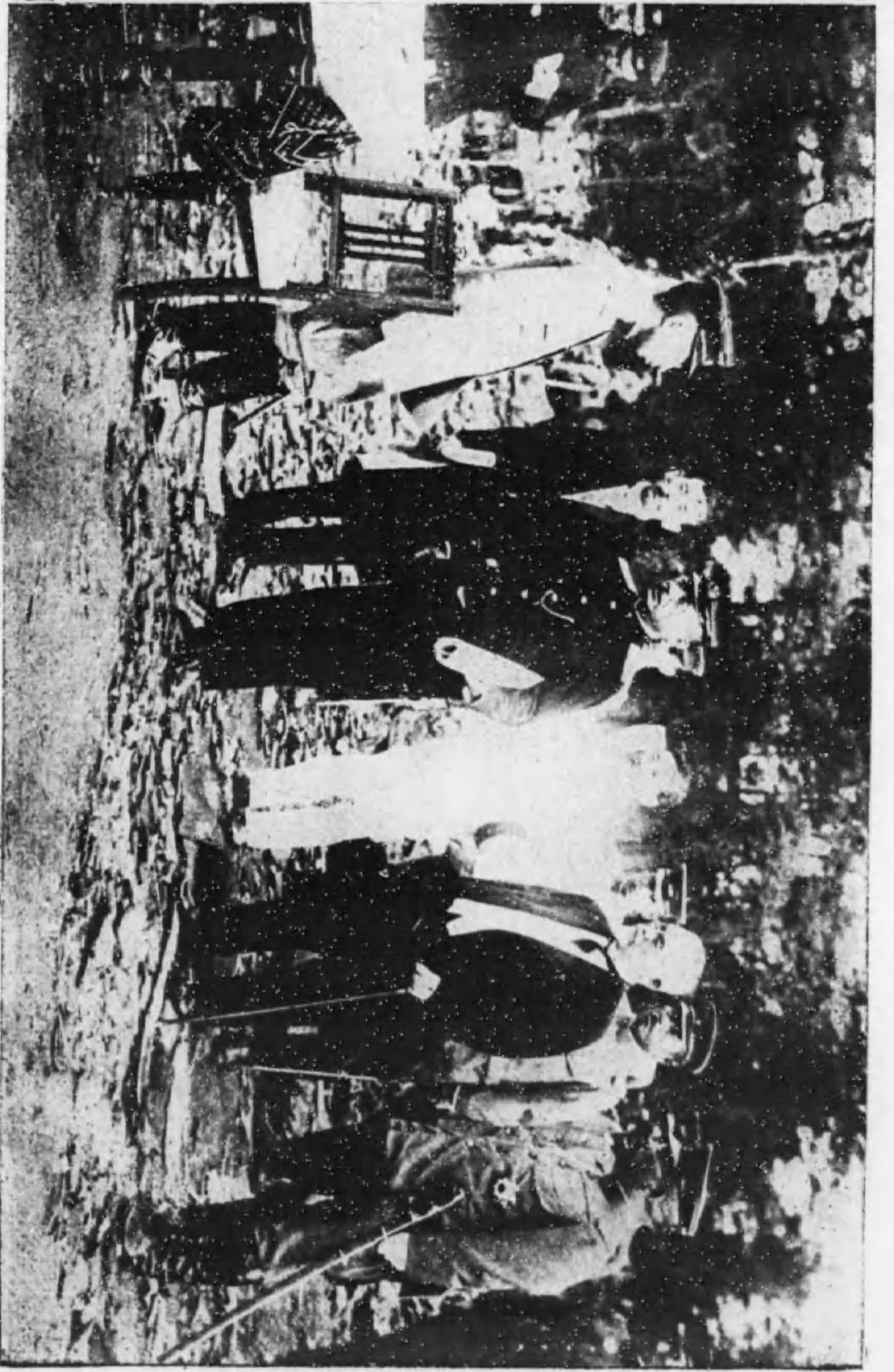
上野公園附近の市の救護所へ玉歩を運ばせられ、罹災民の



皇 后 宮 御 仁 慈

ふ。一物を並置せしむるに似たりとの寫影を附載

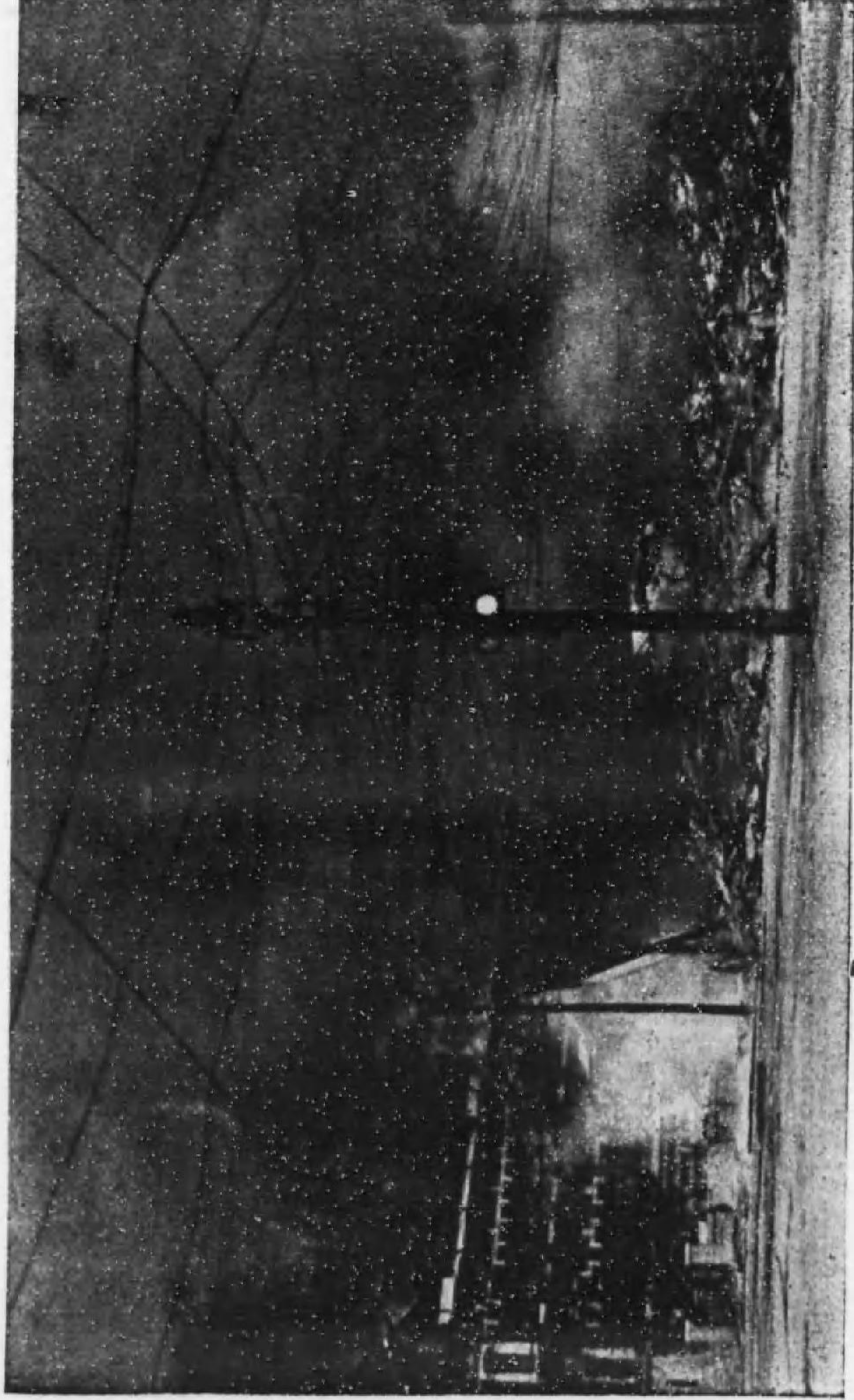
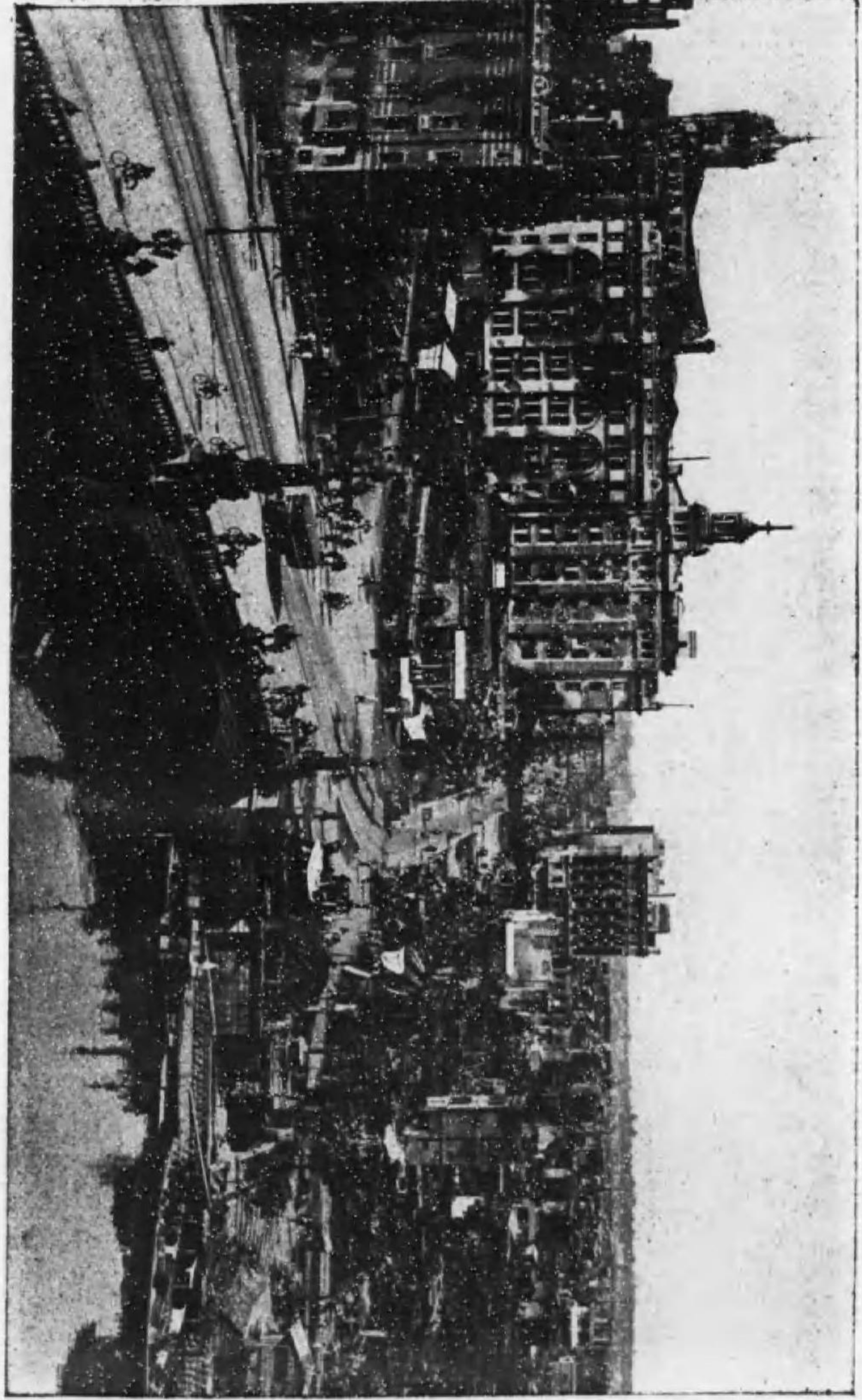
長、宇佐美知事自ら引受け罹災民の管理より救護方法に就き種々御下問あらせられたり。



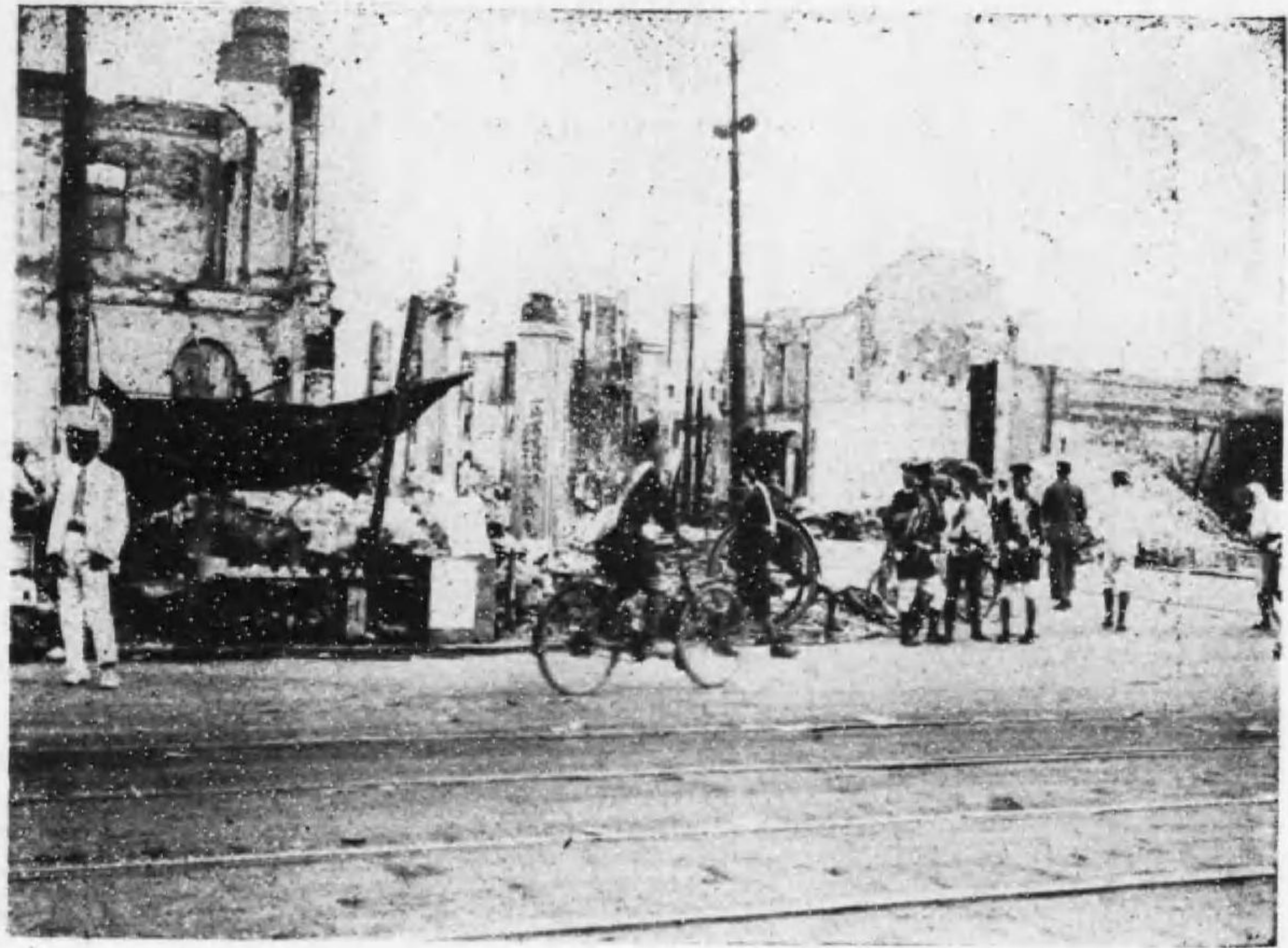
攝 政 宮 殿 下 御 痛 心

攝政宮殿下には九月十五日豪雨を冒して災害地御視察を遊され、上野公園に於いて後藤内相、湯淺警視總監、永田市

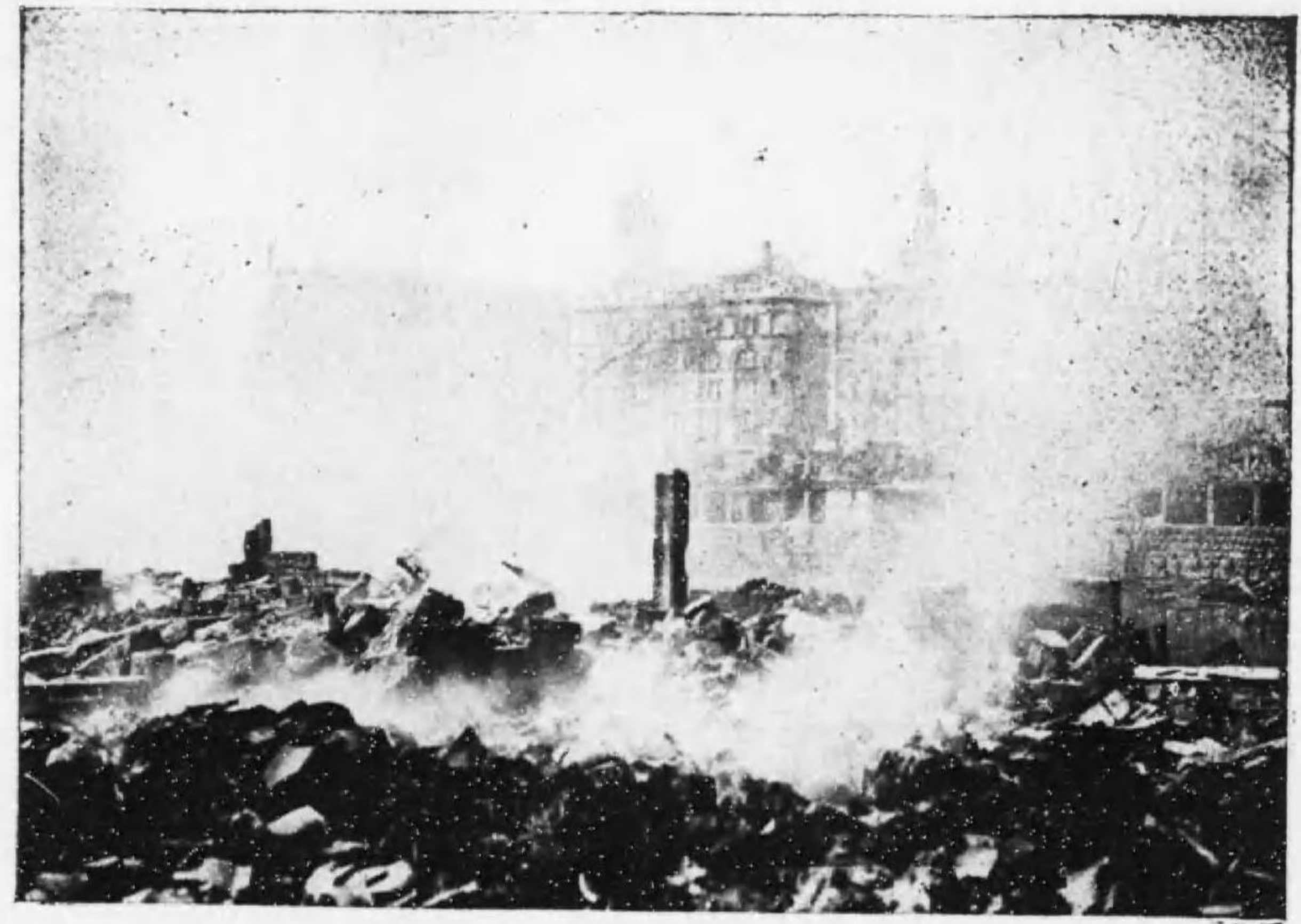
日橋よ室三越附近の焼跡



猛火に包まれつる警視廳



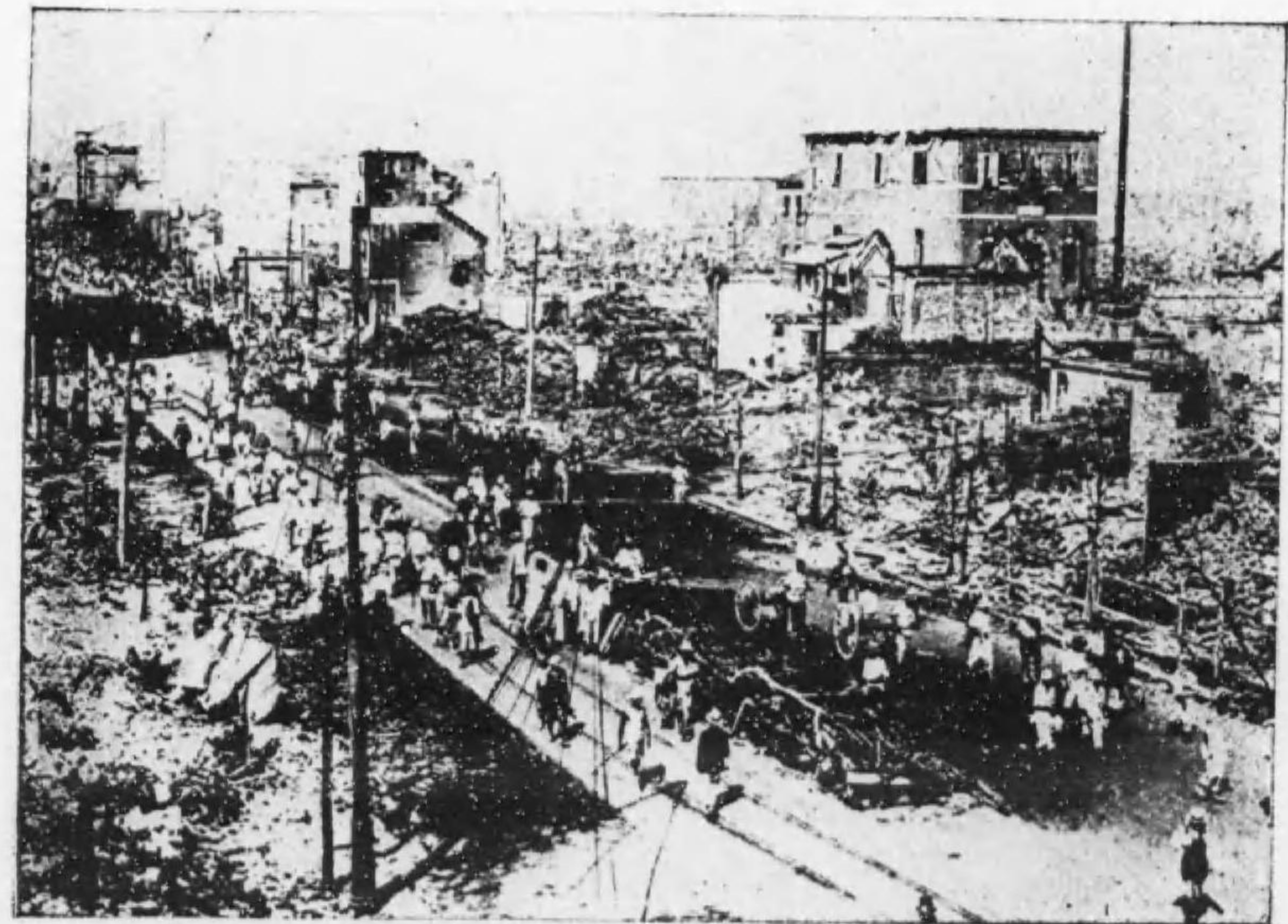
(一) 座 銀 の 墟 廢



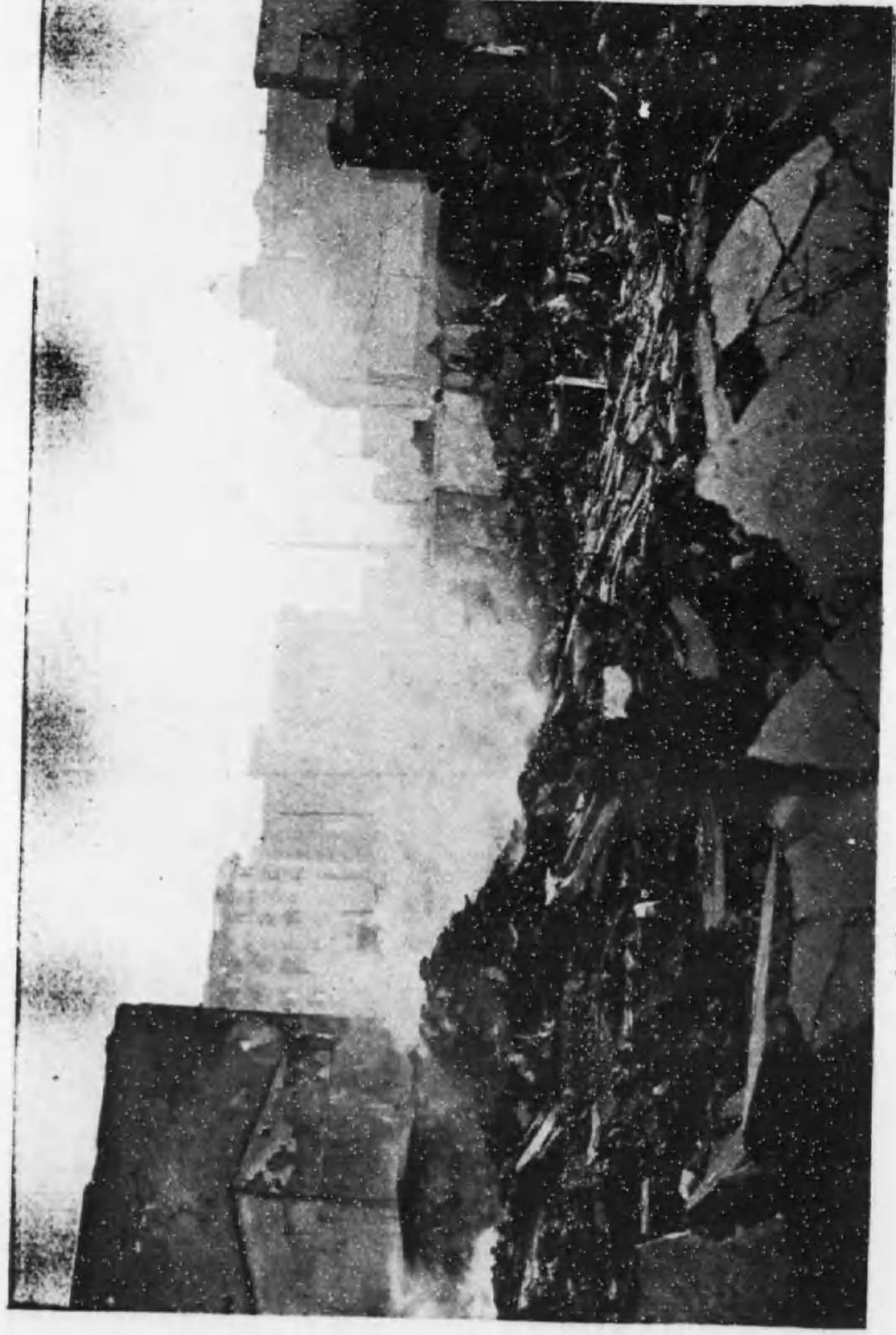
近 附 行 銀 井 三



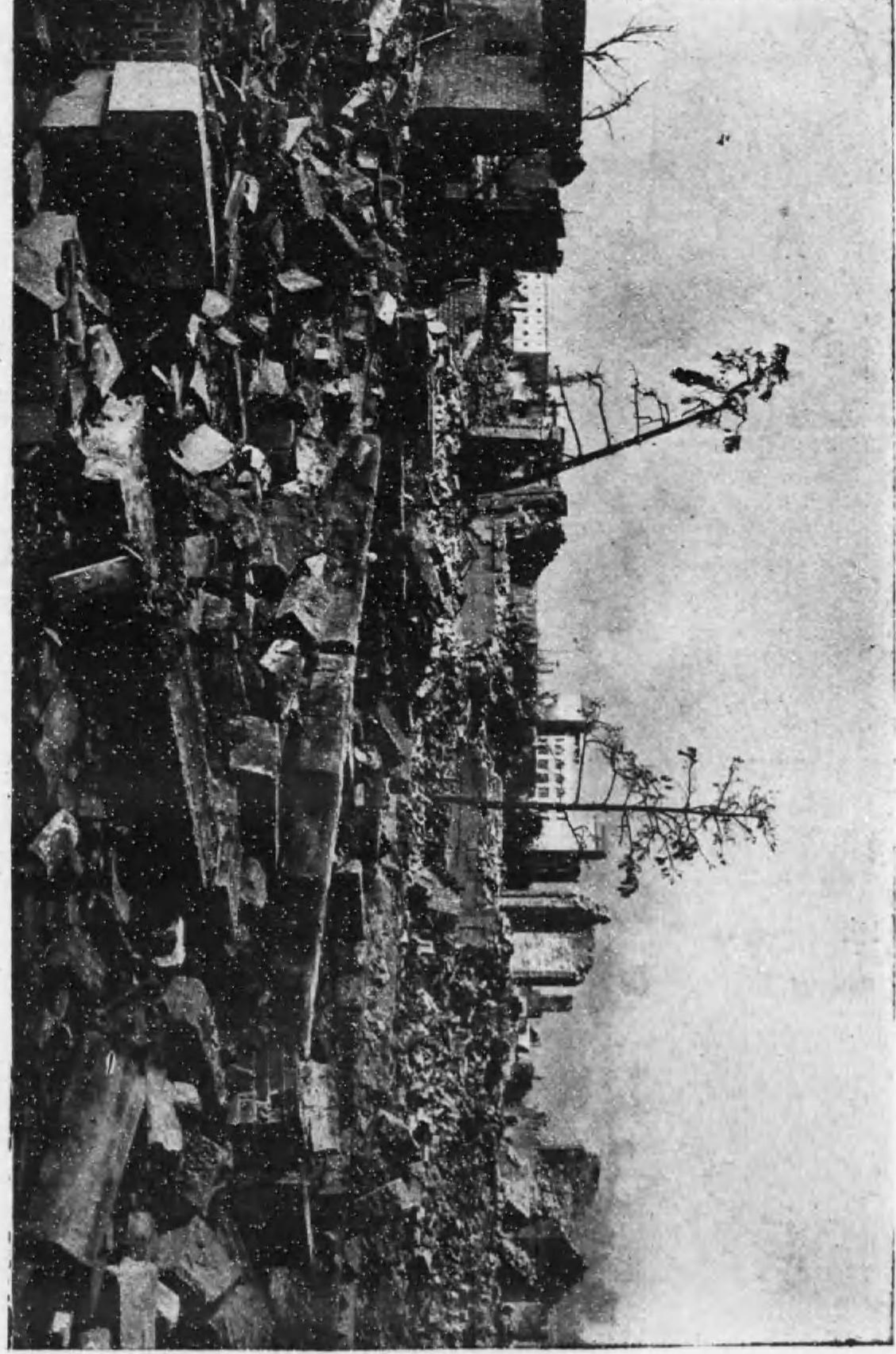
(二) 座 銀 の 墟 廢



り 通 大 橋 本 日 た つ 誇 を 一 隨 華 繁



廢城の銀座(三)



廢城の銀座(四)

り 通 大 田 神 の 墟 廢



む 望 を 墟 廢 の 橋 本 日 橋 京 り よ 橋 冶 鍛



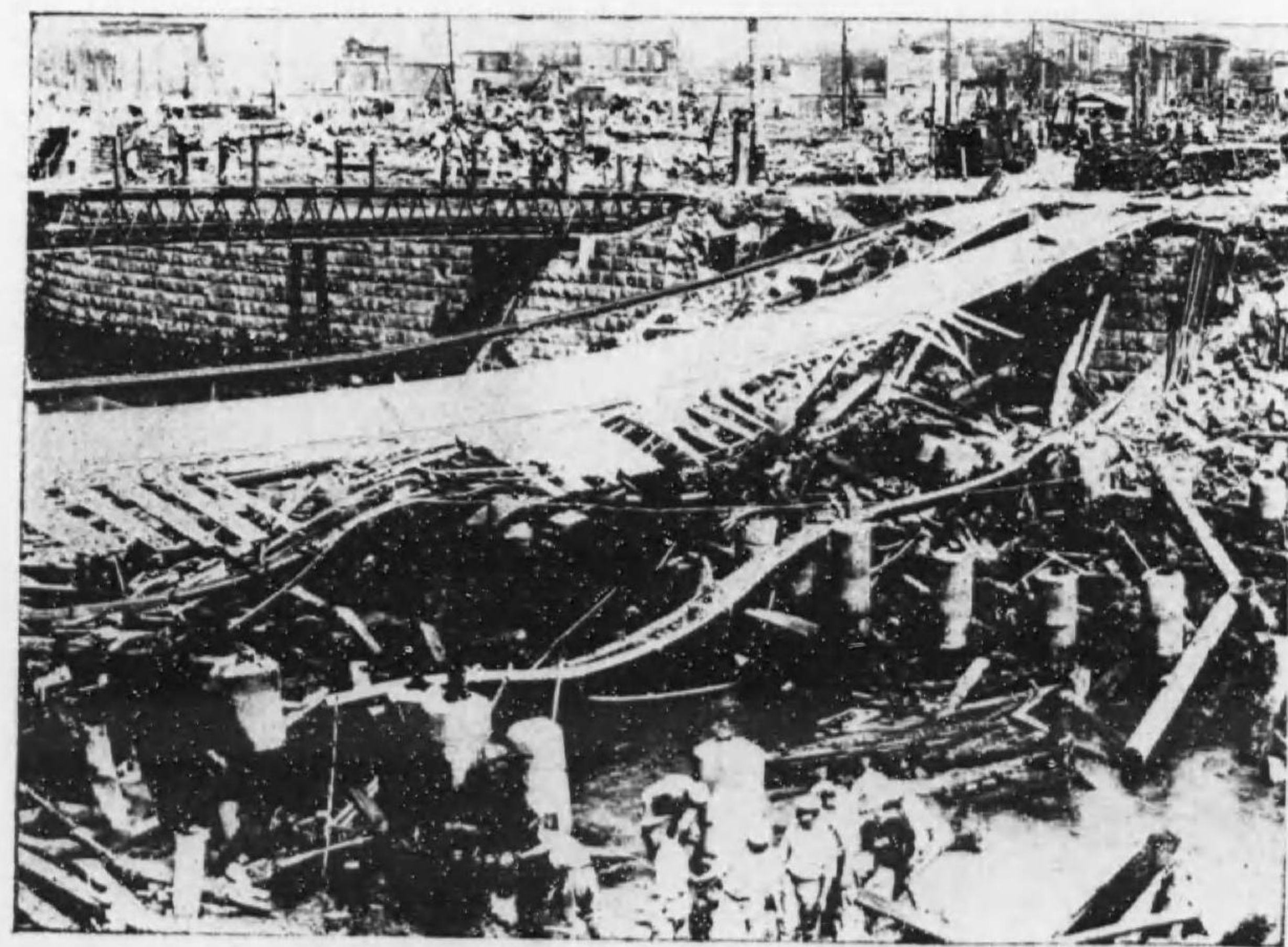
僅かに残骸を止めため万世橋驛と廣瀬中銅像



河原臺 = コラエ堂

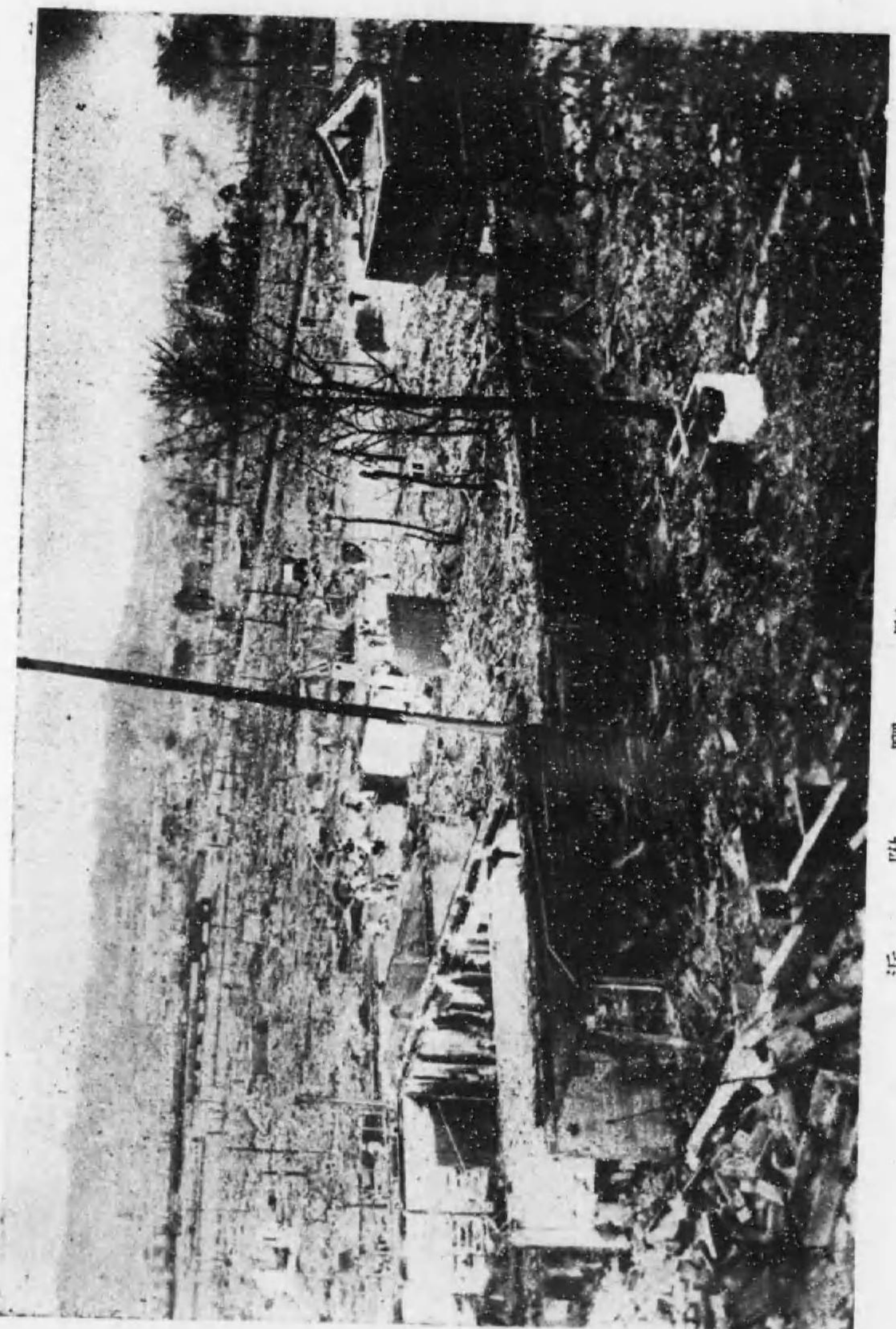


新知識の丸善の焼跡

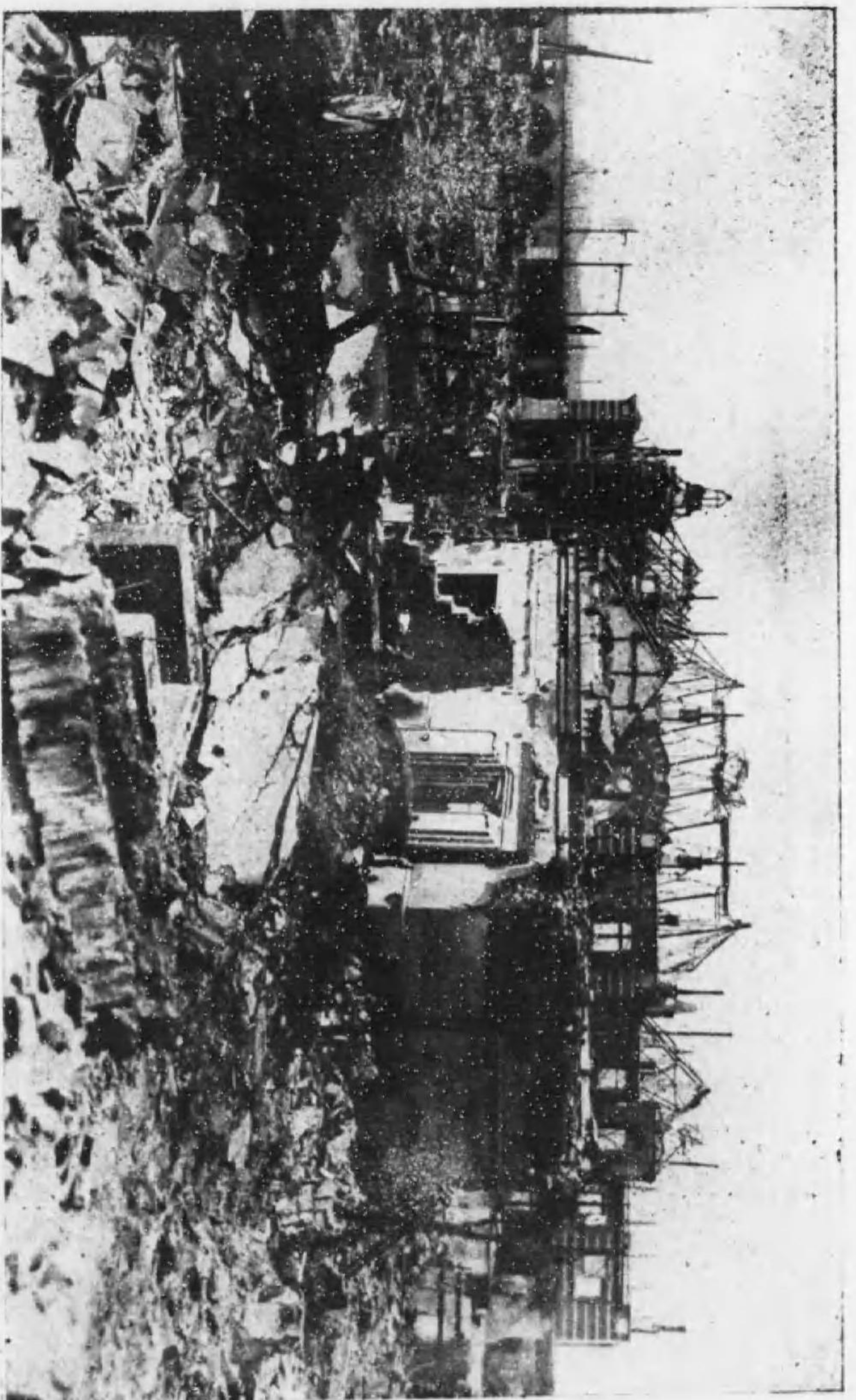


銚子のやうなつた神田橋の電車線路

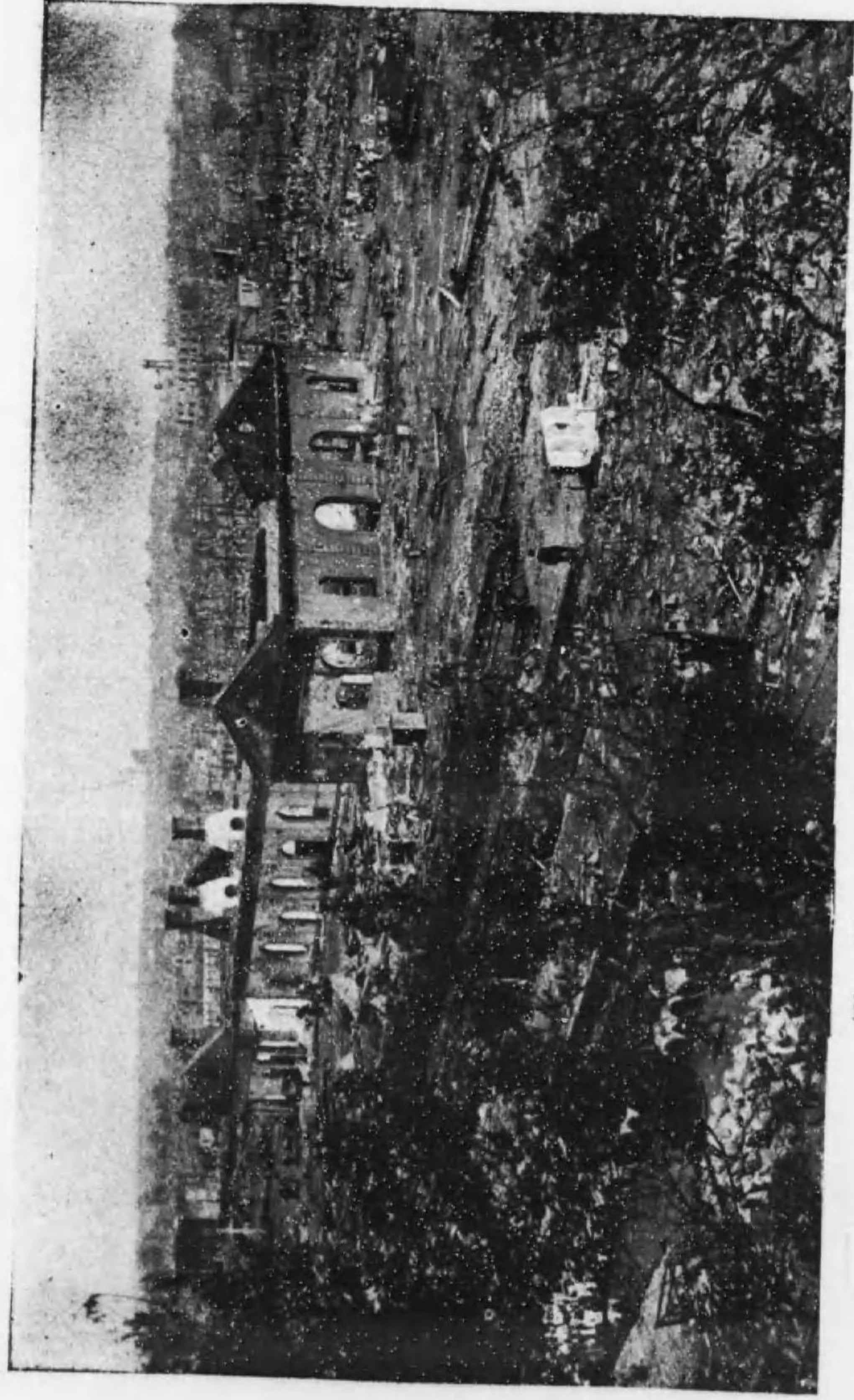
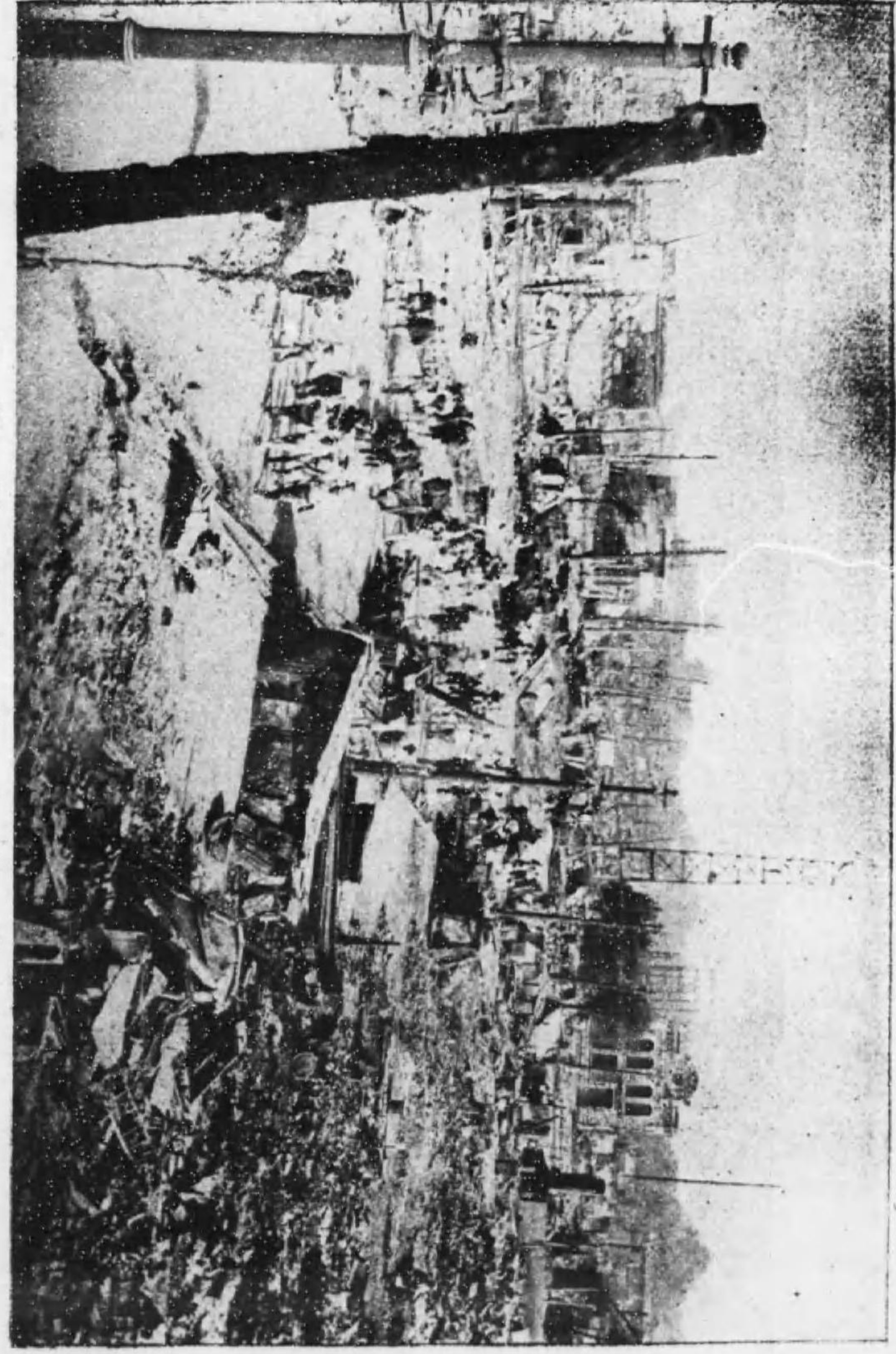
飯田町驛附近



骨ばりかつた新橋驛

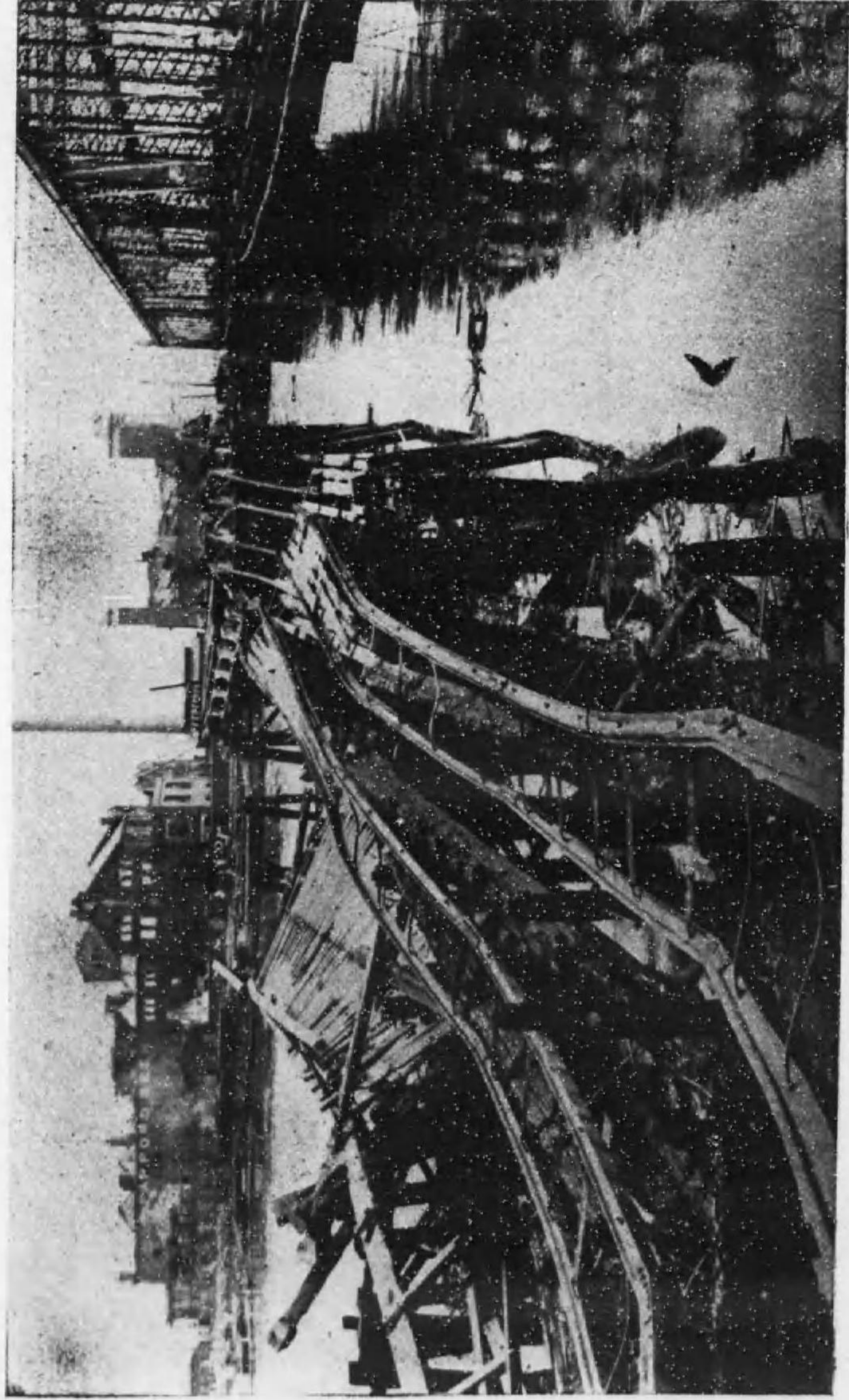
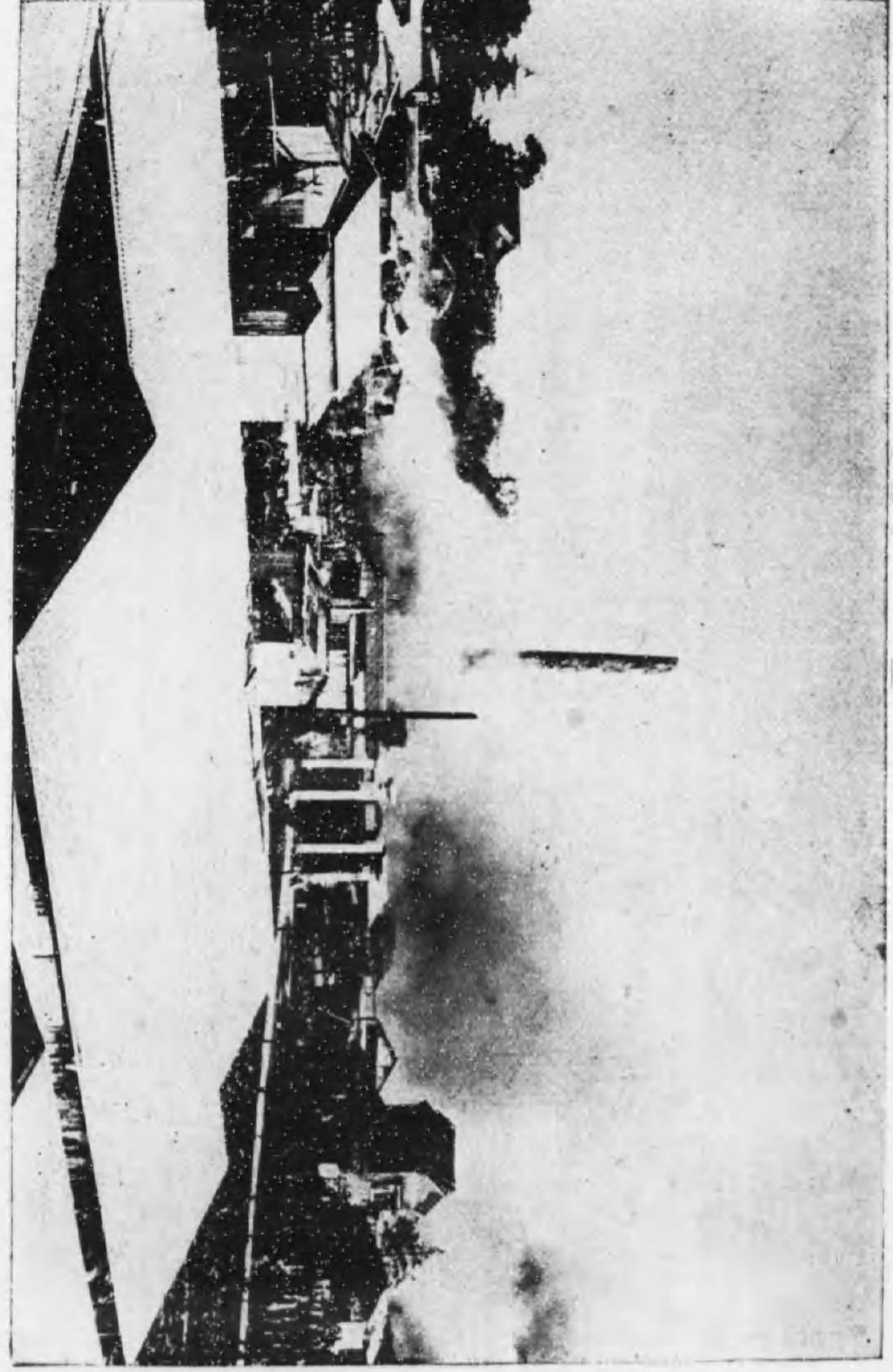


近附屋坂松路小廣野上



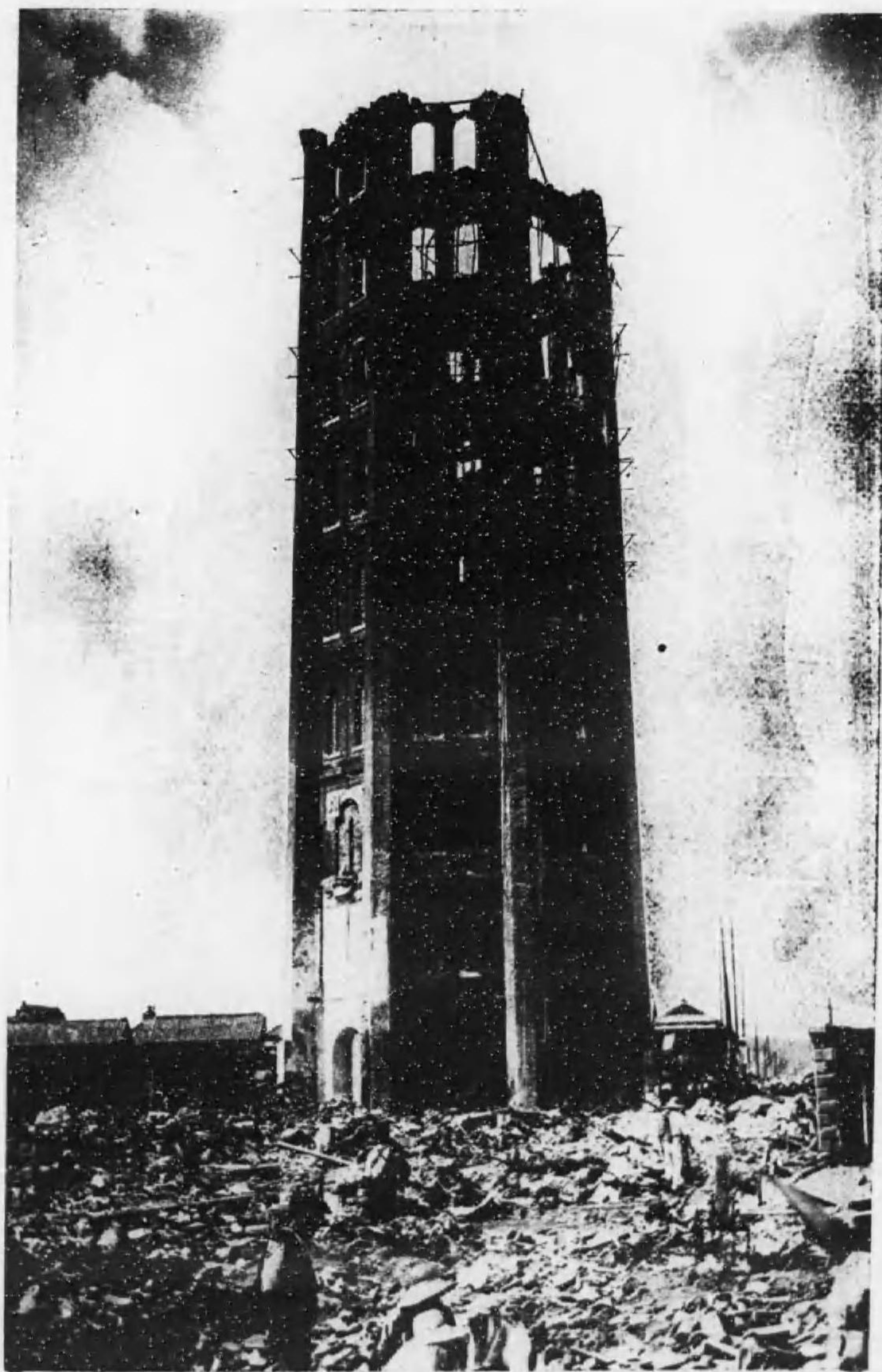
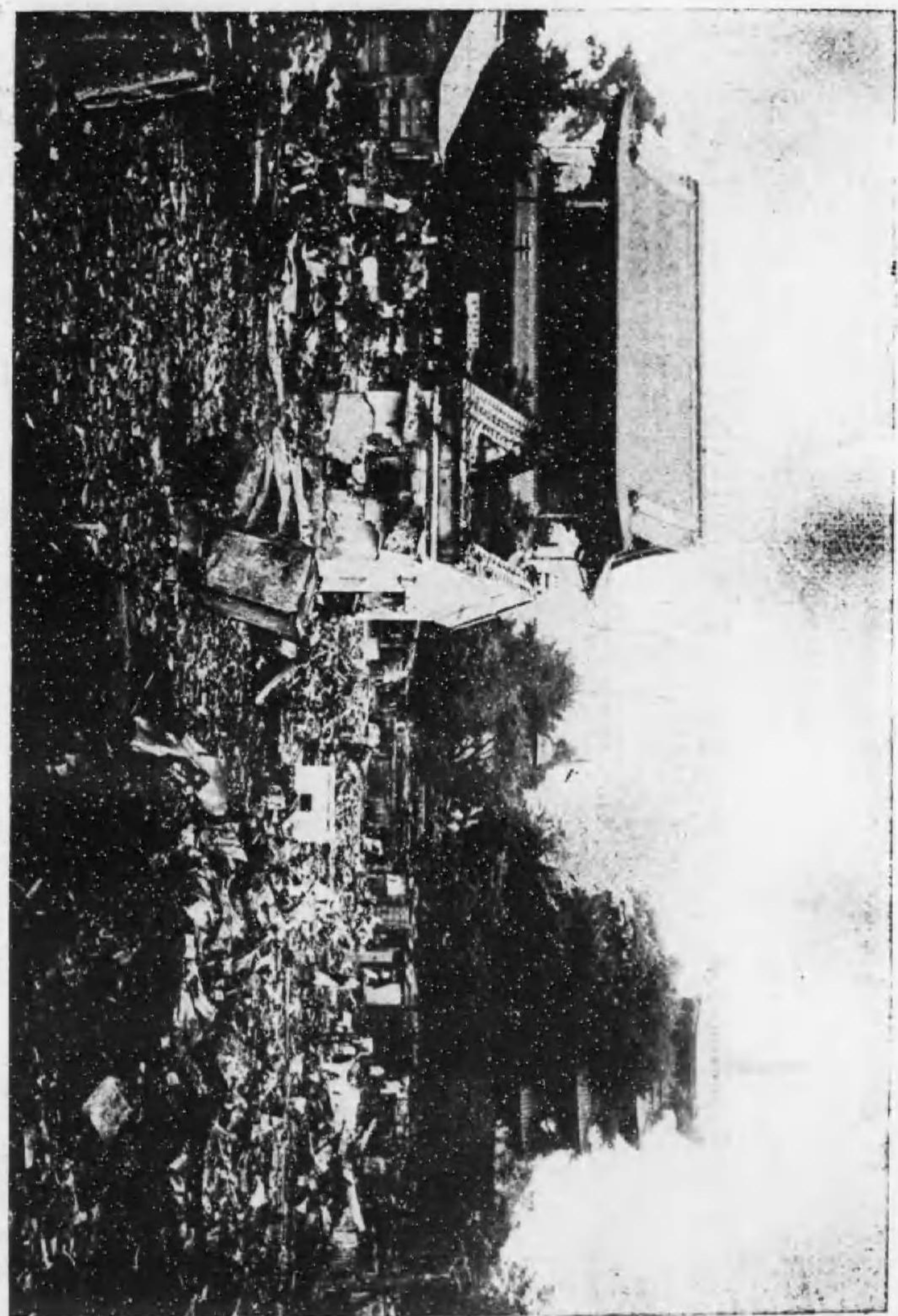
驛野上たけ焼に後最

燃えつつの浅草公園



大破せらる吾妻橋(左方は建物)

觀草淺たれ忍を失燒に的駭奇

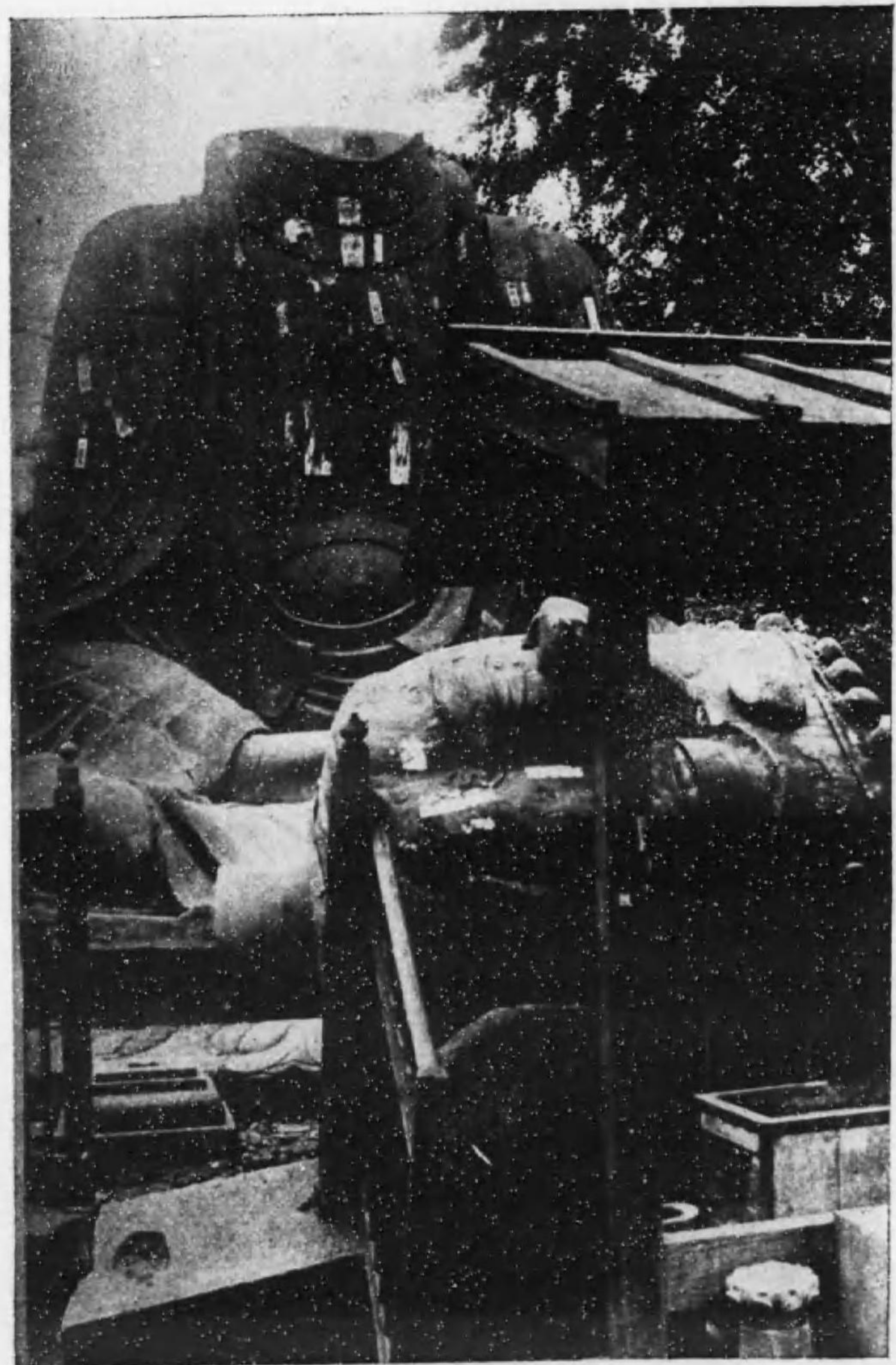


階二十物名草淺たれ折らか目階九

屋小ソタトの前橋重二たつ埋で者難避



。たし難避とへ内の丸へ内の丸は者災耀の橋本日・橋京



佛大の野上たつ落の首で震地



像銅郷西の飾盤滿で札の人ね尋



楠公銅像の貼札



民難避るすと帯地全安を路線道鐵

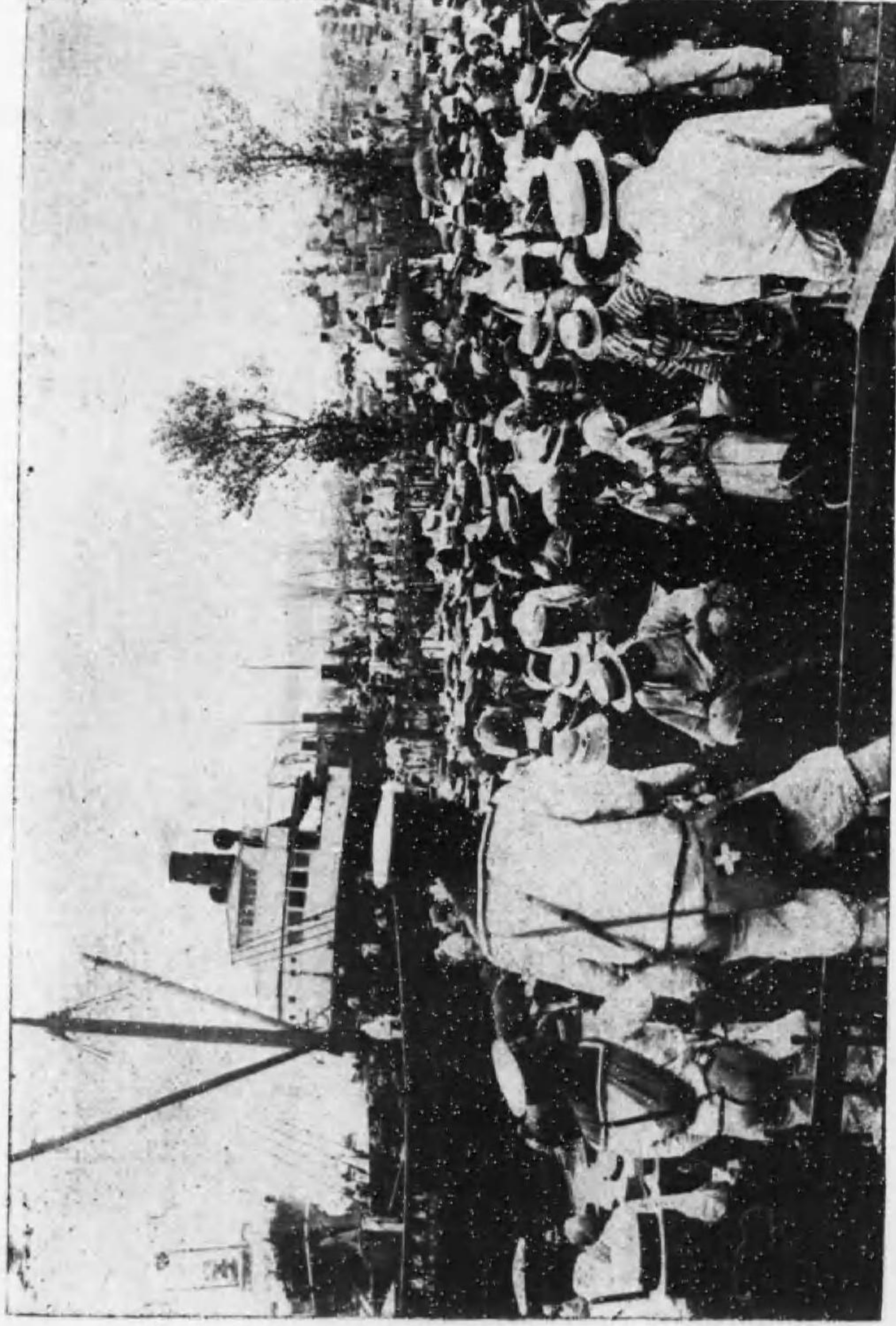
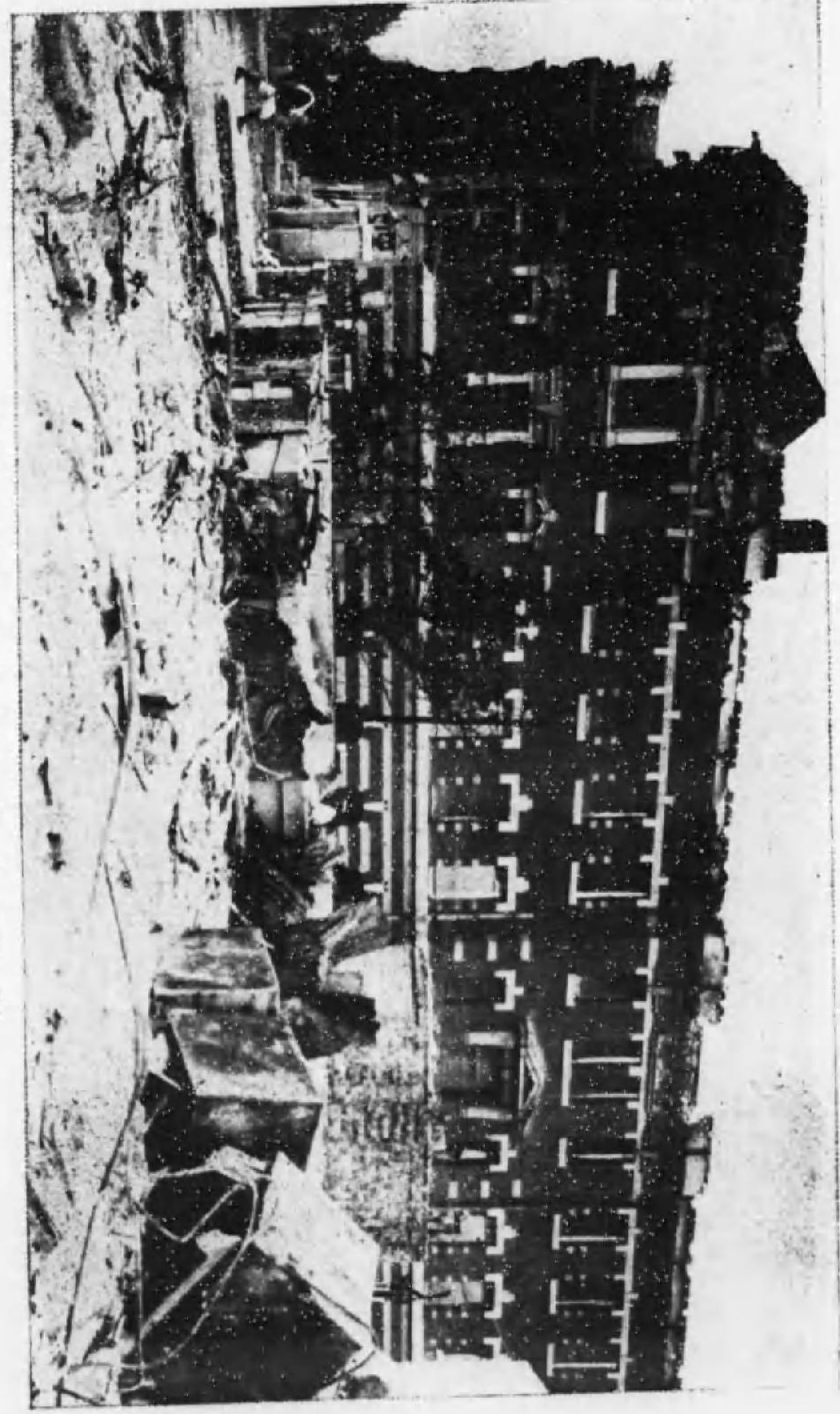


園公谷比日たて果り變



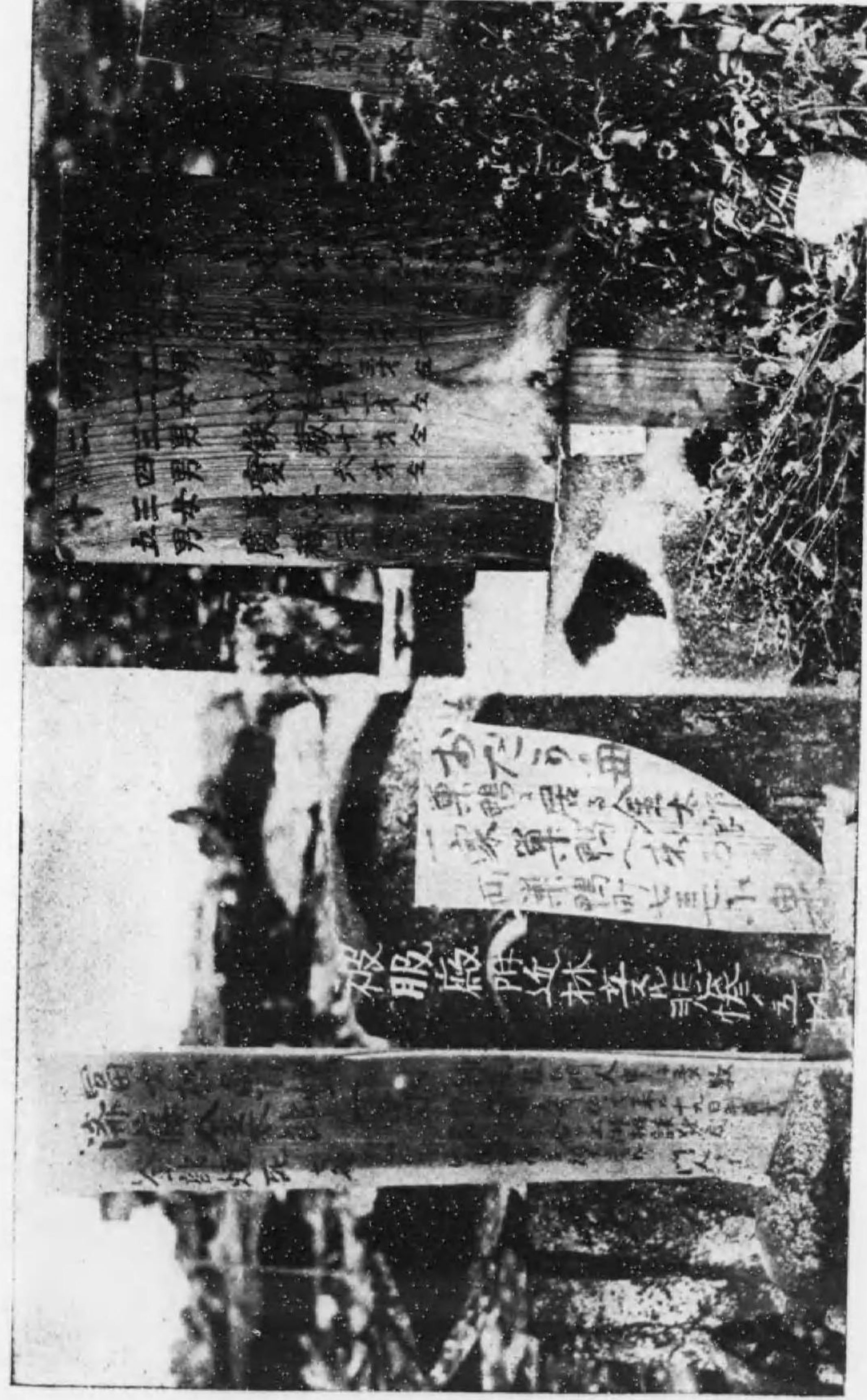
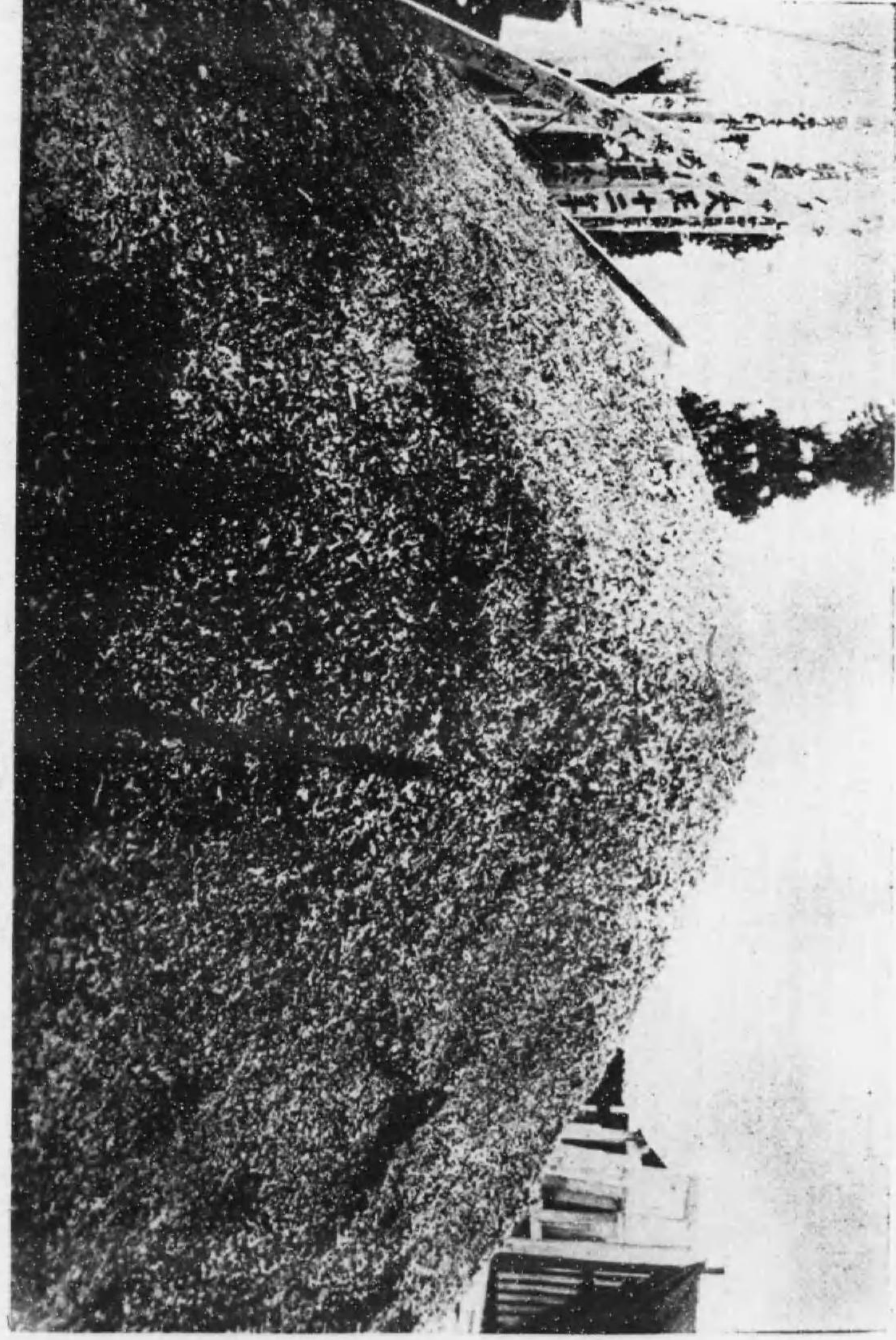
者災罹る作を列行に米給配

避難民の住となつた東京驛

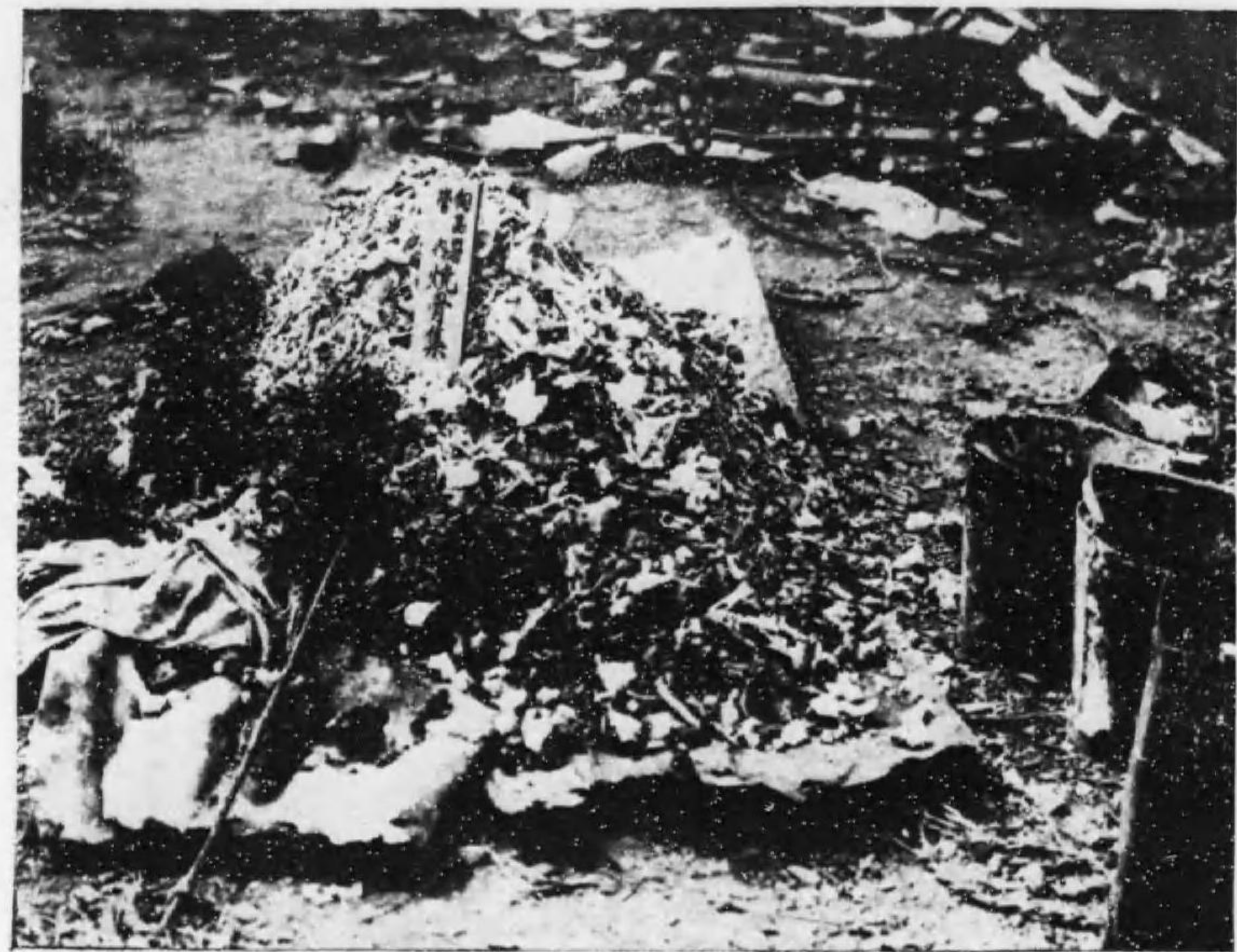


故郷へ（芝浦に於ける軍輸送）

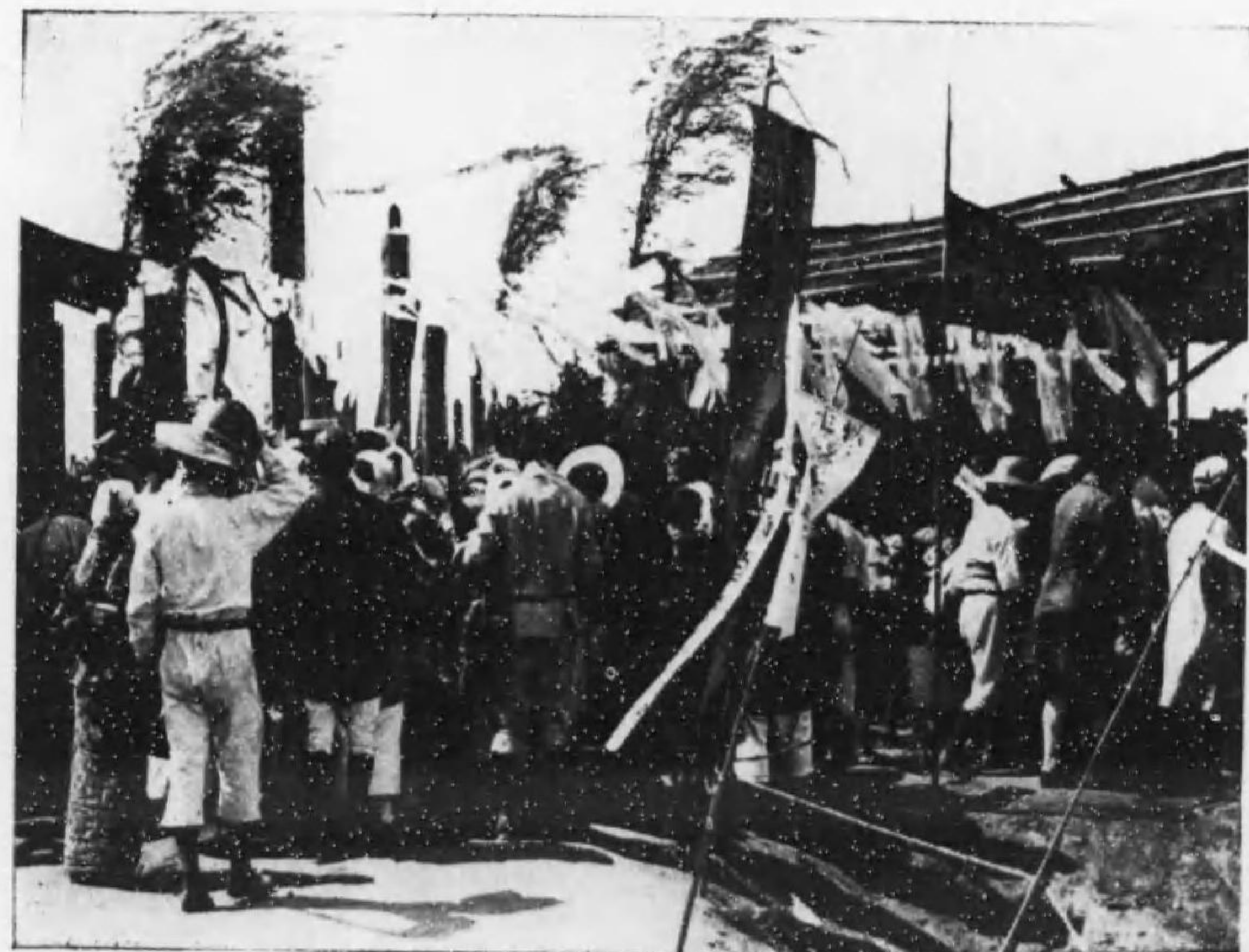
(山の骨白) (二) 跡跡服被の々啾哭鬼



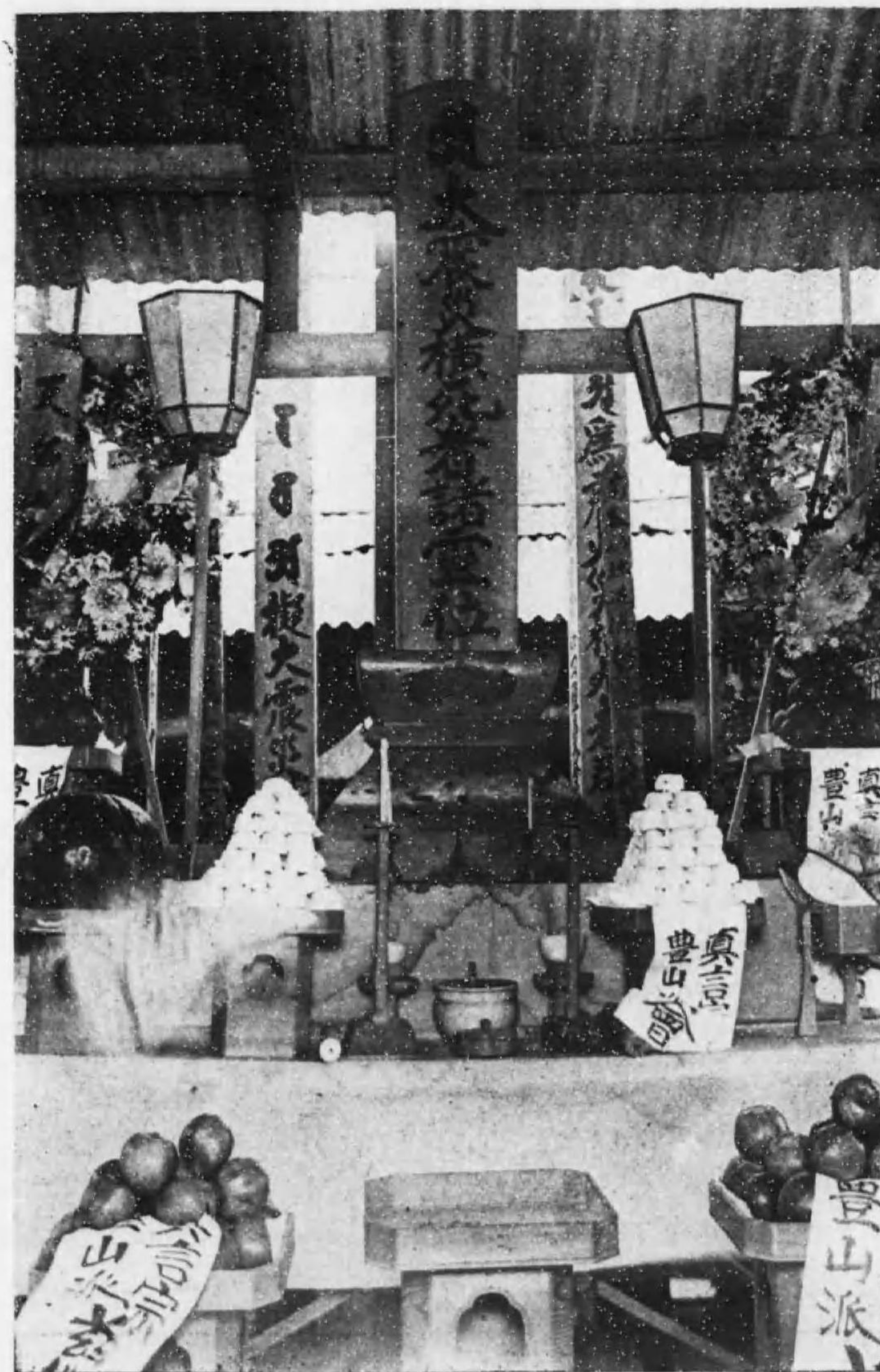
(札の人ね尋るす立林) (一) 跡跡服被の々啾哭鬼



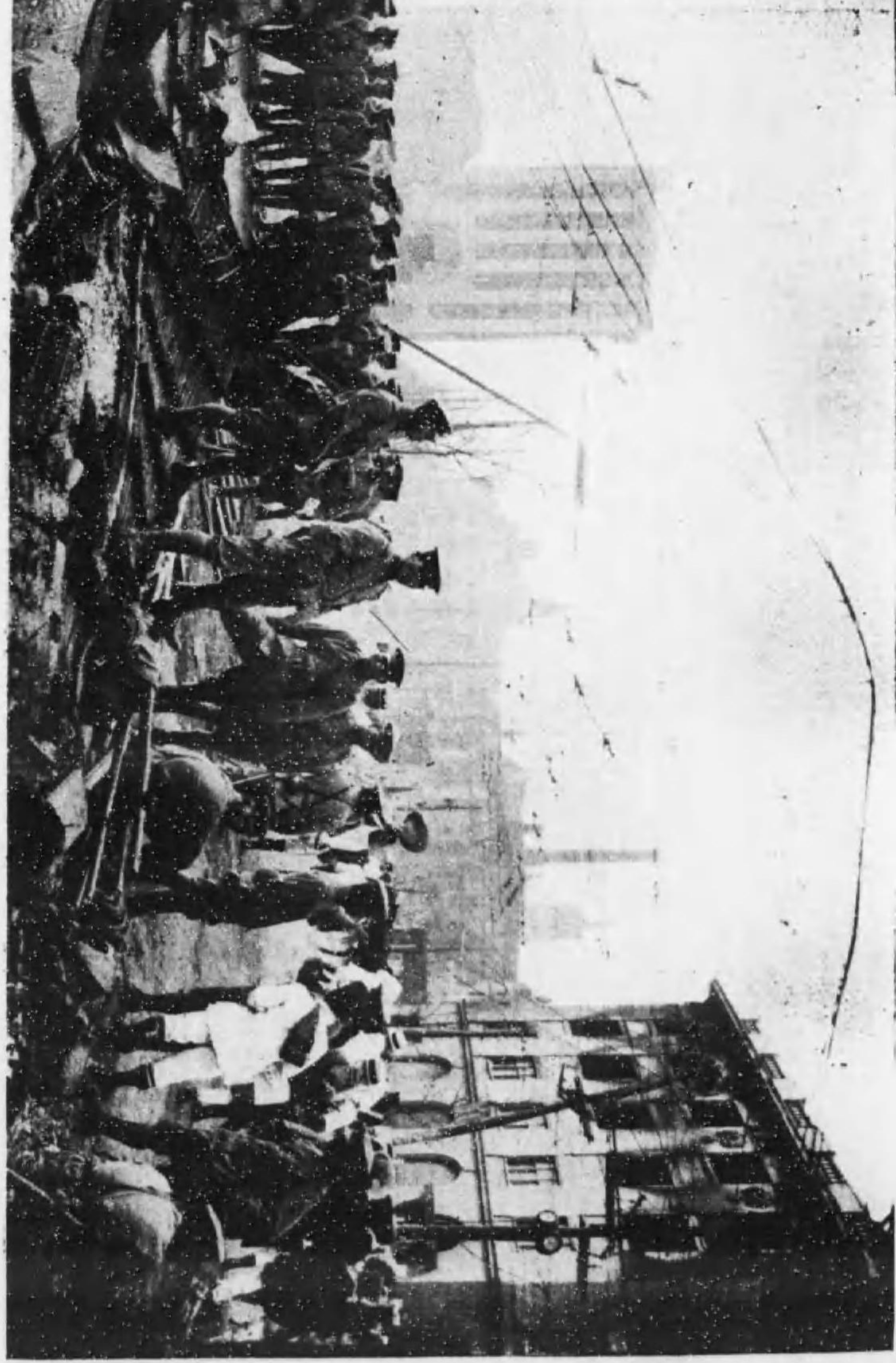
(骨焼たれらめ繻) (四) 跡廠服被の々啾哭鬼



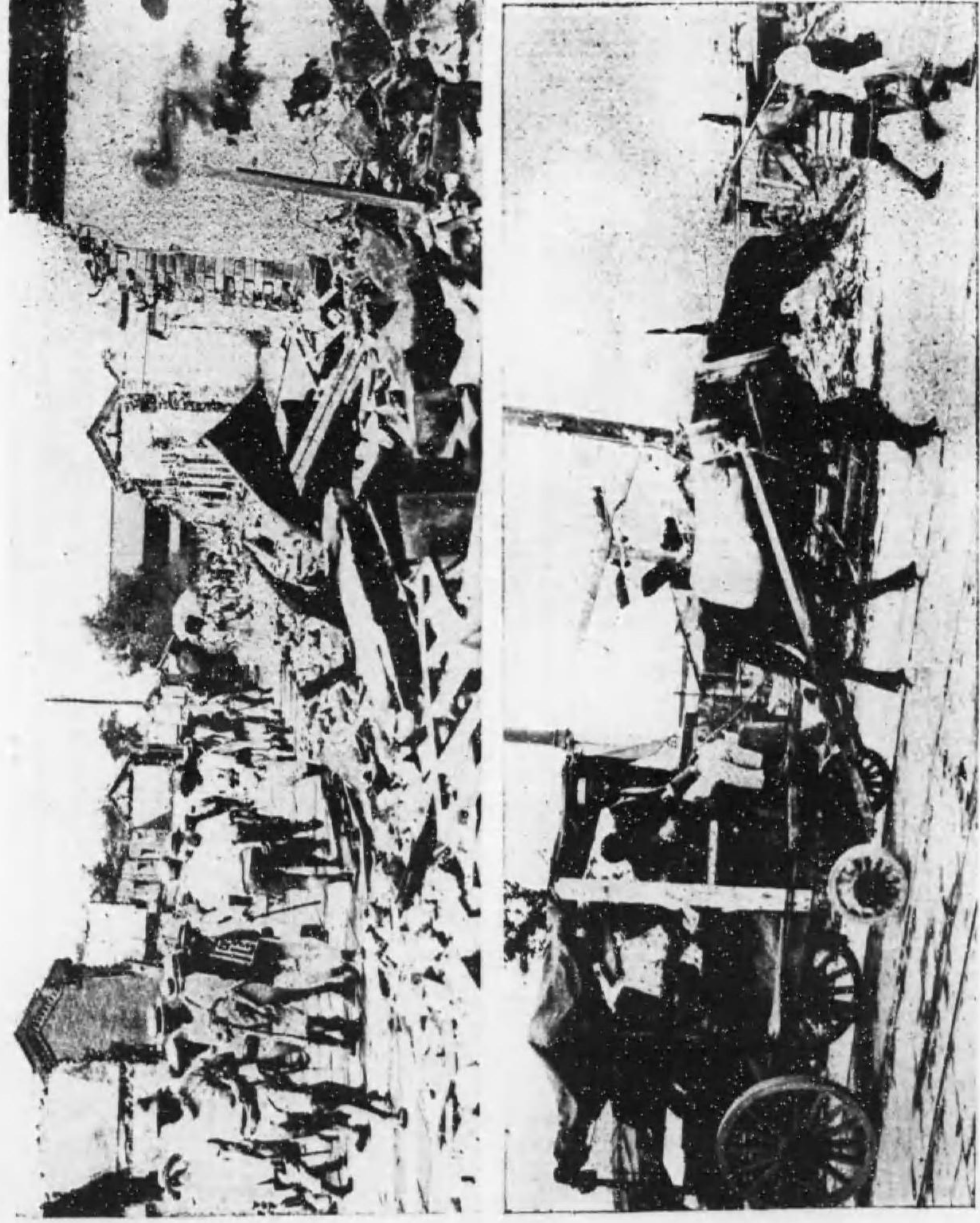
(鬼 餓 施) (五) 跡廠服被の々啾哭鬼



(壇靈の派各教佛) (三) 跡廠服被の々啾哭鬼

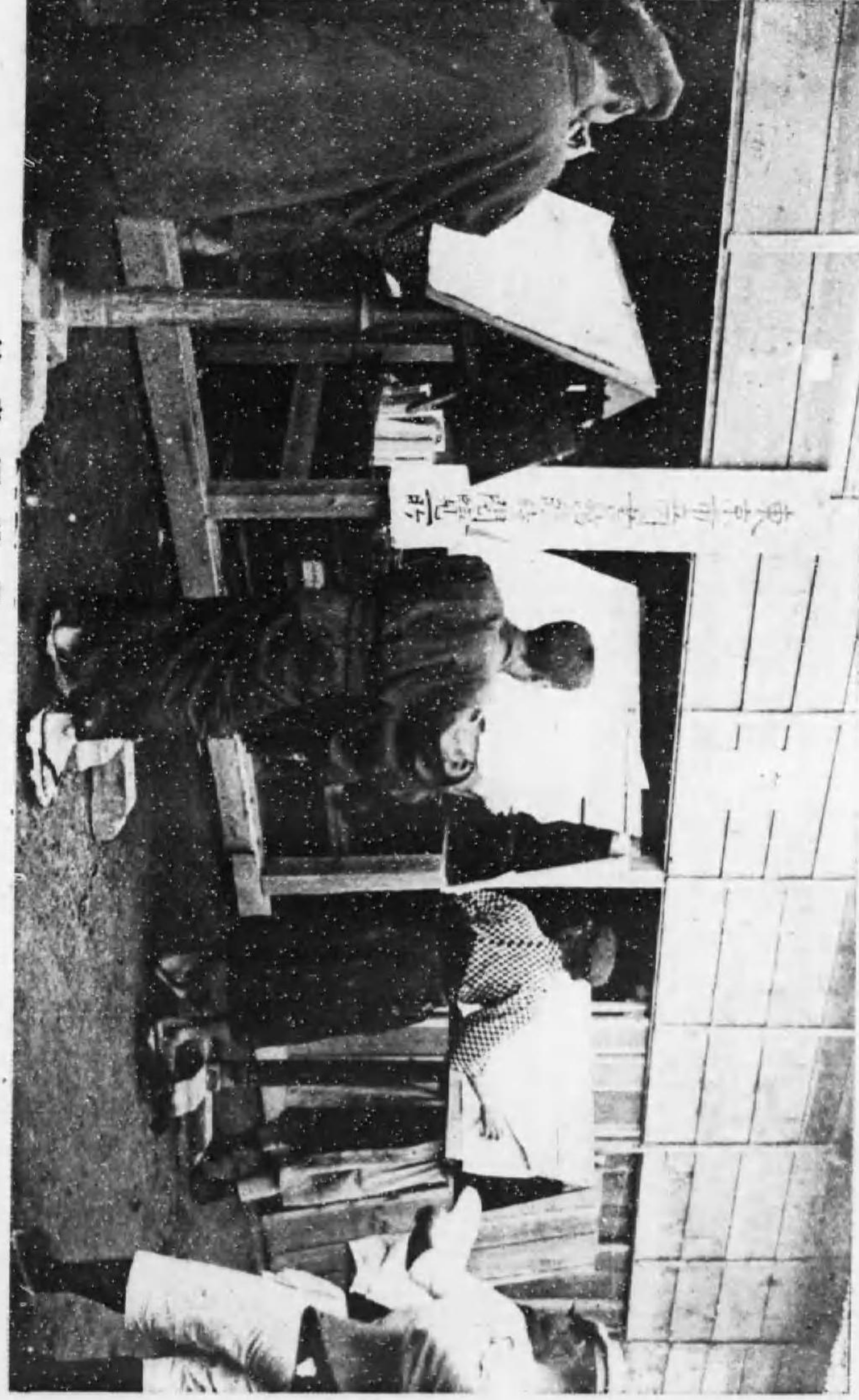


(上圖) 交通機關を失つた東京人



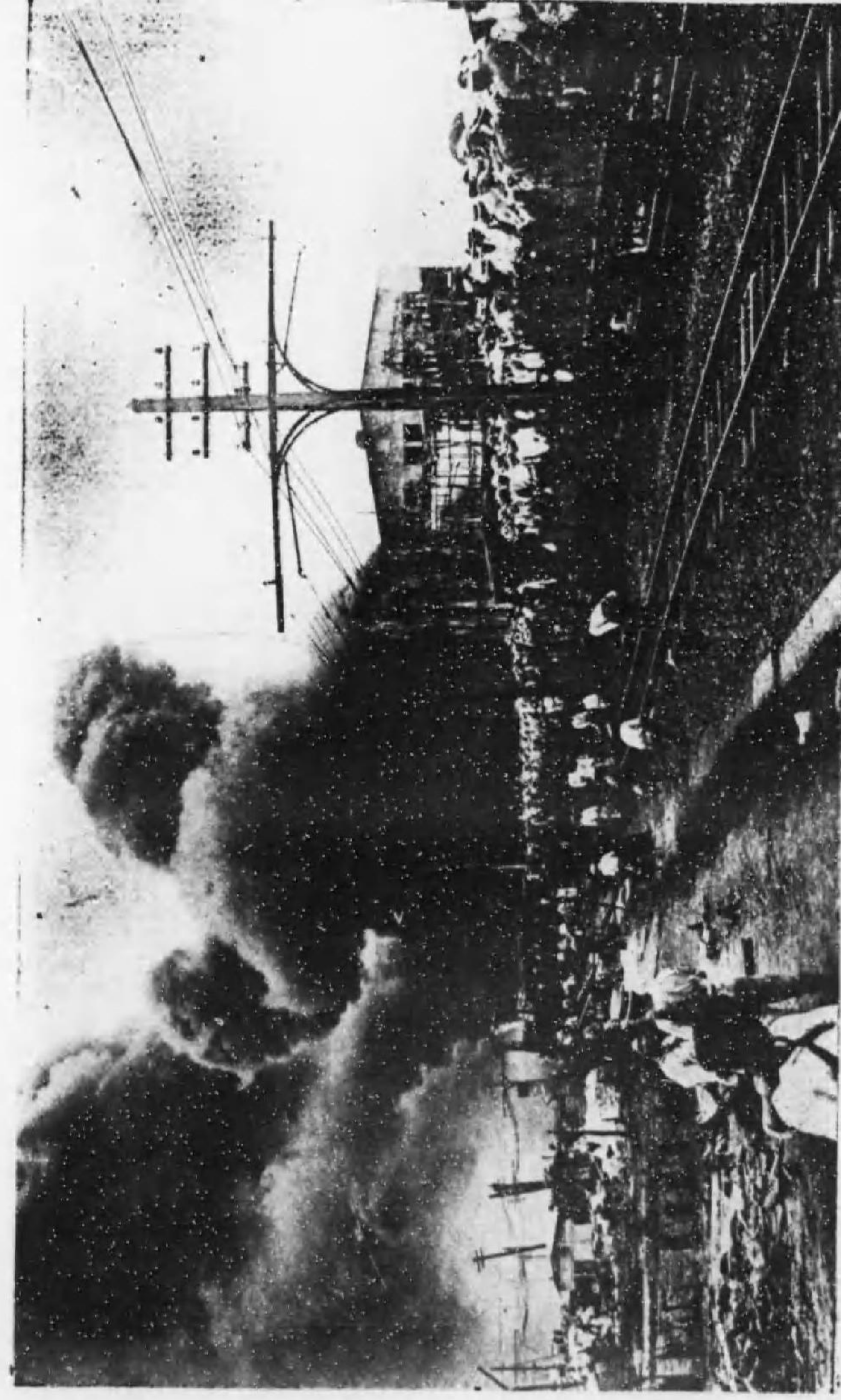
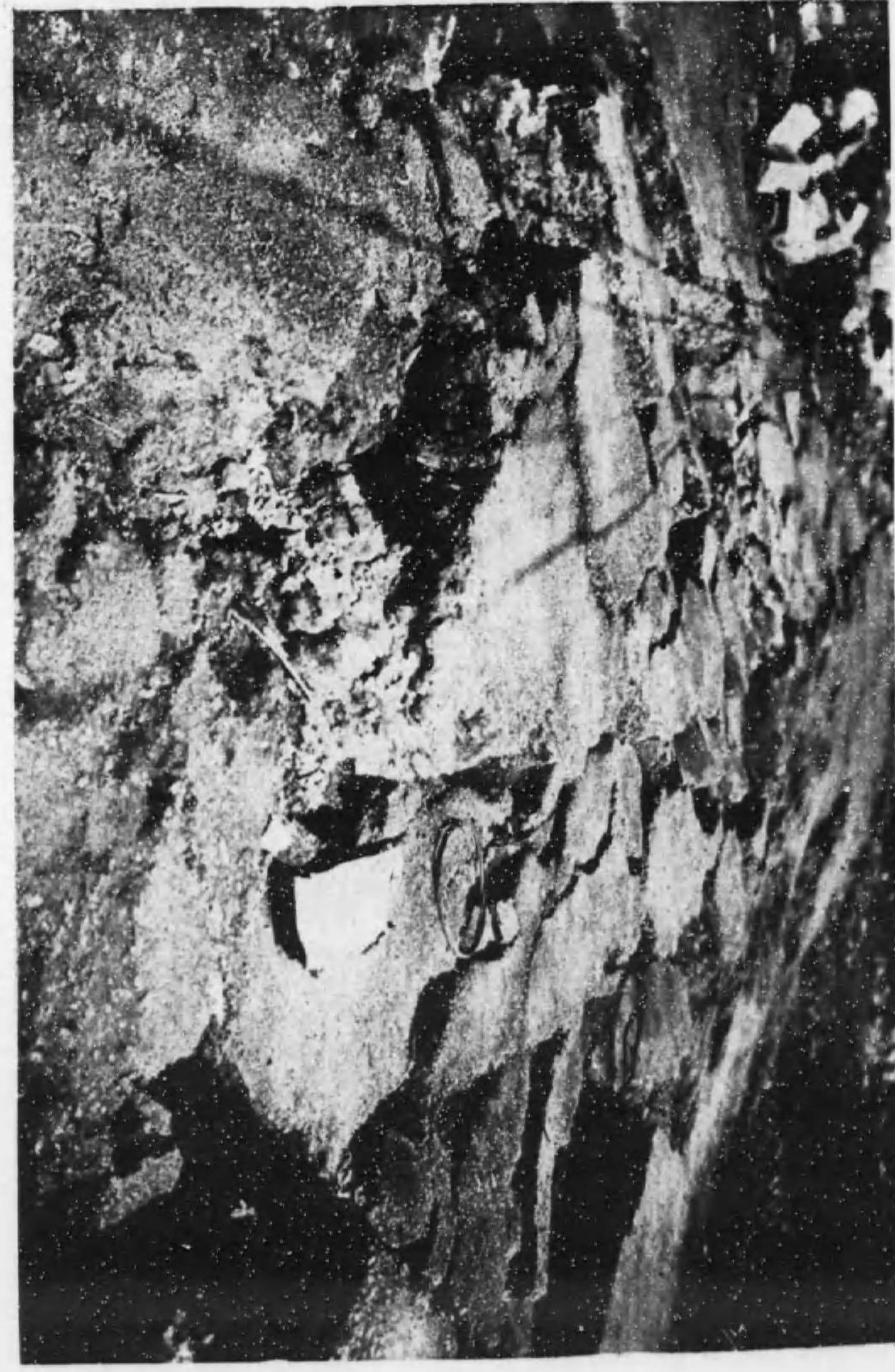
(下圖) 輕便馬車 (荷馬車の早變り)

館 書 園 設 假 の ク ッ ラ パ 野 .上



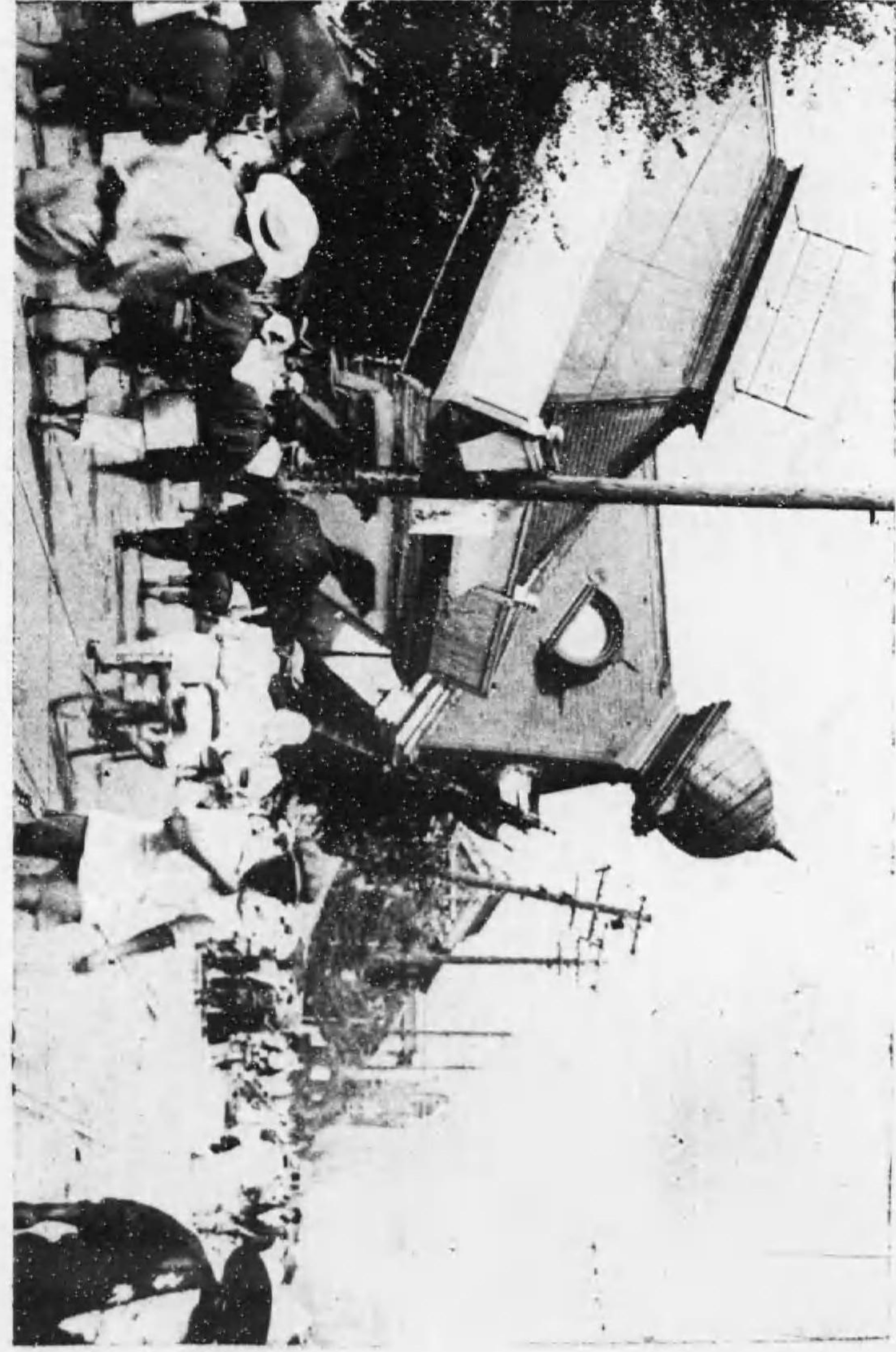
所 談 相 の 人 婦 れ さ 出 焼 た れ ら け 設 に 野 上

横濱附近の大割れ



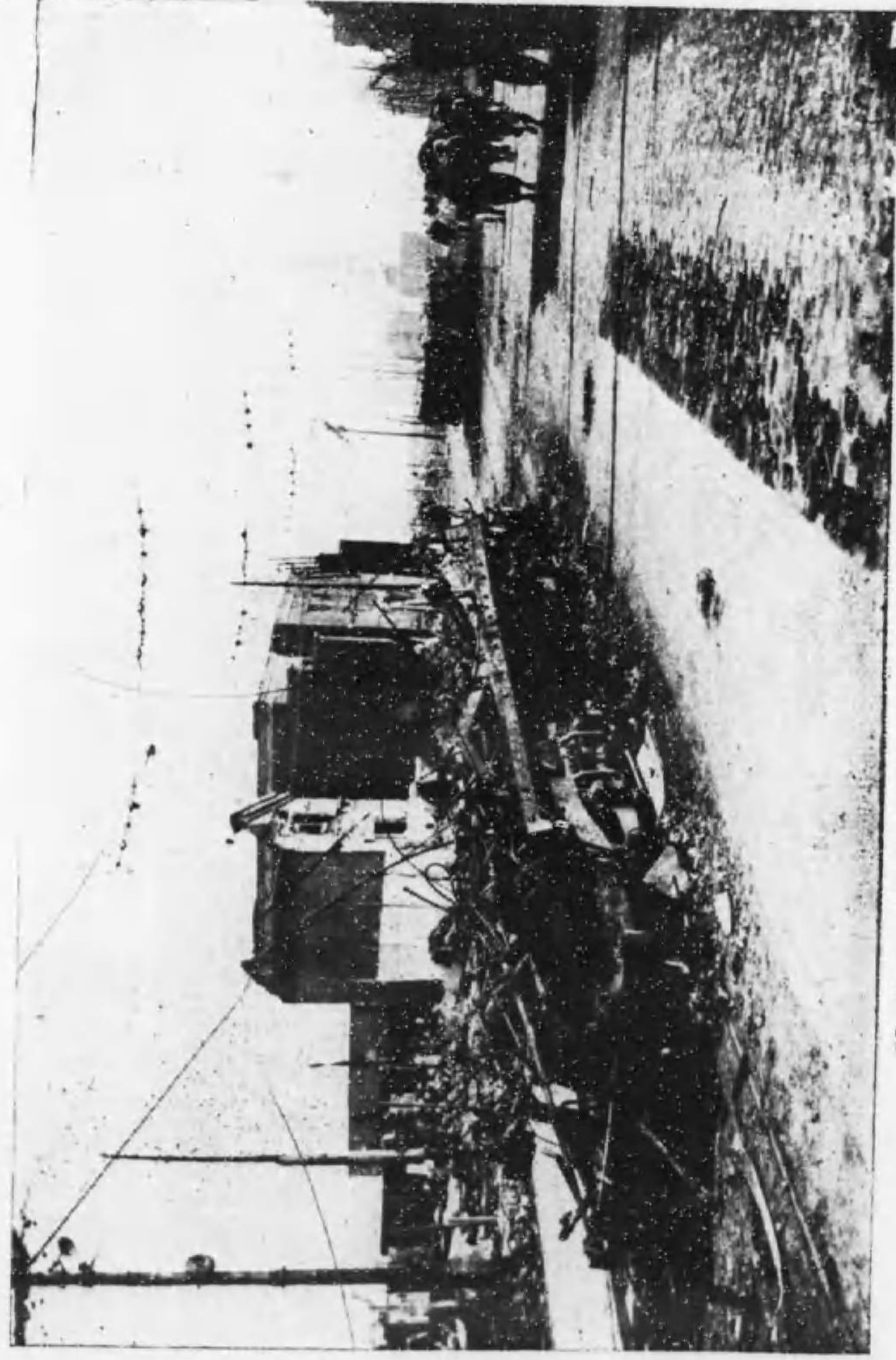
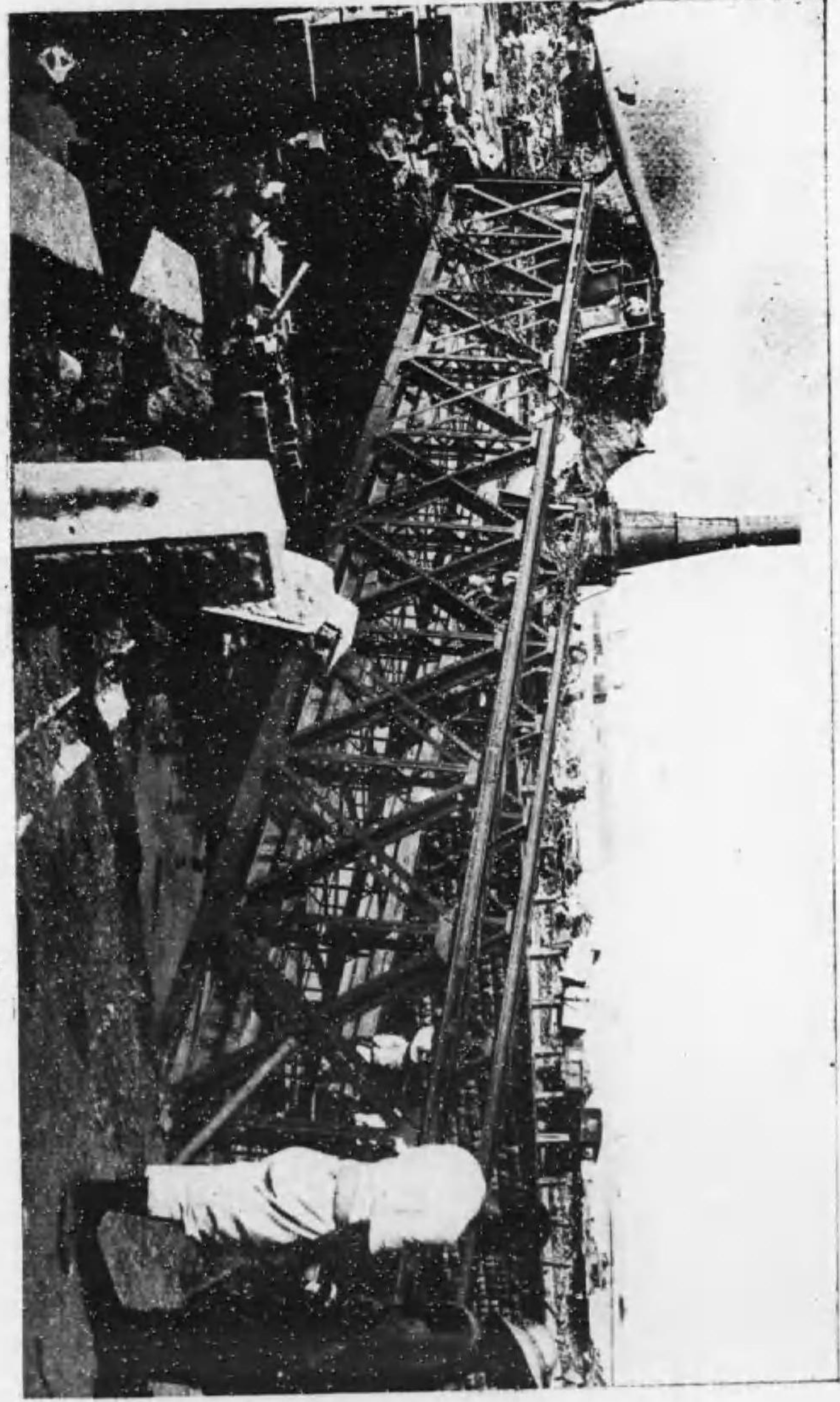
横濱櫻木町へ押寄せた避難民

銅坂せ横濱の大商店



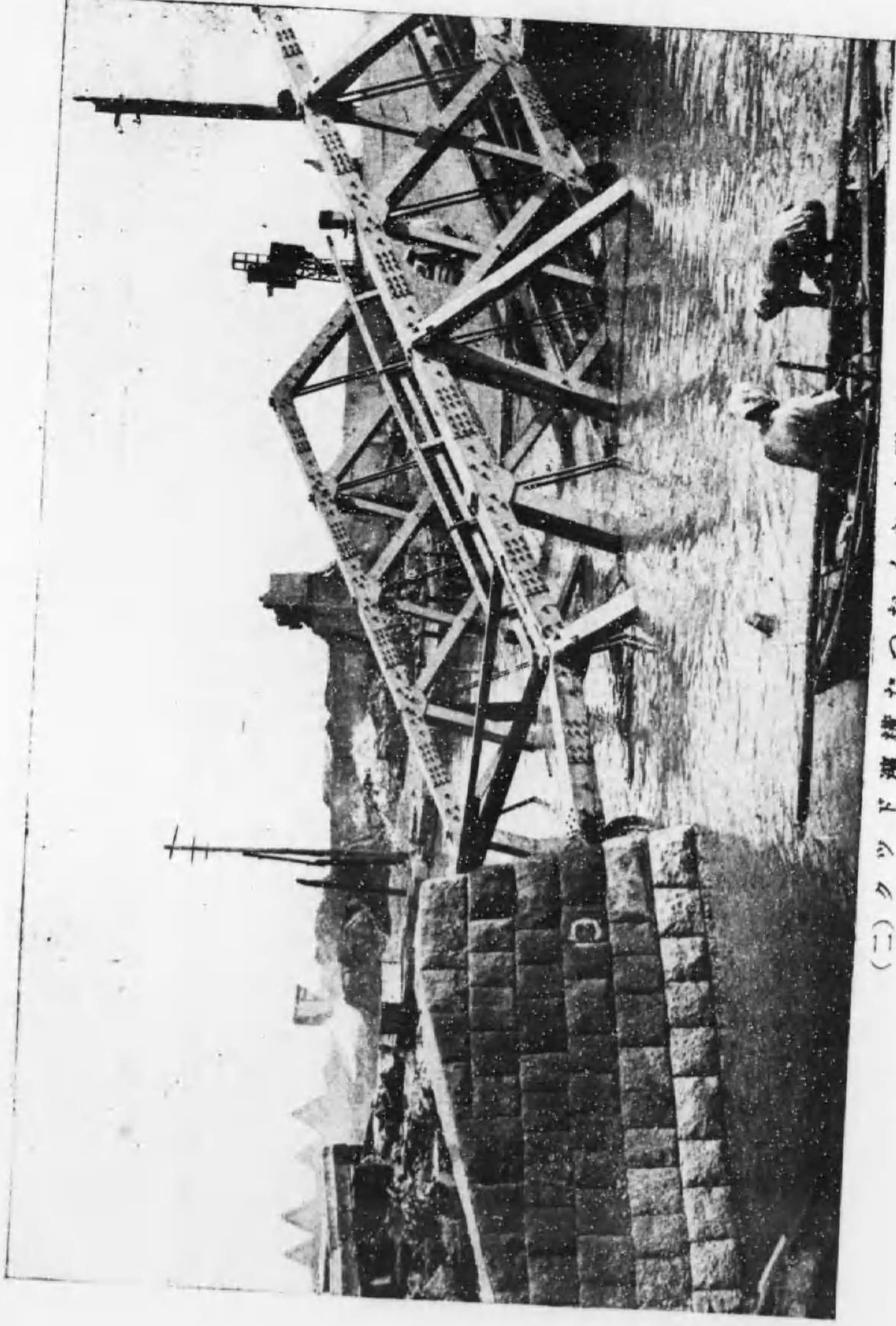
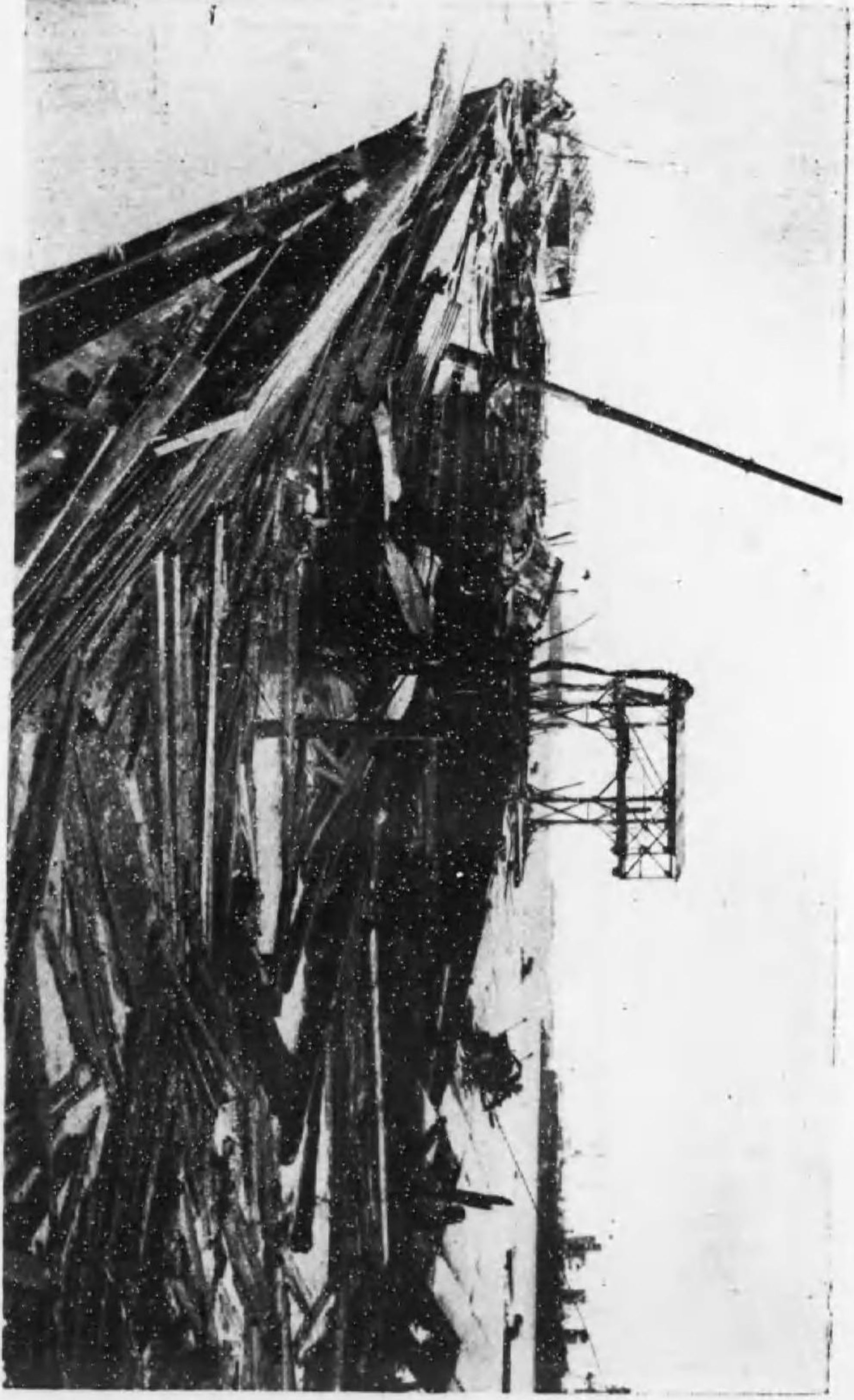
妻慘極のため横濱木町通

(一) クラウド演横たつなくとも形跡



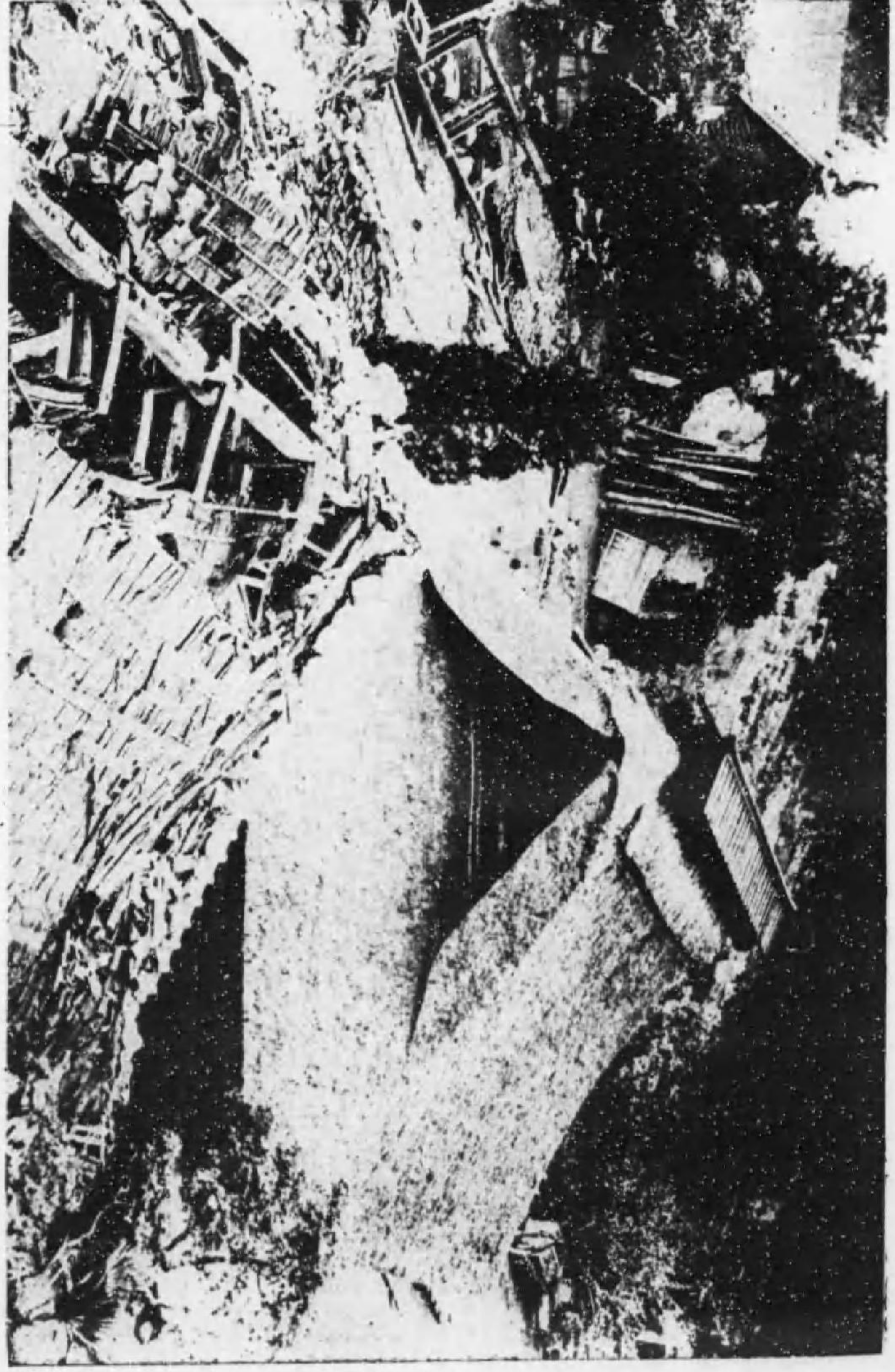
鹽尻の車電内市演横るはた横に上路

橋樑潰壊たつに々々茶蔵

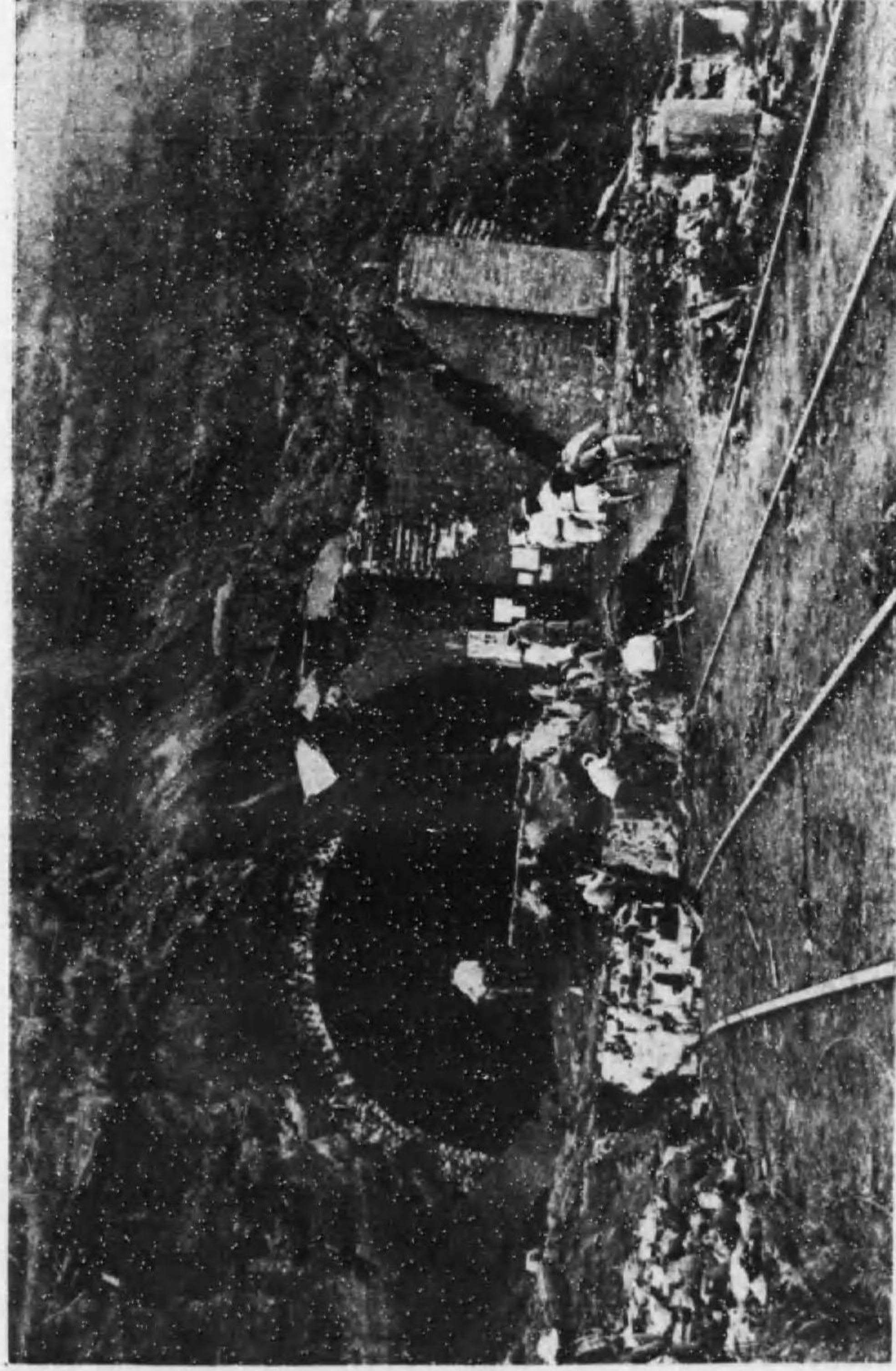


(二) クラッド潰壊たつに々々も形跡

神奈川縣木附町の惨状

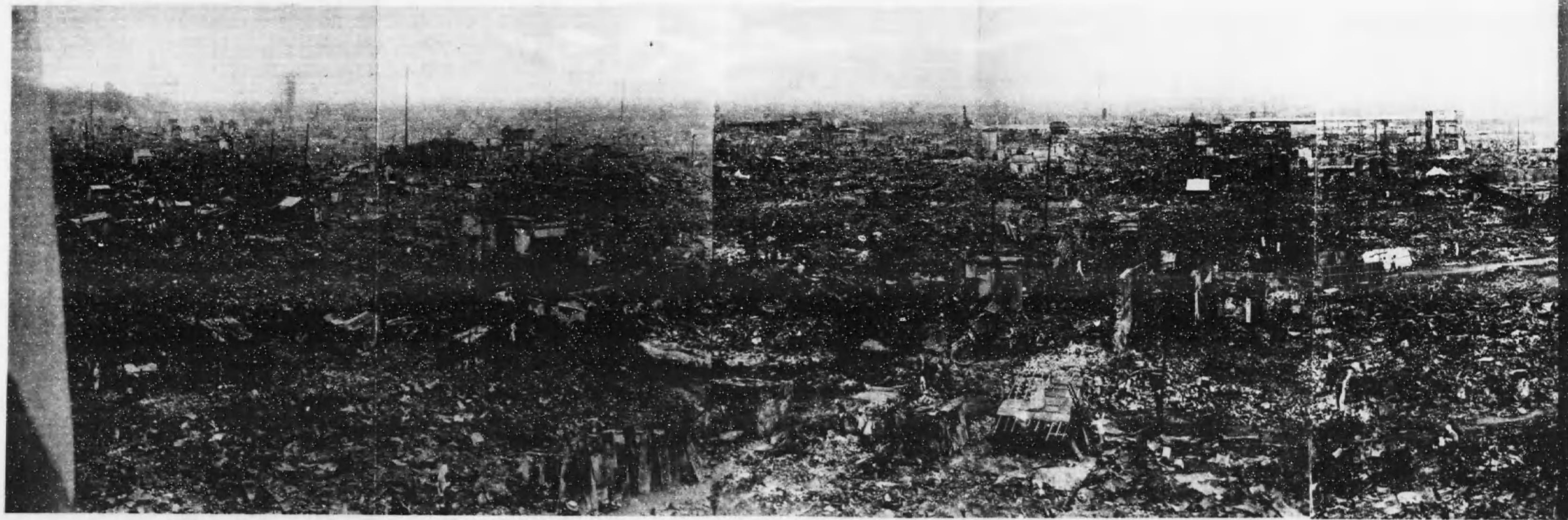


一節もなれ偶八會宮



ルネント根箱るせ遺崩





序

大詔渙發、帝都復興の大業、今や着々其緒に就かんとす。禍を轉じて福と爲すは、容易の業にあらざる事勿論なりと雖、國民にして斷じて輕佻浮華の風を去り、剛健質實自彊不息の決心の以て之に臨めば、何ぞ必ずしも難しと言はん。復興の大業、十年にして成るも五年にして成るも、要は國民の覺悟如何に在矣。

今回の震災に際して、上皇室の垂れ給ひたる廣大なる御仁徳に就ては申すも畏し。國民を舉げて罹災地救助に全力を竭し、就中各社會事業團體、全國救療班、全國在郷軍人團、全國青年團諸子が、秩序維持に罹災民救護に不眠不休の努力を致したるは、眞に嘆賞に餘りあり。若夫れ、世界各國の我國に寄せたる熾烈なる同情に至りては、正に人類相愛の崇

高なる精神の發露として、我國民の感謝措く能はざる所也。大正震災記
發刊に際し、一言所懷を述ぶ。

大正十二年十一月

東京市長 永田秀次郎

緒言

- 一、相模灣を中心として起れる九月一日の地震は、安政以上の強震と云はれ、東京を始め關東一帯に亘りて、甚大なる被害を與へた。特に東京にありては、地震と共に大火災起り、炎々四十時間、之れが爲めに帝都の中樞地區は全滅に歸して、一望際涯なき燒野原と化したのである。
- 一、即ち燒失戸數三十萬戸、損害約百億圓、而して慘死者十餘萬人（震死行方不明を含む）と云ふ驚くべき數字を示してゐる。正に有史以來の大災禍で、猛火と地震に追ひまくられ責め抜かれた三日間の光景は、眞に凄慘を極めたものであつた。
- 一、更に之れに對する政府の應急所置、帝都復興の大業、至れり盡せる皇室の御救恤、全國民を擧つての救援、熾烈なる世界の同情等は、併せて國民の子々孫々に傳へらるべき一大記録である。
- 一、本書は大正震災記録編纂會同人諸氏が、震災以來あらゆる方面につきて蒐集したる材料を

取捨撰擇し、極めて平易に記述したるもので特に正確と云ふ點に重きを置いたつもりではあるが、當局の調査未完等の爲め尙ほ誤謬の指摘すべきものが必無なりとは云ひ難い。それ等は暫らく御諒恕を請うてすべて重版の際訂正する考である。

大正十二年十月

著者識

大正震災記 目次

東京の破滅……………一

大震來……………大火災……………延焼四十時間……………焼失戸數と罹災者……………焼けた町と主なる

建物……………損害百一億圓……………人口の現在……………混亂の避難所……………焦土の都……………臨時火

葬場……………地方へ、地方へ

大災禍と政府……………三七

災禍の洗禮……………三大勅令……………不眠不休……………陸軍の活動……………海軍の活動……………東京府

市と警視廳……………青年團と在郷軍人……………救護團體

戒嚴令下の東京……………六五

帝都の不安……………戒嚴區域の擴張……………東京の警備……………軍隊の配置……………自警團……………流

鮮人保護……………七七

聖旨を體して……………總督府の收容所……………猛火中の鮮人美談……………相愛會と親友會……………生麥の夜警

哀話感話……………八一

被服廠跡……………油堀地獄……………呪ひの池……………親子を引離した船……………風呂敷に包んだ生首……………一人の父……………焰の下で念佛……………死遅れた老母……………此のチビが可愛想……………愛兒の死骸を焼く……………攝政宮、謁を賜ふ……………五發の非常砲……………宮城守護の勇士……………富川町の小父さん……………義人表彰……………住友銀行の決死隊……………殉職校長……………震災餘話……………門外不出

皇室御救恤……………一〇九

御内帑金壹千萬圓……………皇后宮の御仁慈……………攝政宮の御痛心……………銘仙矢絢の良子女

世界を舉げて……………一二三

王……………秩父宮の御慰問……………十二宮家の御同情
全米に漲る同情……………英國官民の義捐……………伊太利、佛蘭西、和蘭……………墨西哥と智利……………支那と波蘭……………外人の嘆賞

帝都の復興……………一三五

大詔降下……………聖旨奉體……………帝都復興審議會……………復興院成る……………都市計畫……………火災
保險金……………財界名家の意見……………黎明の都……………露店繁昌記……………バラック街

關東一帯……………一八三

横濱市全滅……………湘南地方……………房總地方……………埼玉縣の被害……………山梨と茨城

大震の觀測……………二〇九

安政以上の強震……………斷層は相摸灣……………發表中……………三つの斷層地震



大正震災記

江戸時代の大震災大火……………

安政の大震災……………明暦の大震災……………桑港の大震災

四

大正震災記目次終

一、大震來！

—正午前二分—

大正十二年九月一日、あゝ此の日こそ極東日本の首府として、燦然たる文化を誇つた東京市が、有史以來の大災禍に、世界を驚倒せしめた一大記念日である。

九月一日の朝は雨が降つた。うなりを立てて風が吹いた。二十十日を明日に控えて、あらしを思はせる空であつた。それでも十時を過ぎる頃には雨が止んで、又たむし〜と曇くなつた。正午前二分——午前十一時五十八分四十四秒、ランチは用意されて、もう誰れもペンを描いた。その瞬間、ゴーツと地鳴りが聞えると同時に、一大地震がグラ〜と起つた。

煉瓦造りと云ふ煉瓦造りは殆んど壊れて、土蔵と云ふ土蔵は悉く落ちた。電信がごまる。電話がごまる。汽車も不通になれば電車もがた〜と立往生をする。道路は至る所龜裂を生じて、あつちにもこつちにも崖くづれが起る。

馬場先の邊、煉瓦積みの大建物がグラ〜とくづれた。工事半以上に進んでゐた内外ビルディングであつた。三百餘名の男女人夫が其の下敷きになつて一人残らず死んだ。建築費三百萬圓、華麗を極めた裝飾を以て知られた東京會館も、二階から下がメチャ〜になるし、御蔭の石垣も所々崩れた。

米國最新式鐵筋コンクリートの三階建て芝區三田四國町の日本電氣會社工場も、二分間で潰れて、折柄出口に居合はせた十數名を除くの外、社員職工四百名が、折重なつて惨死した。

淺草名物の十二階は、烈しく一と揺れ揺れたかと思ふと、忽ち九階目から凄まじく倒れて、てっぺんに居合はせた三人の客は、もんどり打つて池に落ちた。吉原洲崎は軒並みに潰れて、數多の娼妓が梁に打たれて死んだ。その又た娼妓の解放を叫ぶ神田の救世軍本營も壊れて、人道の戦士指田少佐は、頭蓋を碎かれて血に染まつて斃れた。

激震約五分、やつと一先づ静まつたかと思ふと、又たゆら〜と第二震が襲つた。ト、忽ち濛々と黒煙が上つて、ワーツと恐ろしい叫喚が起つた。

二、大 火 災

—火元八十三個所—

「火事!」と驚いて立ち上つ。時には、もう神田からも、日本橋からも、丸ノ内からも、一齊に火の手が上つてゐた。警視廳第一回の調査によつて、九月十二日の新聞は、斯う報じてゐる。

「激震と共に倒壊家屋多数を出し、次いで八十三個所からの出火となつた。先づ十六秒を置いて十一時五十九分芝愛宕町の慈惠院、高輪御殿の寶物館、本郷帝國大學病理研究所、萬世橋方面、淺草區内四個所から出火し、各消防組の活動に移らんとする午後零時六分までには、早くも本所の十四個所を筆頭に、京橋十、深川八、麴町淺草各七、日本橋 牛込、赤坂、四谷、神田、小石川、下谷の各一個所合計十二區に亘つて五十三個所、即ち第一回の激震後僅か七分間に六十一個所から發火し、更にその日の夜より翌日にかけて二十二個所、遂に八十三個所から火を出すに至つた。中にも眞先きに火を出したのは大抵藥品又は油、セルロイド等を取扱つて

る帝大、慈惠院、學校又は商店であつて、倒壊せる家屋よりの出火は時恰も晝時であつたのが、多くの因をなしてゐる、飛火は割合に少く判明したのは七個所に過ぎない。然し原因不明のものも五十個所に及んでゐるから、此中には飛火や、或は放火と認め得べきものもないではない。而して火はどう云ふ流れを作つて進んだかと云へば、當日の風の方向から測ると初め十四五メートルの速さを持つた南風が吹いて火を北に煽つた。一例を挙げれば有樂町一丁目一色活版所附近よりの火は風の方向に従つて警視廳帝劇等に延び、附近一帯を一となめにしたのである。處がその日午後六時頃より風速加はつて二十四五メートルとなつたばかりか、方向一變して西北風となり、西北より東南へ延焼したので火は廣がると共に所々に一大旋風を起し、消防の力によつて三十三個所の火は辛うじて消し止めたが、殘る各所の火は西北より東南に大火道を作つて猛進し、或は合して勢ひ愈々猛烈に、遂に帝都の三分の二を焼き盡したのである」。

更に消防本部の調査したる市内全部の發火場所及び原因は左の如くである。

發火時間	場 所	原因
(麴町區)		

一日午後零時一分 中六番町明治藥學專門學校
 同 零時二分 元園町麴町小學校
 同 零時三分 富士見町日本齒科醫學校
 同 有樂町一色活版所附近
 同 日比公園内松本樓
 同 大手町東京瓦斯電氣工業會社内
 同 零時五分 有樂町東京電燈會社内
 同 零時八分 宮城外苑帝室林野管理局
 同 内務省
 同 三時二十分 内幸町東京毎日新聞社裏
 同 四時三十分 大藏省
 同 六時二十分 虎の門東京女學館
 三日午前四時四十八分 麴町六丁目

不 藥 不
 同 同 同 飛 同 同 同 同 同 不 藥 不
 明 明 明 火 明 品 明

(神田區)

一日午前十一時五十九分 萬世橋方面
 同午後零時三分 今川小路一ノ三

(京橋區)

一日午後零時三分 岡崎町一丁目
 同 銀座芝浦モーター會社
 同 月島西仲通三丁目
 同 零時四分 靈岸島鹽町
 同 築地一丁目方面
 同 南小田原町海軍造兵廠
 同 同午後五時 南新堀町一丁目
 同 山下町方面
 同 加賀町方面

不 不
 同 同 同 同 同 同 同 同 不 同 不
 明 明

同

月島西仲通四丁目

(芝) (區)

一日午前十一時五十九分

愛宕町慈惠院醫科大學

同

櫻田本郷町靴店

同

高輪御殿寶物館

同 午後一時四十分

白金志田町五

同 午後九時

金杉一丁目

同 午後十時三十分

琴平町一

同

芝口一丁目方面

(赤) (坂) (區)

一日午後零時二分

田町四料理店なるこ

同 午後十時

榎町一

(四) (谷) (區)

同

藥品

不明

藥品

不明

提灯の火

不明

同

提灯の火

飛焔

飛焔

一日午後零時二分

新宿旭町

(牛) (込) (區)

一日午後零時

陸軍士官學校

(小) (石) (川) (區)

一日午前十一時五十九分

大塚町専修高等女學校

同

音羽町九丁目

(本) (郷) (區)

一日午前十一時五十九分

帝國大學理科研究所

同

同 外來患者藥局

同

同 理化學教室

同

同 圖書室

同

春木町三水野藥局

同 午後一時

元町方面

東京の被災

不明

不明

不明

飛焔

飛焔

飛焔

藥品

不明

不明

不明

不明

不明

不明

同 午後十一時二十分 順天堂病院

(下谷區)

一日午後零時十分 二長町五〇

三日午前一時二十分 北大門町

(淺草區)

一日午前十二時五十九分 今戸町八五

同 田中町六八

同 淺草町四八

同 千束町二ノ二

同 午後零時 玉姫町八六

同 午後零時三分 吉原江戸町二

同 吉原京町二

同 藏前片町一九

同

藥品

飛火

竈殘火

同

不明

セルロイド

營業用爐

火鉢

瓦斯の火

藥品

同

同

同 午後零時十分

同

同 午後零時三十分

同

同

一日午後零時

同

同

同

同

同

(本所區)

今戸町八

須賀町一七

吉原京町一

同町一ノ一二七

千束町一ノ二五七

光月町一

徳右衛門町四五

柳原町一ノ二〇

太平町方面

押上方面

荒井町方面

菊川町一丁目方面

營業用爐

藥品

油鍋

飛火

同

同

不明

同

同

同

同

同

つたかと思ふ。萬世橋から北進した火は、旅籠町宮本町と煽りに煽つて、神田ッ兒自慢の氏神神田明神も、鳥居も残さず焼けてしまつた。

本郷座が焼け落ちる。帝大の圖書室が燃え上る。日本銀行が危いと見れば、三井銀行からも火を噴き出す。三越が四面猛火の中に包まれてる間に、西河岸の倉庫を焼き拂つた火は白木屋に飛び、村井銀行に移り、食傷新道を一掃して方向轉換、進んで丸善、高島屋にと迫つた。銀座から新橋。八丁堀から築地。淺草では十二階下の潰れ家から出た火が、一方は千束町へ、一方は六區の歡樂郷を衝いて數多の劇場活動館が、見る／＼焔に包まれてしまう。深川は火の海。本所は焦熱地獄。東京衛戍司令部が五發の非常砲を打ち放した頃には、全市悉く猛火に包まれ、紅蓮の舌は到る所三層四層の大建物を、片ツ端から甜めつくしてゐた。

水道は破壊して用を爲さず、外氣は熱して百十五度に上る。その間にも地震は間斷なしに襲ふて、蒸汽ポンプも意に任せぬ。火元は殖へる。風力は加はるばかり。六時七時と日が暮れると、電燈の滅した暗黒の街を、親は子を呼び、妻は夫に引摺られながら、幾千、幾萬、幾十萬の人が、右へ左へ雪崩れを打つては逃げ回るのであつた。

行先行く先を猛火に追はれて、心身綿のやうに疲れた所へ、又たゆる／＼と地震が起る。前からも火、後からも火、煙に巻かれた女達は、悲鳴を上げながらバタ／＼と倒れる。

火薬、ギヤスリン、石油罐の爆發。あゝボンベ最後の日、今その日が東京に來たのか!? 恐怖の夜が明けて二日になる。下谷を焼いた日が淺草に進んで、公園手前の焼け残り地區が見る間に綺麗に片付けられてしまふ。日本橋の一角、京橋の一角、わづかに残つたそれもこれも滅ぶ。

此所ばかりは幸運に火先を免れたかと思はれた上野廣小路の松坂屋が燃え上つたのは三日の明け方であつた。焔はメラ／＼と延びて行つた。

延焼四十時間 帝都の中樞を全く焼きつくした空前の劫火は、かくして松坂屋と其の附近を最後に、漸く鎮火を告げたのであつた。

四、焼失戸數と罹災者

一、中樞地區の全滅

猛火は一日より三日まで、延焼實に四十時間に及んだ。東京の中樞三十一萬戸を灰燼に歸せしめ、焼死七萬幾千人(此外行方不明約四萬人)を出した、此の空前の大慘禍は、國民の子々孫々に傳へて、長く後世に記念されねばならぬ。

調査は尙ほ區々であるが、今假りに内務省、警視廳及び救護局の調査を綜合して其の概數を擧げれば、焼失戸數約三十一萬戸、罹災者約百五十萬人、これを震災前の東京市内の全戸數四十四萬五百餘戸、人口二百三十萬人に對比すれば前者は七割強、後者は六割五分強に當る。即ち

- ▲京橋、日本橋、神田、淺草、本所、深川の六區は全滅(但し京橋と神田は一小部分残る)
- ▲下谷區は大部分焼失
- ▲麴町、芝、本郷の三區は五割乃至六割焼失
- ▲赤坂、小石川、四谷の三區は一部分焼失

となるのである。全市の七割、而かも東京市の心臓とも云ふべき日本橋、京橋、神田の三區が全滅したることは、一大打撃と云はんよりも、寧ろ東京市の全滅と云ふに近い。

五、焼けた町と主なる建物

▲麴町區

祝田町、寶田町、元千代田町、大手町一丁目、元衛町、竹平町、永樂一丁目一部、八重洲町内幸二丁目一部、有樂三丁目一部、内山下一丁目一部、霞ヶ關、裏霞ヶ關、西日比谷町、外櫻田町、三年町、永田町、飯田一二丁目、麴町九丁目一部及十丁目、紀尾井町の大部、隼町、平河町五六丁目半分、富士見町二丁目、元平河町、下二番町大半、三番町一部、四番町、下六番町、日比谷公園等を残しあと全焼

焼けた建物

内務省、大藏省、文部省、鐵道省、會計検査院、印刷局、皇室林野管理局、警視廳、東京稅務監督局、專賣局、特許局、中央電話局、中央郵便局、佛國大使館、支那公使館、東京毎日新聞社、有樂町驛、飯田町驛、帝國劇場、有樂座、日比谷大神宮、麴町署、

日比谷署、區役所、東京電燈會社、高田商會、東京市電氣局、國學院大學、日本齒科醫專、麴町女學校、二松學舎、三井男邸、鍋島侯邸、井伊伯邸、胃腸病院、大松閣、

▲神田區

和泉町佐久間町の一部を除き全焼

焼けた建物

商科大學、東京齒科醫專、明治、日本、中央、專修各大學、女子職業、佛英和高女、開成中學、商工中學、東京瓦斯會社、松屋吳服店、神田、萬世橋、お茶の水、水道橋各驛、杏雲堂病院、阿久津病院、濱田病院、金杉病院、井上眼科病院、大日本石油會社、青年會館、明治會館、佛教會館、救世軍本營、ニコライ會堂、神田明神、二六新聞社、區役所、神田郵便局、警察署三、電話分局、神田劇場、入道館外寄席活動寫真館。

▲日本橋區

全焼

焼けた建物

日本銀行(金庫安全)、三井第一、第百、第三、安田、村井、あかち、川崎、東海の各銀行、三井合名會社、三越吳服店、白木屋吳服店、博文館、丸善、株式取引所、米

穀取引所、國分、西川、平尾、長瀬、津村、伴傳各商店、山下汽船、三共製藥、中外商業新報社、東京毎夕新聞社、中央電信局、區役所、日本橋俱樂部、明治座、水天宮、日本橋高等女學校、濱町病院、矢の倉病院、警察署三、活動寫真三。

▲京橋區

月島通り十二丁目の大部を残し、あと全焼

焼けた建物

農商務省、逓信省、海軍大學、第一相互の一部、千代田生命、星製藥、東洋汽船各會社、十五銀行、時事、國民、朝日、萬朝、讀賣、中央、やまと各新聞社、高島屋吳服店、服部時計店、明治屋、龜屋、菊屋、木村屋、御木本眞珠店、天賞堂、資生堂、西本願寺、石川島造船所、新富座、精養軒、水交社、海軍技術研究所、區役所、稅務署、警察署三、銀座、京橋電話局、築地活版所、聖路加病院、林病院、三一教會、花月樓、松本樓。

▲芝區

芝公園、芝公園地の一部、芝浦町、南濱町、新芝町、金杉河岸、北金杉河岸、新門前河岸、新堀河岸、今里町、三光町、猿町、丹後町、臺町、君塚町、白金志田町、三田四國町、三田

同朋町、三田功運町、三田臺町、三田臺裏町、三田小山町、三田綱町、三田豊岡町、三田松坂町、三田南寺町、同北寺町、老増町、三田高輪南町、同北町、同臺町、西臺の大部、本芝町、本芝材木町、本芝下町、本芝入横町、下高輪通新町、二本榎本町、同西町、二本榎、赤羽町、伊皿子町、横新町、松本町、田町、新門前町、車町、新堀町の大半、西應寺、金杉四丁目全部、三丁目半分を焼し、あと焼失

焼けた建物

高輪御殿、和蘭公使館、赤十字社、慈惠院大學、新橋、汐留、濱松町各驛、芝浦製作所、東洋印刷、濱松町電氣工場外十五工場、慈惠、東京、鐵道各病院、芝神明神社外六社、青松寺外四十七ヶ寺、芝銀行、區役所、稅務署、遞信官吏養成所、鐵道大臣官邸、田中平八、馬越恭平、服部金太郎各邸、愛宕警察署、第二消防署、攻玉社中學、正則中學。

▲赤坂區

赤坂榎町、仲之町、表町、傳馬町、一ツ木町、丹後町、氷川町、臺町、新坂町、檜町、青山南町、北町、同三筋町、六軒町、權田原町、高樹町、福吉町の大部、新町(四五丁目)田町の一部を残しあと焼失。

焼けた建物

米國大使館、大倉集古館、大倉商業學校、三會堂、内閣記録編纂所

▲四谷區

北裏町一二丁目を焼き、あと安全。

▲小石川區

砲兵工廠、諏訪町、新諏訪町、大和町、仲町、江戸川の大半を焼きあと安全。

▲本郷區

本郷一丁目、金助町、春木町、元町、東竹町、西竹町、湯島新花町、同三組町、同天神町、同梅園町、同朋町、切通町、切通坂町、妻戀町、帝國大學の一部を焼きあと安全。

焼けた建物

帝國大學の一部、女子高等師範、京華中學、湯島聖堂、東京博物館、順天堂病院、本郷座、岡野敬次郎、武井守正、松平頼壽、高田慎藏各邸

▲下谷區

茅町、上野公園、上野櫻木町、同花園町、同七軒町、谷中清水町、同天王寺町、同坂町、同初音町、同真島町、同三崎町、同上三崎南の一部、同上三崎北町、谷中等を残しあと全焼。

焼けた建物

上野驛、松坂屋呉服店、岩倉鐵道學校、上野高女、市村座、上野警察署

▲淺草區

觀音堂の外全焼。

焼けた建物

高等工業學校、專賣局、東本願寺、樂山堂病院、警察署四、第五消防署、小松侯、立花伯、柳澤伯、嵯峨侯邸、宮戸座、中央劇場、開盛座、外公園各劇場活動寫真館、吉原遊廓。

▲本所區

全焼。

焼けた建物

兩國橋、綿糸町兩驛、安田邸、回向院、國技館、府立第三中學、龜澤町車庫、富士瓦斯紡績、三田土ゴム、精工舎、日本汽車製造會社、區役所、警察署三。

▲深川區

越中島町、古石場町の一部、埋立地を除き、あと全焼。

焼けた建物

商船學校、陸軍糧秣廠、岩崎男別邸、區役所、警察署三、深川八幡、淺野セ

メント、同スレート會社、東京製鋼所、日本紡績、第六消防署、洲崎遊廓

六、損害百一億圓

—大藏省の調査—

今回の大震災に伴ふ損害額の正確なる見積りは極めて至難のことであつて、殆ど幾百十億圓に達するか見當がつかぬ爲め、英米等の各市場に於ては、今回日本の蒙つた損害を、或は二百億圓と傳へ、或は三百億圓と傳へ、種々我國に不利な宣傳も行はれて居るので、大藏省に於ては過般來信憑し得べき損害額の見積調査を始めて居たが、最近漸く確定數を得るに至つた。即ち大藏省の調査に依ると今回の震災に伴ふ官民損害高見積概數は約百一億圓であつて、其の内東京市の損害は、家屋家財商品及官民公有物等を合して八十一億五千八百九十三萬七千圓、東京府は七億八千二十七萬三千圓である。

尚横濱市は七億八千四百四十三萬七千圓、横須賀市は六千二百二萬八千圓、神奈川県は一億八千二百二十三萬二千圓、埼玉縣は九千六百四十五萬二千圓、山梨縣は二千五百五十九萬六千圓、

千葉縣は六千七百九萬六千圓といふ事である。

七、人口の現在

——一時は百餘萬に——

震災後、日々何萬人と云ふ人が或は關西へ、或は東北へ、若くは近縣地方へ去つたので、一時東京市の人々は百餘萬人とまで激減したが其後秩序の回復と共に、再び上京する者が殖えて來て、九月三十日の調査では百三十七萬七千十四人と云ふ數に上つた。十月中には更に二十萬乃至三十萬人の上京者あるべく、其の舊に復するの日も、それほど遠いことではならう。

麴町	七七、〇七三	神田	三六、八四三
日本橋	八、一九八	京橋	二一、四二一
芝	一四七、八五一	麻布	一一〇、一〇九
赤坂	六七、一二三	四谷	一〇二、八三〇
牛込	一七三、七二四	小石川	一八六、五六三

本郷	一六〇、九一〇	下谷	八三、一一三
淺草	九三、六七一	本所	五八、一二〇
深川	三八、四六七		

八、混亂の避難所

——上野から飛鳥山へ——

最も多數の避難者を收容した所は、芝公園、日比谷公園、宮城前廣場、東京驛附近、上野公園、及び飛鳥山公園等であつた。芝公園には第百銀行の頭取池田謙三氏や、白井哲夫氏なども家族を纏めて避難した。宮場前の避難者のうちには榎本武憲子などもあつた。本所、淺草、下谷、神田の避難者を一手に引き受けたのは上野公園であつた。山上一帶全く人と荷物とで埋められたが、二日の夜、上野驛を焼き拂つた火が公園内の常盤華壇に飛んで、遂にそれが燃え上つたと見ると、「飛鳥山へ、飛鳥山へ」と二十萬からの人が、一里に近き道を、わつしよいと飛鳥山へ逃げた。さすがに此所こそは絶對安全、恐怖から恐怖へと追ひ廻はされて來た避難

者も漸やくホツと息をついた。

避難者の多くは初めは成るべく近い所をこ選んだので、チョイとした廣場や小公園なども、ハチ切れるばかりの人であつたが、それからそれへ火の手が物凄く回つたので、廣場や小公園は、何所も此所も危険に陥り、それから又た逃げ出して又た止まり、又た逃げ出すと云つた具合に、幾度も／＼避難場を變へたので、その度毎に荷物は紛失する、家族は離れ／＼になつて、思はぬ悲劇を生じたものが少なからずあつた。

□公園での出産

産科婦人會の濱田病院は駿河臺に火が回つたと見ると、直ちに全員患者に附添つて上野公園に避難した。ところが公園に蟻集してゐた何十萬といふ避難者の中には、可成り多數の妊婦が居つて、それ等があまりの驚愕によつて續々と産氣づき、濱田病院の立札を見て手當を請ふたので此の混亂の最中にもかゝはらず、監督石川ゆう子氏指揮の下に附屬の産婆が甲斐々々しく働らき、一日の夜より二日にかけて都合七十人からの産兒を取上げた。

九、焦土の都

——狼藉たる焦土——

焦土の都、焼野原の東京。電車の線路が飴のやうに曲つて、車道に敷きつめられた木煉瓦までがブス／＼といふり出したと云ふことだけでも、いかに其の夜の火勢が猛烈であつたかと考へられやう。電線は何本となくもつれ合つて地上を匂ひ、道路の兩側は、壁や、瓦や、煉瓦の焼けてかけたのなどが山をなして、殆んど足の踏み場もない。焼けた電車、焼けた自動車の残骸がそこにも此所にもほつたらかしてある。潰れた上を焼き拂はれてまだ掘り出さぬ死體もあらうか、焼き場に似たるイヤな臭ひが、鋭く嗅覺をうつても來る。

往來の人は皆な腰には糧食、肩には水筒をかけてゐる。沙漠を通る旅行者だ。水道が壊れて水はなく、焼野に食を求めやうもない。ぞろ／＼通る罹災者の中には、何町某と書いた小旗を立て、行くものもある。猛火に追はれて離散した家族を捜し回つてゐる人だらう。物資を満載した救護局の自動車走り抜けたかと思ふと、すぐ又た後からは赤十字の傷病者を收容する自

動車が来る。不忍池の邊上野の山下には、逸早く焼けたトタンと燃え残りの戸板で小屋を造つてゐる幾組かある。

上野停車場も焼けた。その火をかぶつて公園内の常盤華壇も焼けた。博物館、動物園、不忍辨天、東照宮、圖書館などは免れたが、大佛の首は地震で無慘にもがれてしまった。「なんと下谷の摩利支天」と云はれた其の摩利支天も焼ければ二長町の市村座も焼けて、下廻りや男衆が尻ばしよりで灰の中を掻き回してゐる。松坂屋が焼け落ちる時には、誰れでも中に飛込んで勝手に好きな物を持つて行け、と云つたが猛火に恐れて誰れ一人飛込むものはなかつたさうだ。

萬世橋驛も焼けて、軍神中佐の銅像だけが寂しく焼野に立つてゐる。神保町から三崎町にかけては、暑中休暇の歸省を終へて出て来たばかりの所を焼け出された學生が三々伍々、學校や下宿の焼け跡を指さしながら、それでも元氣よく通つて行く。佛英和女學校の構内に残るジャングルの銅像も、再起を疑はれる現状にあつては、悲しき思出の種である。神田橋が焼け落ちて、其の下からも死骸が浮かんだ。青年團が決死の奮闘で火先を食ひ止め、わづかに残つた佐久間河岸の一角、人の力の偉大なる感激の記録である。

兩國橋に向へば、川を隔てた彼方から立ちのぼる煙が、大川のしめつばい風に吹かれて来る。三萬幾千人の死者を出した被服廠跡でその死體を焼いてゐる煙ではないか。軒を並べた大問屋の焼け跡を吊らつて、鐵砲町から本石町に出る。十軒店やいづこ。新館の尖頭と玄關のライオンだけが、僅かに原形をとどめる三越の残骸。橋をはさむで對立した白木屋は全部が灰になつて、跡をしのぶよすがもない。花崗石で造つた日本橋の欄干もところどころかけて、橋の袂には死體收容所の看板さへ立つてゐる。

交通巡查に叱咤されながら、濛々たる砂塵の中を京橋に進んで、廢墟の銀座を見て通る。骨と皮との建物、その空洞が立ち並んで、工事中だつた銀座ビルディングも、遂に名物とならずに巨大な残骸をさらしてゐる。板新道も金春も滅んで、道路を埋める焼土の臭ひが在りし新橋の脂粉の香りと替はつてゐる。

淺草に至る。劇場と活動寫眞を集めた六區の歡樂郷も全滅して、焼け焦げた繪看板が、何枚となく路上に棄てられ、池から公園の中にかけては、僅かばかりの家財を持ち出した何萬人といふ罹災者が騒然雜然。公園の樹木は焰を浴びて今にも悉く枯れさうだが、靈驗あらたかな觀

世音ばかりは、界限一帯の男と云ふ男が、死力をつくした消防の甲斐もあり、廣大無邊の御利益を示して端然と残つてゐる。

厩橋を渡れば本所。これに續くが深川。死屍狼藉たる兩區の燒跡、それは餘りに慘虐を極めたるものであつた。

十、臨時火葬場

—死體の處分—

七萬七千と算へられる死體の處分は酸鼻を極めた。東京市と警視廳とが協力して、最も多數の燒死者を出した被服廠跡と吉原には現場に臨時火葬場を設けて焼くことにし、日本橋、京橋、深川、大川筋の死體は、品川の臺場や洲崎の埋立地や築地本願寺などで焼いた。淺草方面の死體は、區役所跡、田中町、待乳山、七軒町各小學校跡、東本願寺境内等で焼き、神田方面のは三崎町の河岸に積み重ねて焼いた。本所では綠町にも向島の言問附近にも設けた。此の外龜戸にも設けられ、町屋の火葬場に運び込まれたものも多數あつた。これ等の死體のうちで男

女の區別の判明したものは、男一萬五千六百二十八人、女一萬六千二百二人で、其他はボロ／＼に焼け焦げて男女の別さへ付かぬものばかりだつた。大川筋から東京灣へ流れ出た死體で、遠く千葉縣の行徳、船橋方面へ漂着したものも少なからずあつたと云ふから、海底深く没し去つたものなごを加へると、まだ／＼澤山の死者があるだらう。

□遭難した人々

今回の震災で不慮の死を遂げた知名の人々は左の如くである。

- 松岡 康毅 男 (葉山にて壓死)
- 園田 孝吉 男 (二ノ宮にて壓死)
- 吾妻 勝剛 氏 (醫博) (鎌倉にて山階宮妃殿下拜診中壓死、令息は片瀬にて壓死)
- 京極高義子夫妻 (本所にて燒死)
- 木下 淑夫 氏 (元東鐵局長) (東京にて壓死)
- 今福 忍氏夫妻 (文博) (茅ヶ崎にて壓死、令息令嬢とも)
- 大橋 重威 氏 (理博) (川崎にて壓死)

片岡恒太郎男夫妻

(大磯にて壓死)

佐々木慎四郎氏(第一銀行重役)

(茅ヶ崎にて壓死)

磯部四郎氏(法博)

(本所にて焼死)

厨川白村氏(文博)

(鎌倉にて溺死)

安田善雄氏夫妻

(本所にて焼死)

安田善兵衛氏夫人

(末女と共に平塚にて壓死)

池田忠博侯夫人

(鎌倉にて壓死)

故星亨氏未亡人

(同上)

芳川寛治伯母堂

(同上)

大島義昌大將夫人

(小田原にて壓死)

堀田正恒伯夫人

(北條にて壓死)

十一、地方へ、地方へ

— 汽車の大混亂 —

焦土の東京に身の置き所を失ふた百萬からの人は續々地方へ避難するのであつた。汽車は五日に至つて東北地方へは上野驛が焼けたので田端から、東海道線は品川鶴見間、常磐線と信越線とは日暮里から發車することになつたが、田端日暮里の兩驛へは、後からくと避難民が、長蛇の列を作つて押寄せ、停車場構内は、沸くが如き有様であつた。

鐵道省は、罹災者救助の方針によつて、すべて無賃で乗車せしめた。けれども日に十萬、二十萬といふ人を、満足に地方へ輸送することは、限りある列車の力の及ぶところではなかつた。而して恐怖のドン底に突き落された罹災者は、今は唯一刻も早く東京を逃げ出して、平和な地方へ、地方へとのみあせるのであつた。

雲霞の如くに集まつた其れ等の罹災者は、發車時間の幾時間も前から、鯨波をあげて揉み合ひ、押し返してゐる。男も必死だ、女も必死だ。

やがて鈴が鳴る。改札口が開く。わつと雪崩れをうつて轟進する勢ひ。押し倒す、突き飛ばす、刎ねかへす。悲鳴、怒號、一大叫喚、忽ち何十人と云ふ怪我人が出来る。

汽車の中が又大變であつた。荷物と同様にギュウ／＼と詰めこまれても、まだ何千、何萬人かゝ乗り切れずに、地團駄ふんで騷擾する。驛長も助役も聲を囁らして制止するので、あつたが、或者は列車の屋根に乗る。或者は列車の窓の外側に縋り付いて、打つても撲つても離れやうとしない。線路は避難民が右往左往して、今にも其れ等が轢かれさうだ。列車は間斷なく汽笛を吹き鳴らしながら遅々として其の進行を續けた。

かくて赤羽驛では崩壊した荒川の鐵橋を徒歩連絡で川口驛に達し、川口から信越、東北本線高崎の各線に連絡した。

九月の初めで未だ残暑は去らなかつた。しかも後から／＼と押し付けられて座席を得るごころの話ではなく、二日も三日も立往生した儘、汗を拭くことも出来ず、辨當も開くことも出来ず、遂には便所へ行けぬとて悲鳴をあげた女すらあつたと云ふことに依つても、如何に車中の苦しみのひどかつたかゝわかる。それにも増して列車の屋根に乗つたものゝ中には、トンネル

を通過するときに頭を打ち付けて重傷を負ひ、病院に昇ぎ込まれると間もなく絶命したといふ悲惨事があつた。老人婦女子はもとより壯年(い)男子でも、殆んど決死の覺悟で乗つたといふことは誇張ではなかつた。

品川鶴見間に過ぎなかつた東海道線が兎も角も開通といふ聲を聞いたのは其の月二十日頃からであつた。勿論徒歩聯絡を要する所は幾個所もあつた。それでも潮の如く押寄せる避難者で、各列車とも身動きもならぬ混雑であつた。

別に芝浦からは駿州清水港への便船があつた。郵船會社からも商船會社からも船を出して避難者を輸送した。海軍は前例なき英斷の下に進んで避難者の軍艦輸送までも開始した。罹災者の證明がある限り、それ等も凡て無賃であつた。

九月の末から十月にかけて、次ぎ／＼と各線が全通するに及んで汽車の混雑も漸次に緩和され、日を追ふて常態に復するに至つた。

■ 宮城内の破損

宮城内では内儀の壁や瓦が崩れ落ち、大膳寮なども大破損を蒙つた。坂下門半藏門、和田倉門等も傾き、内濠の石垣は所々崩れ落ち、女官達は何れも吹上御苑に避難したが幸に負傷等はなかつた。

大災禍と政府

一、災禍の洗禮

—新内閣成立—

突然に起つた此の空前の大災禍に驚ける政府は、二日午後三時、内田臨時首相以下閣僚全部内相官邸に參集して、緊急閣議の結果、取敢へず應急措置として臨時震災救護事務局を設け、東京附近の食糧と建築材料を、郡市町村並びに警察の手にて管理し、罹災民に配付供給するの道を講ずると同時に、罹災救助資金として、九百五十萬圓國庫支出の件を決定した。

一方後繼内閣組織の大命を拜して以來、専ら閣員の詮衡中であつた山本權兵衛伯の新内閣は、全市混亂を極むる同日午後六時、千載一遇の大災禍の洗禮を受けて、左の如く成立を告げたのであつた。

内閣總理大臣兼外務大臣	山本權兵衛
内務大臣	後藤新平
大藏大臣	井上準之助

陸軍大臣	田中義一
海軍大臣	財部彪
農商務大臣兼司法大臣	田健治郎
逓信大臣兼文部大臣	犬養毅
鐵道大臣	山之内一夫

(其の後いづれも兼任を解かれて伊集院彦吉氏外務大臣に、平沼騏一郎氏司法大臣に、岡野敬次郎氏文部大臣に親任)

新内閣は、前内閣の決定した九百五十萬圓の豫算を認め、救護事務局の事業を其儘繼承すると共に、罹災地救助の緊急處置として非常徵發の勅令を公布し、即日施行した。

□非常徵發令

第一條 大正十二年九月一日地震に基づく災害者の救済に必要な糧食、建築材料、衛生材料、運搬具其の他の物件又は勞務は内務大臣に於て必要と認むる時は、非常徵發を命ずることを得。

第二條 非常徴發は地方長官の徴發書を以て之を行ふ。

第三條 非常徴發を命せられたるものが、徴發の命令を拒み又は徴發物件を藏匿したるときは、直に之を徴收することを得。

第四條 徴發物件又は勞務に對する賠償は其地市場に於ける前三年間の平均價格に依り難きものは評價委員の評定する所に依る。

第五條 非常徴發の命令を拒み、又は徴發物件を藏匿し、るものは三年以下の禁錮又は三千圓以下の罰金に處す。徴發し得べき物品に關し、當該官吏々員に對し申告を拒み又は虚偽の申告を爲したる者亦同じ。

第六條 徴發物件の種類、賠償の手續、評價委員の組織、其の他本令の施行に必要な規定は内務大臣之を定む。

徴發令の公布と共に官報號外に依り、内務省令を以て、右徴發すべき物件を、一食料品、二飲料、三薪炭其の他の燃料、四家屋、五建築材料、六藥品其の他の衛生材料、七船其の他の運搬具、八電線、九勞務と定めて發布した。

かくて第一に徴發されたものは、東京市内に於ける數百臺の自動車であつた。之れと同時に新宿驛内に積み重ねてあつた米六千俵も忽ち徴發され、次いで阪神地方及び秋田、青森の兩縣下からバラック材料十二萬戸分を急速に徴發すべく府縣知事に命令を發した。この他全國各地に亘つて、食料、藥品、建築材料を始め、各種の物品を徴發して、罹災者救助に少しの遺憾なきを期した。

而して陸上に於ける輸送機關が杜絶したと見るや、時を移さず海軍省を通じて、第一第二艦隊に命じて、食糧物資の海上輸送に全力を傾注せしめたるが如きは、誠に機宜を得たる處置であつた。

二、三 大 勅 令

— 政府の決心 —

政府は更に六日に至つて、治安維持令、暴利取締令、並びに支拂猶豫令の三大緊急勅令を公布して、罹災地に於ける秩序維持、生活安定、及び金融界の混亂を防止する所があつた。

□治・安・維・持・令

朕茲に緊急の必要ありと認め、樞密顧問の諮詢を経て帝國憲法第八條第一項に依り、治安維持の爲にする罰則に關する件を裁可し、之を公布せしむ

御名御璽 攝政名

内閣總理大臣、各省大臣

出版通信其の他何等の方法を以てするを問はず、暴行騷擾其の他生命、身體若くは財産に危害を及ぼすべき犯罪を煽動し、安寧秩序を紊亂するの目的を以て治安を害する事項を流布し、又は人心を惑亂するの目的を以て流言浮説を爲したる者は、十年以下の懲役若くは禁錮又は三千圓以下の罰金に處す。

附 則

本令は公布の日より之を施行す

□暴・利・取・締・令

朕茲に緊急の必要ありと認め、樞密顧問の諮詢を経て帝國憲法第八條第一項に依り、生活必需品に關する暴利取締の件を裁可し、これを公布せしむ。

御名御璽 攝政名

内閣總理大臣、各省大臣

災害に際し暴利を得るの目的を以て、生活必需品の買占若くは賣惜しみを爲し、又は不當の價格にて其の販賣を爲したる者は、三年以下の懲役又は三千圓以下の罰金に處す。前項の生活必需品の品目は命令を以て之を指定す。

本令公布の日より之を施行す。

□支・拂・猶・豫・令

朕茲に緊急の必要ありと認め、樞密顧問の諮詢を経て帝國憲法第八條第一項に依り、私法上の金錢財務の支拂延期及手形等の權利保存行爲の期間延長に關する件を裁可し、之を公布せしむ。

御名御璽 攝政名

内閣總理大臣、各省大臣

第一條 大正十二年九月一日以前に發生し、同日より同年同月三十日迄の間に於て支拂を爲すべき私法上の金錢債務にして、債權者が東京府、神奈川縣、靜岡縣、埼玉縣、千葉縣及災害の影響に因り經濟上の不安を生ずる虞ある勅令を以て指定する地區に住所又は營業所

を有するものに付ては三十日間其の支拂を延期す、但し債務者が其の地區外に他の營業所を有する場合に於て該營業所の取引に關する債務に付ては此の限に在らず。

災害の影響に因り必要あるときは、勅令の定むる所に依り前項の規定は、大正十二年十月一日以後に支拂を爲すべき私法上の金錢債務に付之を適用することを得、前項の規定中三十日の期間は之を延長することを得。

第二條 左に掲ぐる支拂に付ては前號の規定を適用せず。

一 國、府、縣其の他の公共團體の債務の支拂。

二 給料及勞銀の支拂。

三 給料及勞銀の支拂の爲にする銀行預金の支拂。

四 前號以外の銀行預金の支拂にして一日百圓以下のもの。

第三條 手形其の他之に準すべき有價證券に關し、大正十二年九月一日より同年同月三十日までの間に第一條に規定する地區に於て權利保存の爲に爲すべき行爲は、其の行爲を爲すべき時期より三十日以内に之を爲すに因りて其の效力を有す。

第一條第二條の規定は前項の場合に之を準用す。

附 則

本令は公布の日より之を施行す。

三、不 眠 不 休

——目覺ましき救護局——

續いて十一日には、生活必需品の輸入税を免除するの勅令。十二日には、第三種所得税及び營業税を減免するの勅令。二十二日には、物資供給令が公布さるゝに至つた。いづれも生活の脅威を除き、國民の負擔を輕からしむるもので、極めて適切なる措置であつた。

物資供給令に基づく活動として農商務省は米國政府に鐵材木材の注文を發し、鐵道省は罹災者の無償輸送を行ひ、逓信省は罹災者の郵便電信を無料で取扱へる外に、簡易保險局をして罹災加入者に、保險金の特別貸付を開始させた。

政府はさきに罹災民救助費として九百五十萬圓を支出したが、九月十七日に至つて、更に第

二回救助費として一千六百六十萬圓を剩餘金の中から支出することになった。而して九月中旬に救護事務局の受付けた救済義捐金は、總額千四百七十九萬二千餘圓に達したので、此の中から食料に五百五十萬圓、被服費に五百萬圓を支出し、その他は半永久的の細民住宅、簡易食堂、簡易浴場、公設市場、育兒園、傷病者治療所、孤兒老衰者收容所等の建設費、並びに罹災遺族見舞金に充てることになった。

食料は引續き配給され、被服の配給も一通り行き渡つた。簡易浴場が建設されるまでのツナギとしては、既に警視廳の手を経て各所に薪炭料付の風呂桶を配つた。その他の事業も着々實現されることであらう。ともあれ救護事務局が月餘に亘つて罹災者の爲め、不眠不休の活動を續けてゐることは、多とせねばならぬ。

□大震災善後會

貴衆兩院議員並びに實業家より成る大震災善後會は徳川貴族院議長を會長に推し、澁澤子爵、粕谷衆議院議長、山科商業會議所會頭を副會長に擧げ、罹災者救助を主とする「救済部」と帝都復興を主とする「經濟部」との兩部に分け、政府を後援し鞭撻して、最善の方法を講ずることになった。

とになった。

□富豪の義捐

政府の勸説によつて三井岩崎兩男爵家より各五百萬圓、安田善次郎氏より三百萬圓、住友男より二百五十萬圓、大倉喜八郎男、神戸鈴木商店より各百萬圓を救済義捐金として救護局へ申込みがあつた。外其他の富豪よりも續々と義捐を申出でた。

四、陸軍の活動

一、殊勳の飛行機

一日午前十一時五十八分僅々二分間の震動で、帝都より各方面への通信機關は悉く切斷せられた。一日夜までには大阪市に東京横濱兩市とも地震後に大火災が起つたと云ふ簡單な無線電信は到着したが、状況は全然不明である。此の時陸軍大臣の重要命令を第四師團長に送達し、東京横濱の状況を知らせたのは、乙式二一六號の飛行機で、操縦者波多野中尉同乗者東中村上等兵で、二日午前九時東京出發午後三時大阪に着陸して、直ちに其の重要使命を傳達した。こ

れより初めて震災状況が世界各国に傳はるに至つたのである。二一六號の働らきは、正に殊勳と云はなければならぬ。

續いて帝都の混亂愈よ加はり、近衛第一兩師團の兵力だけにては秩序の維持困難となるや、陸軍大臣の出動命令を傳達すべく、一時間二百キロメートル以上の急速力を以て、首尾よく其の重要任務を果たしたのは左の飛行機である。

乙式二五二號(操縦者秀島中尉、同乗者山田上等兵、高崎十五聯隊へ)

乙式二二二號(操縦者正木曹長、同乗者柴田中尉、宇都宮師團へ)

乙式二五三號(操縦者小川中尉、同乗者鈴木一等卒、佐倉歩兵五十七聯隊へ)

これに依りて各地方の軍隊が迅速に東京に集中し、何等の事なきを得たのである。尙別に名譽なる一機は日光御用邸に飛行して、天機を奉詞する所があつた。

二、全國より六個師團

今次陸軍が、東京、神奈川、千葉、埼玉の一府三縣に亘る戒嚴地帯に集中した兵力は歩兵二十一一個聯隊、騎兵六個聯隊、砲兵七個聯隊、工兵十八大隊其他各種の技術兵、衛生隊の殆んど

全部で、總員六個師團五萬人に達した。此の大兵力が殆ど日本全國の各地から、早きは一日遅きも十日内に集中を完了した事は、さすがに精華を誇る帝國の陸軍である。而して其警備網は西は三島御殿場より相州一帯、横濱、東京、北は埼玉北部、東は銚子佐原附近、南は房州館山にまで及び、交通々信の斷絶せる折柄軍隊自らの補給すらも容易でないのに全力を擧げて罹災者の救護、交通々信の恢復につとめた其の勞苦は實戰以上のものがあつた。

□目。覺。ま。し。き。工。兵。隊。

戒嚴令と共に震災後の交通整理、水路、電車、汽車復舊に異常な働きをみせた工兵十七ヶ大隊は殆ど全國各師團から出動したもので、隅田川の吾妻、兩國、永代、厩の各橋梁の復舊工事は材料不足に拘らず瞬くうちに出來上つた。神田橋江東橋の補修修繕には目にみえぬ困難が伴つたといはれ、馬入川の新設架橋は最も難事とされてゐる。又市中の焼け残り大建築物の爆破は九月廿日以來、二等工兵隊の手で行はれ、永代橋、帝室林野局、大藏省、丸善を初め淺草凌雲閣、警視廳、三菱、郵船、東神の倉庫、高輪御殿、芝離宮、靈南坂官舎の焼跡、藏前工業一ツ橋商大、帝大、第一高等學校、御茶の水女子高師等悉く工兵隊の爆破作業によりて、焼跡

整理を速かならしむることが出来た。

□傳書鳩の働き

中野の軍用鳩も通信をもたらして日光御用邸を始め、遠くは大阪、各務原、清水港、富士演習場、仙臺、宇都宮、近くは浦和、千葉、小田原、横須賀、横濱、鎌倉、立川、所澤等の各地にある軍隊官憲と戒嚴司令部との通信聯絡を勤めて面目を施した。

五、海軍の活動

一、軍艦の食糧輸送

四十隻の軍艦が食糧を満載して品川に向つたとの報道は、震災直後の東京市民を、それほど心強く思はせたか知れない。事實何もかも凡ての食糧を灰燼に歸して、しかも陸路輸送の途が一切断たれた當時にあつて、若し此の海軍の輸送がなかつたならば、三百萬市民の困厄は更に一層深刻なものだつたらうと思ふ。此の點に於て海軍の活動は、特筆大書されなければならぬ。かくて震災以來、第一第二の聯合艦隊を始め、各鎮守府所屬の豫備艦艇の殆んど全部を品川

灣及び横濱海面に集中して、糧食輸送、罹災者救護、並びに海上の警備に當つて來た海軍では、既に食糧の陸揚配給も十分その目的を達し、今後の物資の陸揚その他の作業は専ら當業者の手に一任するを、得策とするに至つたので、九月二十日過ぎから海上部隊の配備組織を変更して、第一艦隊は横濱方面、第二艦隊は品川方面の警備及び救援作業に當り、各鎮守府所屬の戰艦山城、扶桑其の他の豫備艦船は各々母港に歸還した。

聯合艦隊總出動の結果、十月中旬頃より舉行される筈であつた海軍大演習は中止され、右演習經費五百餘萬圓は、總て災害救濟費に充てることになつた。

二、次には建築材料

食糧輸送が一段落を告げた後の海軍は、主として建築材料の輸送に従事することとなり數隻の軍艦をして、名古屋、青森、宮古、船川、大船渡等を往復せしめてゐる。尙ほ往航にはいづれも避難民を便乗せしむることにした。

斯様に海軍が、食料品及び慰問品、建築材料を一般避難民の輸送に全力を注いだことは今回が始めてである。特に一般人の乗艦を自由に許したことは、前例なき非常の英斷として國民の

褒賞を博した。

以上海軍が相並んで、警備に救済に、其最高能力を發揮して、災害善後に盡瘁したる功績は、陸海軍に對する國民の信頼を、更に一段と深からしめたものであることは、云ふまでもない。

六、東京府市と警視廳

一、全力を傾けて救護

東京府、東京市及び警視廳は、震災以來殆んど不眠不休で、全力を罹災者の救護に注いだ。焼残りの學校、寺院、其他の建物を全部開放して罹災者の收容所にあて、先づ食糧の配給より、漸次被服の供給に及んだ。

これと同時に、芝公園、芝離宮、日比谷公園、明治神宮外苑、上野公園、その他市内數個所に大バラックを建造して、罹災者中の資力なきものを收容するの計畫を立て、既に日比谷、上野、芝、明治神宮外苑等のバラックは竣工して、多數の罹災者を收容してゐる。

罹災者中の傷病者に對しては、各區に診療所並びに患者收容所、浴場等を設置して、赤十字、

濟生會、その他の團體の診療班、及び地方より出京した各地方救護團の助力を得て、遺憾なき手當を加へた。乳兒及び病人の飲用に供する牛乳に就ても苦心して、畜産試験場その他の民間牧場と交渉して、九日より供給を開始した。

市内の質屋業者が悉く休業して、中流以下の者が、金融の道なきに苦しみ居ると見ては直ちに府管質屋の増設を圖り、一方公設市場を各區に増設して、物資缺乏に因る小賣業者の物價吊上げを制肘し、又た公設浴場を各區に設けるの案も決定し、着々事業を進めてゐる。

水道の破壊は市民を困惑せしむること非常であつたが、それも震災當夜から技術員人夫を各所に派遣して極力修理に努めた結果、淀橋淨水場に於ける揚水ポンプは間もなく復舊し、三日の朝からは一部に送水し得ることとなり、一方陸軍自動車及び市の撒水車を以て各所に飲料水を供給し回つた。其の後水道は漸次に復舊して十五六日頃には全市に送水し得るやうになつた。

電車は線路の破壊、並びに架空線の切斷した爲め一時全く運轉不能に陥つたのであるが、電氣局の努力によつて、凡そ一週日の後には一部の開通を見、漸次各線に及んだのであるが、如何せん其の被害が甚大で容易に全線の開通を見ることが出来ない。市電も亦た九月二十五日ま

では罹災者の證明あるものに限り特別無賃乗車を許した。電氣局の震災に依る損害は車輛、變壓所、架空線等の焼失又は破損で其の額四千萬圓に上るのであるが、災後直ちに六百六十臺の電車新造に着手したるの外、市營乗合自動車をも開始して、大いに市民の交通を便ならしむると云ふことである。省線山ノ手電車は市内電車の開通に先だつて、無蓋の貨車を用ひて乗客を運んだが、其の混雑云ふべくもなかつた。

又た震災によつて一時に十萬人近くの失業者を生ずるに至つたので、職業紹介所は極力失業者の保護に當り、事務員、職工、人夫等各方面に亘りて職業を與へ、以て失業者の自暴自棄に因る一種の社會的憂患を除くに努めた。

警視廳が罹災者救助の外に、手薄なるその警察力を以て、總監以下管下の全員何れも數日間殆んど一睡も取らずして、市中の治安に任じたるの勞は、非常なものであつた。

二、小學校の焼失

焼失した市立小學校は百十八校、罹災兒童約五萬人に達する。之等の小學校はいづれも、焼跡に假校舍を設け、迅速に教育復舊を圖るの方針で既に假校舍が落成して、授業を開始した所

もある。その他各種の團體が、國民學校或は野外學校を始めて兒童を收容し、極力補充に努めてゐる。

東京府立の中學では第三が焼けた外無事なるを得た。府立の高等女學校では第一が焼けたがこれは十月十三日から椅子卓子なしの教場で極めて緊張した教育振りを見せてゐる。

□大學と専門學校

帝國大學(燒失法經文科教室)は八角講堂を修理し其餘はバラックを急造▲商科大學は燒跡に假校舍を▲高等工業は一部は芝浦高等工藝學校一部は農科大學▲外國語學校は西ヶ原の高等蠶絲學校▲女子高等師範は大塚の帝國女子専門學校▲同附屬高等女學校は第二高女に▲同附屬小學校は大塚高等師範附屬小學校に(横濱高等工業學校未定)大體に於て復興の方針は立つた尙私立大學は夫々學校當局に於て必死の努力を盡した結果四十萬圓の保證金の半額を貸下げ復興せしめることに決定、日本大學は池袋洋服裁縫學校大塚帝國女子専門學校及びバラック建にて開校する事になり▲中央大學は燒跡にバラック建(期日未定)▲明治大學は豫科中學部を利用し尙バラック建にて開校(期日未定)▲専修大學バラック建(十一月頃開校)▲慈惠會醫科大學は海城

麻布兩中學及赤十字病院にて(期日未定)▲日本齒科醫學專門學校は牛込東京物理學校に於て十月二十日開校▲女子英學塾は女子學院、千代田高等女學校兩校にて(期日未定)▲東京齒科醫學專門學校は慶應醫科大學と交渉中▲明治藥學專門學校は女子藥學校を借受けに内定、但本校舎を建てるには非常な苦心をしてゐる。

七 青年團と在郷軍人

一 全國から一萬數千人

此の大震災に對し、地方青年團の活動は目醒しきものであつた。日に何百人と云ふ地方青年はごし／＼上京して來た。三日午前十時上野驛に着いた群馬縣松井田町及妙義町青年團を筆頭に、東京府廳だけで受付けたもののみで百三十一團體合計六千三十七人、其の滞在日數に依る延人員は十數萬に上るのである。此の外東京市及び内務省の受付けに係る地方青年團體も略ぼ東京府取扱の數と似寄つたもので、合せて一萬二三千人に達した。別に在郷軍人團として活動した地方青年も亦頗る多數であつた。

各々食糧とシヤベル其の他の諸道具を脊負ひ、飯炊く釜までも携帯して、勇ましく立働いた有様は、今も市民の目の前にもらついて見える。此等青年團の作業の主なるもの擧げて見れば鐵道荷車の積おろし、荷馬車自働車の積おろし、炊出し、交通整理、道路の整理、傳令、各所の受付事務、牛乳の配達、宣傳ビラ撒き、建築材料の運搬、罹災者調査、屍體片つけ、道

路障害物の除去、所々の警備、官公署の夜警等

今、東京府社會教育課にて受付けたものを府縣別に列記すれば左の如くである。

群馬	五十九團體	二千六百四十六人	栃木	九團體	三百八十六人
千葉	三	六百五十三人	福島	一	十三人
宮城	廿一	六百八十九人	岩手	九	三百七十七人
長野	一	六人	新潟	一	百二十六人
岐阜	三	四百四十三人	佐賀	一	廿三人
本府	二三	七百三十五人	計	百三十一	六千三十七人

二、群馬青年の光榮

青年團の活動は、各地方とも優劣なく、何れも獻身的に目覚ましい働きを見せたのであつたが、就中最も迅速に上京したのは、群馬縣の六十團體二千八百十六名であつた。此事いつしか攝政宮殿下の御聴きに達して、森岡師團長に拜謁を仰付けられた際、特に其組織及び輸送方法等を御下問遊ばされたことである。之を傳承した山岡群馬縣知事は恐懼して、縣民一同を

代表し、御禮を言上すべく、九月卅日午前十一時十分赤坂離宮に殿下の御機嫌を奉伺したが、恰も皇后陛下が同離宮へ行啓御着時の切迫した際にも拘はらず、特に同知事に拜謁を賜はつた。知事は御下問の事項に就いて、入江東宮侍從長に奉答書の傳奏を乞ひ、光榮に感激しつゝ退出した。

三、軍人精神の發揮

帝國在郷軍人會本部では、罹災民救済と帝都の治安維持の爲めに全國支部に飛電を發して、會員の上京を促したので、北は北海道、南は九州から續々と東京に馳せ上つて、川村元帥指揮の下に其れ等の在郷軍人六千四百餘名は、連日連夜市中の警戒に罹災民の救助に目覚ましき活動を示した。副會頭たる安藤村田兩陸軍中將、土屋海軍中將等は専ら各班の聯絡に當り、一同の會員は食糧配給、水道修繕工事等にも多大の貢獻を爲したるの外、宮城牆壁の應急修繕、その他の勞務に盡瘁し、更に横濱にも派出所を設けて、極力全市の救護配給を援助した。田中陸相が陸軍省の本部に各班の代表者を集めて「罹災地以外の在郷軍人會の多數會員諸君が、一身一家の利害を眼中に置かず、數百里の遠きより急遽上京して統一ある行動の下に、市中の警戒

に罹災者の救護に、且つ食糧の配給その他種々の困難なる勞務に粉骨碎身しつゝあるのは、眞に偉大なる軍人精神の發揮である。國民は必らずや諸君に感謝する所大なるものがあることゝ信ずる。」と述べたのは、正しく國民の意志を代表したものだ。

八、救護團體

一、赤十字、濟生會と愛國婦人

各種の救護團體の中でも、最も組織的に活動してゐるのは赤十字社と、濟生會と、愛國婦人會とである。赤十字社では震災と同時に全國各支部の總動員を行ひ、東京府廳前外市内郡部二十七個所に救護所を設置して、日々多數の傷病者に應急の手當を加へ、更に巡回救護班を設けて重態と認められた者は直ちに赤十字本社、陸軍病院等に收容し、尙ほ本社構内及び水道橋松平伯爵邸内、淺草千束小學校跡、深川岩崎別邸内、築地本願寺境内等にバツツクを建て、妊産婦と乳兒を收容して救護に努め、且つ孤兒收容の爲に福田會内に孤兒收容所を設け、傳染病者は板橋郡立隔離病院に收容する等遺憾なき活動を續けてゐる。

恩賜財團濟生會でも、徹底的に救助の實を擧ぐべく總動員を行つて、赤羽本院と富士見町分院とには普通病室を、駿河臺には臨時産院を設けて、一切の世話をする事になつた。尙ほ市内と郡部の境に二十五個所の診療所と、四谷信濃町、深川、日暮里、三河島、南千住の五個所の無料病院を開設すべく計畫中だ。

愛國婦人會本部では、幸ひに震災を免れたので、直ちに本部を開放して附近の罹災民を收容し、會長下田歌子女史以下職員一同全力を盡して救護に當るべく、別に醫療部を設けて多數の患者を收容する一方牛ヶ淵公園、京華高女等の避難民にも炊出しをなし、更にフランネルを買ひ集めて、一萬枚以上の新衣を作り、下田女史を始め一同の職員が、車を曳きながら本所、深川、上野、淺草等にある焼出されの子供達に菓子やおもちやの慰問品と共に配給し回つた。

□基 督 教 青 年 會

キリスト教青年會では今度の震災に神田表猿樂町の全國總本部であるキリスト教青年同盟及美土代町の東京青年會館の兩方共焼失してしまつたがこの際黙視するにしのびすと長尾半平氏を震災救護委員長に推して、全國青年會員より五十萬圓と、米國キリスト教青年會のモット博

士を通じて百萬圓の寄附金及五十萬人分の毛布衣類外二百臺のトラックの寄附を募ることとなり、主事二十八名職員十七名義勇隊二十五名は迷子搜索・巡回理髮班・建築相談部、診療部、生乳煉乳分配班等を作り、各方面に互つて大活動を開始した。其の他上野公園外九個所にテント又はバラックを建設して罹災者を收容し、小兒または病弱者に牛乳を分配し、または郵便電報の取次をなす等罹災者のために盡力してゐる。

□本所深川の兒童を

三十餘年青兒施療事業に盡してゐる婦人共立育兒會は、本部病院託兒所等孰れも焼失したに拘らず、副會長弘田博士指揮の下に看護婦、事務員總が、りて最も悲惨な罹災者の多い本所深川の育兒託兒事業に全力を擧げることとなり、所轄警察署と連絡を執り初めた。尙ほ博士邸は目下施療所に當てられてゐる。

二、各婦人會の働き振り

震災後の各婦人團體は皆相當に活動を始め、キリスト教女子青年會は、孤兒の收容を始め、女子大學の櫻楓會は、小兒救護の外に幼兒の栄養を注意して巡回し、外國婦人俱樂部は青山學

院及新渡戸博士の邸に集つて、外國罹災婦人の爲め裁縫に没頭し、婦人協會中心の東京罹災婦人救護會は、府市の後援の下に食糧の配給と授産運動に、女子技藝學校女子商業學校等の協力を受け、婦人聯盟は各地の女學校と連絡をとつて、手工品を米國に送つて慈善市を開き、孤兒を仕末することを計畫中である。救済方面と毛色の變つて居るのは婦人矯風會で、赤十字社と共同で産院設置、古着配給の外、此度帝都復興審議會に「震災地に於ける焼失遊廓指定地廢止」の請願の爲全國的に結束して、五萬の請願書を後藤内相に提出中である。

三、地方救護班

滿洲、朝鮮、南洋、臺灣を始め全国各地より續々と救護班が上京して、各本部を定め、其の地方々々の出身者や、又は縁故者に食料被服を寄贈するは勿論、郷里に歸る便宜も與へ、極力救護の實を擧げた。

喜ばれた慰問袋

救護事務局あてに送ってくる内外各地の寄贈金品は毎日百萬圓平均に及んでゐるが、この内直接罹災者に配布さるゝ慰問袋には最もよく人情美がうかゞはれるとて係員や罹災者たちをよろこばしてゐる。殊に卅餘年前濃尾の地震になやまされて、各方面から多大の同情を受けた愛知、岐阜兩縣下からおくつてくる慰問袋は當時自分たちの経験したことから考案して石鹼、齒みがき粉、おとし紙、鉢、手拭など罹災者が一番こまつてゐるものをすぐ使へるやうにしたもので兩縣を通じて十萬餘袋に達し、同地から出張して來た青年團員により、本所深川その他場末の配給不足勝ちな方面に配付したので、大いに感謝され救護事務局あてに感謝状をおくつてくるものもある。

戒嚴令下の東京

一、帝都の不安

猛火全市を包んで混乱騒擾を極むる間を、流言蜚語が電光の如くに飛んで、市民は極度の恐怖に陥つてしまつた。事態重大！今は疲勞困憊した警察力に依つてのみ、帝都の秩序は維持さるべくもない。

ソコデ内田臨時首相は、二日午後閣議を纏めて参内し、攝政宮殿下の御裁可を仰いで、「東京市及附近」に對して、戒嚴令發布の手續を取つた。而して其の日の午後六時、山本内閣が成立を告げたので、内田臨時首相以下の總辭職となり、戒嚴令の實施も、そのまゝ新内閣の手に委ねらるゝことゝなつた。

帝都戒嚴！かくして軍隊は武装して起つた。

二、戒嚴區域の擴張

帝都戒嚴に引き續いて翌三日、戒嚴地域を擴張して、「東京府下全部及神奈川縣下」を加へ、

關東戒嚴司令部條例を發布して、即日施行した。

關東戒嚴司令官

陸軍大將 福田 雅太郎

(同月二十日甘粕大尉の違法事件が起ると共に、福田司令官は本職を免せられ、陸軍大將山梨半造氏其の後任に補せられた)

横須賀並に神奈川縣三浦郡全部

右司令官

横須賀鎮守府司令長官 野間口 兼 雄

而して戒嚴令は、四日更に勅令を以て、千葉及び埼玉縣にまで擴張され、戒嚴地域は一府三縣に及んだのである。

○戒嚴司令官告諭

今回の震害につき、救護を容易にし、治安を維持する爲め、東京府及び神奈川縣に戒嚴を令せられたが、此度更にこれを千葉及び埼玉縣に擴張せられた。この擴張は別に恐るべき事柄が起つた爲めではない。罹災者が次第に此の地方に入り込むに従ひ、いろ／＼の虚報流言が行はれ、人心を不安にすることがあるのを取締るのと、必要の場合には軍隊を以て治安を維

戒嚴令下の東京

持し、救護に従事するに便なる爲めである。地方民は決して流言に迷はさるゝことなく、避難民は地方民に對し不都合の行動をとることなく、いづれも地方官公吏警察官に信頼して平時の如く落付いて居つて、軍隊の厄介になるやうなことをしてはいけない。戒嚴を令せられても直接の取締は、地方警察官がこれに任ずるのであることを忘れてはいけない。

三、東京の警備

五日戒嚴司令部が、帝都の警備状態について發表した要旨を摘録すれば、「四日午後東京北部に於ては軍隊の配備完成し、各刑務所はその兵力を各約一個中隊に増加して萬一に備へてゐる。各隊は交通の修繕、並びに不逞漢の取締を嚴重にしたるため一般の人心は、引續き安定に向つてゐる。既に軍隊の警備が完成に近づきつゝあるから出所不明の無稽の流言蜚語に迷はされて、徒らに輕舉妄動をなすが如きことは、大いに戒める必要がある。」

實彈をこめた銃に着剣して、絶えず市中を巡廻し、要所々々を固めてゐる軍隊の威力は、着

々秩序を恢復して、帝都を包むだ不安の雲は、一日々々と掃かれて行つた。

□憲兵の配備

麹町分隊(大手町)、造兵廠分駐所(小石川元砲兵工廠内)、上野分隊(美術學校内)、千住分駐所(其地)、兩國分駐所(國技館内)、龜戸同(其地)、小松川同(其地)、芝分隊(芝公園手島方)、品川分駐所(北品川三業組合内)、川崎同(川崎町郡役所隣)、赤坂分隊(其地)、澁谷分隊(其地)、目黒分駐所(目黒火藥庫内)、玉川同(玉川村電車事務所)、四谷分遣所(其地)、早稻田分駐所(早稻田大學内)、中野分駐所(中野町飯田方)、淀橋同(角筈新町名古屋方)、荻窪同(荻窪村内田方)、板橋分隊(其地)、大塚分駐所(兵器支廠内)、池袋同(其地)、赤羽同(岩淵町)、王子同(其地)、立川分遣所(其地)、所澤同(其地)。

□檢問所開設

無頼不逞の徒輩の徘徊することを取締るために、警察と軍隊とが協力して五日以後、左の個所に檢問所を開設した。

停車場

戒嚴令下の東京

品川、日暮里、田端、赤羽、池袋、新宿、飯田町

陸路要所

八ッ山下、五反田、目黒、恵比須、澁谷、神宮裏、青梅街道入口、目白橋、大塚ガード

四、軍隊の配置

各師團の派遣部隊は、六日を以て殆んど全部東京及び神奈川縣下に到着したので、戒嚴司令官は隷下軍隊の新配置を左の如く定めて各隊は七日よりその配置についた。

(東京北半部) 近衛師團の大部、第十三第十四師團の歩兵三聯隊、工兵第二第八大隊、第二第三第十三師團の衛生部隊等。

(東京南半部) 第一師團の大部、第二第十四師團の歩兵三聯隊、工兵第十三大隊、第八第九第十四師團の衛生部隊等。

(神奈川方面) 第一師團の歩兵一聯隊、騎兵一聯隊、工兵第十四大隊等。

(藤澤方面) 第一師團の歩兵一聯隊、騎兵一中隊、工兵第十六大隊等。

(小田原方面) 第十五師團の派遣部隊、三島重砲兵旅團の一部、工兵第十五大隊、第十五師團救護班等。

(中山道方面) 第二師團の歩兵一聯隊、近衛騎兵一中隊。

(千葉縣下) 騎兵第二旅團長三好少將千葉縣警備部隊司令官となり千葉市に司令部を置いて同縣下にある軍隊、各學校教導隊を指揮して地方官憲と協力警備)

五、自警團

未曾有の災禍に、報道機關が殆んど全滅したことが、一層帝都を暗黒ならしめ、その間さまの流言蜚語が、口から口へと傳られて、猛火と地震に怯えつゝある市民の恐怖心を、いやが上にも煽るのであつた。

此に於てわづかに焼け残つた山ノ手方面と隣接郡部の各町とでは、各自生命財産の保護のため、青年團、町内有志等が結束して起ち、進んで自警團を組織するに至つた。

自警團は、各戸一人づゝの男子が出てこれに加はり、女世帯の家からは、湯茶を運んで勞を

ねぎらひ、各町毎に要所々に縄張りを爲し、或は丸太の柵を造つて、篝火を焚き高張を點げて、夜間はもとより日中と雖も通行人を誰何して、かりにも不審と認められたものは、直ちに取押へて軍隊に渡すか、警察に送つて、一步も悪漢を近付かしめなかつた。

數多の自警團の中には、棍棒、竹槍、或は刀劍、ピストルなどを持つて、熱狂のあまり常軌を逸するものもあり、或は自警團の名の下に犯罪行爲を働らくものさへあつたので、日ならず戒嚴司令部より、誰何並びに兇器携帶禁止の命令を發せられ、或者は遂に檢舉を見るに至つたのであるが、然しながら秩序全く破壊されて、やゝもすれば不逞漢の横行を見んとした危急の場合に、最も不安を極めたる山ノ手方面、及び隣接郡部の各町に、何等の事變も起らなかつたのは、軍隊警察の威力に因ることは勿論であるが、一面又た、これ等の自警團が、全力を擧げて警戒に當つた^{たまたま}と云はなければならぬ。況んや非常時に際して發揮された日本國民の相互扶助の美風と、國民義勇軍の訓練とは、自警團の功績の偉大なる副産物として、何人もこれを認めなければなるまい。

其の後秩序の恢復に隨つて自警團は、放火窃盜の他の警戒に任ずるの外、進んで避難者の

救護にも盡し、各町思ひ／＼に半永久的の小屋を造つて、各戸順番に勞務に服し、それ／＼の町内の安寧を保持してゐる。

六、流言蜚語

震災と同時にいろ／＼の流言蜚語が、焼け残つた山ノ手から郡部へかけて傳へられた。これもこれも無稽の人騒がせに過ぎなかつたが、非常突發の大事變に遭ふて、一種の恐怖性幻覺に囚へられてゐた當時の東京人は、可成りそれ等の流説にも迷はされた事は事實であつた。

□囚徒三百名

二日夜の九時頃。刑務所を脱出した三百名の囚徒が、兇器を提げて小臺の渡しから、飛鳥山方面に向はんとしてゐる。と傳へて來たものがあつた。同じく二日夜の十時頃。「今夜十二時に昨日よりもモットひどい大地震があるから氣をつける」と觸れて來たものがあつた。

□板塀の暗號

各所の板塀に○、△、◎等の記號を書いて回るものがある。○は放火、△は掠奪、◎は凌辱

戒嚴令下の東京

を意味する暗號だから、見付け次第警察に届け、各自十分の警戒を要する、と云ふことが誰れからともなく傳へられて来た。

□ 悪・漢・實・は・鼠

著者の家は飛鳥山公園の近くにある。二日の夜家族と一緒に直ぐ側の空地に避難してゐると土瓶を持出すために家に入った隣の妻君が、「お宅の中でゴトノ、何かしてゐる音が聞えます、」と云ひ出したからたまらない、ソレ悪漢が侵入したとばかり、其所に居合はせた二百人からの近所の人が、各々提灯を振りかざして著者の家を取巻き、中にも勇敢な五六人が、棍棒片手に入つて、階上階下、便所押入れから天井までも残らず捜した。その間「庭を警戒しろ」と屋内から叫べば、屋外からは「湯殿を捜せッ、臺所はごうだッ」と應ずる。結局何者も潜入してゐない或は鼠の騒ぐ音を聞き違へたのかも知れん、といふことになつた。

鮮 人 保 護

それ〴〵自活の方法を與へることになつてゐる。

□習志野の生活

習志野に收容されてゐる朝鮮人は、一棟毎に棟長を置き、炊事、消防、衛生、掃除等を自治的にやつてゐるが、食物は不足なく、建物は雨洩りなどの心配がないだけ、本所深川邊の避難民よりも上等である。その中の一人趙春玉と云ふ女は、一日の午後一時頃本所海邊町三二三番地で二十歳ばかりになる見も知らぬ日本婦人から、「一寸此の子を預つてゐて下さい」と頼まれて生後二ヶ月の嬰兒を受取つたが、待てども〴〵その婦人が歸らず、その内火が迫つて來たので件 嬰兒を抱へたまゝ砂村の方まで避難して、此所に收容されることになつたのだが、嬰兒の親はどうしてもわからぬので今は自分の子と定め、鄭世徳と命名して、しきりにこれを可愛がつてる様子を、狀況視察に來た山梨戒嚴司令官が、「感心なものだ」と特にいたはり慰めてやつた。

三、猛火中の鮮人美談

朝鮮慶尙北道義城縣生れの金鐘國(二十一)と云ふ若者は、今年五月東京に來て、本所區三笠町の長田鐵工場に職工として雇はれてゐた。然るに一日は休暇みなので巢鴨の友人の許へ行つてゐたが、主家の事が氣にかゝるので、急いで本所へ取つてかへした。もうその時は、あたり一面燃え盛つてゐたが、主人夫婦の姿は見えず、主人の長男幸太郎(五つ)が唯一人、逃げ場を失つて泣き叫んでゐた。これを見た金鐘國は、吾れを忘れて火中に飛び込み、やつこの事に救ひ出してこれを背負つた儘、あつちこつちと逃げ廻り、二日は龜戸に野宿して三日の朝附近の交番で保護を受け、數ヶ所の負傷を意ともせず、四日五日と一心に主人の行方を捜し歩き、やう〴〵六日に太平町で主人夫婦にめぐりあひ、涙を流して喜びながら一同打ち連れて砂町小學校に避難した。

四、相愛會と親友會

東京府下南千住に居住する朝鮮人の相愛會々長李起東氏、副會長朴春壽氏外百數十名は内務省に出頭し、此の際鮮人に對する一般日本人の誤解をとくと共に、今回の災害に對し社會奉仕

の爲め、誠意を披瀝し無料にて道路の障害物除去に働きたいことを申出でた。又た神奈川縣川崎町に居住する鮮人親友會々長都強煥氏は、三日以來部下三百餘名を指揮して、罹災地の跡片付けや、多摩川堤防崩壊の修復工事を無償で引受けた上、部下一人から一圓づゝを醸出せしめ罹災民救助費として各町村役場に寄附を申出でた。

□炭鑛坑夫からも

福島縣石城郡内郷村の磐城炭鑛に働いてゐる鮮人坑夫李仁淳等も、罹災民の窮狀に太く同情し、義捐金三百圓及び勞力提供方に關し所轄郡長警察署長を経て岩田同縣知事に申出でた。

□生麥では夜警

横濱、神奈川、鶴見等にゐた鮮人は、一時汽船華山丸に乗せて保護を加へたが、最早誤解もとけ、鮮人等も格別惡感をもつてゐる様子も見えないので、ぼつ／＼解放し始めたがこれ等の鮮人は、極めて眞面目に土工其の他の業務に服し、生麥村に居住してゐたものゝ如きは、その夜から進んで夜警を志願して、神妙に働いてゐる。

哀話感話

一、被服廠跡

— 其夜の一大旋風 —

三萬二千人の焼死者を出した被服廠跡は、本所區石原町にあつて、以前陸軍被服廠のあつた所だ。二萬坪の面積を有する土地だが、周圍に一本の樹木もない廣漠とした空地である。それでも人家が密集して萬一の場合、他に適當の避難場を持たない附近の人々の中には、かねて火事でも起つた時には、取敢えず此所に逃込むことにきめてゐた人も少くはなかつた。されば出火と同時に被服廠指して逃げ込んだ避難者の數は夥たゞしいもので、貴族院議員法學博士磯部四郎氏の如きもその中の一人として、遂に無慘の焼死をまてしまつた。とかくするうち猛火は四方から襲ひかゝつて雨あられど火の子が降る。まづ持ちこまれた荷物が燃え出すと、つゞいて恐ろしい旋風が起つて、見る／＼一面の火の海となつた。焰と煙と旋風に捲き込まれて、わつ、わつと逃げ回る阿鼻叫喚の焦熱地獄は十幾時間と續いて、此所に非業の最後を遂げた山なす屍骸は實に三萬二千幾百と算へられた。

□全身に泥を塗つて

鐵道省經理課勤務の竹内泰信氏も、此所に避難した人であるが、不思議に一家三人とも助かつて、嬉し泣きに泣いてゐる。竹内氏は語る、「私の宅は龜澤町ですが、出火と同時に誰れが云ひ出したのか被服廠跡へ避難せよと觸れ回る者があるので、母と妹とを連れて逃げ込みました。此時兩國橋驛と本所局の方面からの猛火に四方を包まれ、幾萬と知れぬ避難者の阿鼻叫喚耳を聳するばかりでした。丁度一日の午後四時から五時までの間でしたが突然大旋風が起つて人間をさへ捲き上げ、中には火の子を防ぐためにかぶつてゐたトタン板ぐるみ高く捲き上げられるものがありました。その中に火の子が中央に積んであつた荷物に燃え移つたから耐りません、瞬く間に何千何萬人と云ふ人がバター／＼焼き殺されるのでした。私も最早覺悟をきめました、せめて母と妹だけでも助けたい一心から夢中で地を堀り、呼吸の出来るだけの隙をあけて三人とも生理めのやうになつて其中に入り、そして身體中に泥を塗つて地面にしがみつき、運を天に任せてゐました。大旋風が起つて猛火が降りしきる時など誰れしも生きてゐる心地がないと見え、聞えるのは唯だ念佛とかお題目の聲のみでした。漸く夜が明け渡ると私達の周圍

は一面の焼死體で、幸運にも命を助かつた人々は、所々で一かたまりづゝむく／＼起ち上りましたが、モウ誰れも咽喉が哽れて聲が出ず、わづかに手眞似で互の幸運を喜びあひながら死體の中を抜けて集まつた人が、約千五六百名はあつたと思ひます。」

□子供が天から降る

これも被服廠跡へ避難して、萬死に一生を得た市街自動車會社の會計主任鈴木利久太郎氏の妻女の話——「本所緑町の自宅から私は乳呑兒と六歳になる子供を連れて被服廠跡に逃げ込みました。モウ空地一面の人波でしたが、さうかうする内物凄しい旋風が起り、火焰が渦をまいて、荷物と人の差別なく燃えつきました。その時アレヨと思ふ間もなく六歳になる子供が捲き上げられ、どうする事も出来ず泣き叫んでゐると、目の前にその子供が天から降つて來ました。ソコで漸う窪地へたどりついて、二人の子供を覆ひ隠してゐると、左右から寄りかゝる人がゐて有難いと思ひましたが、氣がついてよく見ると、それはモウ死んでゐる方でした。かうして一命を助かつて朝になつてから外に出ると、千葉縣幕張のお百姓が居つて其の方に救はれて十三日までお世話になつてゐました」。そして夫の鈴木氏は、會社から緑町に駆けつけた時には手の

出しやうもなく、猛火に追はれて大川へ飛び込んだが、それから夢中で、氣がついた時は船橋にゐたので、再び東京に引つかへし、旬日の後に妻子を捜し出して、親子歡びの涙に咽んでゐた。

□巡査と校長

被服廠跡の入口に立つて、右往左往に狼狽する罹災者を、「此所へ／＼」と呼び入れてゐた一人の警官があつたが、突如起つた大旋風に忽ち一面火の海となつた有様を見て、自分が呼び入れたばかりで數多の人を焼死させた、その責任感から、抜いてゐたサーベルをグザと腹に突き立て、其場に自殺した。又た相生小學校長山本長治氏は、國民教育に一生を捧げる人格者として知られ、日頃劍道によつて心身を鍛鍊してゐたが、遂に被服廠で焼死してしまつた。そして兩腕を以て御眞影をしつかり抱き、傍には數名の男女訓導と、五六人の教へ子とが押重なつて死んでゐた。もし校長が單獨だつたら、どうにしても危急を脱することが出来たらうが、取纏る教へ子達と運命を共にした爲め、とう／＼烙に包まれてしまつたものだらう、と生き残つた職員や兒童は、ひたすら冥福を祈つてゐる。

□火中に飛込んだ山内署長

相生警察署長山内秀一氏は、出火と同時に全署員を激勵して、狼狽する区内の人々を、被服廠跡に避難させたが、突如として起つた大旋風に、見る／＼猛火が四方から襲つて、危険迫れりと見ると等しく、吾れから其中に飛込んで、極力防禦に努めたのであるが力及ばず、遂に愛兒の手を取つたまま、焼死してしまつた。

□納骨記念塔

帝都に於ける震災の犠牲者は、約七萬七千人となつてゐる。それでこれ等多数の遺骨を如何に處置するかといふことに就ては、死者の冥福を祈るため回向院のやうな一大寺院を創立してはその説もあるが、東京市では最も多数の惨死者を出した被服廠跡を、公園とする計畫になつてゐるので、此際同所に納骨堂を兼ねた一大記念塔を建設して、それ等の遺骨を收容すると共に、長へに東京市民をして、此の慘禍を偲ばせることに、略ぼ内定してゐるといふ。

二、油堀地獄

——交通を断たれた深川——

本所區に次いで慘狀を極めたのは深川區である。火災と同時に橋といふ橋が全部焼け落ちて、交通が全く遮断されてしまつた。黒江町から數町の所に岩崎公園があつて、此所に逃げ込んだ六七萬の人は、約一丈のコンクリート塀と、鬱蒼たる樹木のお蔭で幸ひに危難を免れたが、永代橋方面に脱出せんとした數千人は總て途中で絶息してしまつた。區内では糧秣廠を第一として千鳥橋、高橋、伊豫橋、船木橋等いづれもその附近で三百人以上からの死人を出してゐる。深川何百の橋が全部不燃焼で出來てゐたら一萬に近い生靈が完全に助かつたらうといはれてゐる。その内でも糧秣廠廣場の方へ逃げやうとする途中に千鳥橋俗稱油堀と稱する倉庫に驚くべき焦熱地獄を現出した。一日午後十一時頃各方面からの火に追はれて糧秣廠へ逃げ込もうとして何千人かゝ千鳥橋に差掛つた。橋は見る／＼焼け落ちたが附近の倉庫には未だ火がついてゐないので、進退窮はまつた人々は皆なその倉庫の前に密集してゐた。然るに間もなく猛火は倉

庫に燃え付いて炎々と焰を噴き出したので、それ等の人々は前後を忘れて凡て油堀に飛込んだ。上から上から何千といふ人が飛込むのだから、浅い堀だが下になつたものはたまらない。つぶされて溺死するものがあれば焦げ死ぬものがある。背中に火がついてるのに二言三言女房子を呼んでゐたのさへあつたこのことで、火災後こゝから引上げた死體の数は約六百と算せられた。高橋も同様の慘事で本所深川兩方面から双方脱出口を見出さうと駆けつけた人々が悉く死んで陸に約三十名河に數百の死體が発見された。富川町際の伊豫橋は本所林町菊川町方面の人の死んだ場所で判明した死體五百とある。

三、呪ひの池

——吉原遊女の屍——

被服廠跡油堀と共に酸鼻を極めた所は、吉原遊廓病院脇の泥池である。地震に先づ大方は潰れてしまつて、澤山の壓死者を出したところへ、火は江戸町の一角から起つた。病院の傍にある池は周圍約二百坪位の廣さであるが、廓内唯一の避難所であるだけに、寝亂れ髪ねみだりかみの遊女達は、

先を争ふて逃げ込んだ。一方千束町の方から猛火に追はれて押寄せて來た避難者は非常門を打ち破ると、ドツと雪崩れを打つて、その池を目がけて、逃げ込んだものが彼是れ三千人。わづか二百坪ばかりの廣さで、周圍にさして樹木も植はつてゐないので、瞬く間に此處もまた四方から猛火に攻められた。全身火の子に焼けたゞれた遊女達は、聲をかぎり「助けて〜」と泣き叫ぶ。遂には苦痛に耐えかねて、池の中に飛び込んだ。

丁度摺鉢のやうな底深い泥池で、アツと云ふ間もなく、ズブ〜と泥に埋まつて行く。一人二人、はては五人十人と押重なつて、何尺と知れぬ泥池の底に吞まれて行つた。全身泥にうづまりながら首だけを上に出して、辛うじて一命を助かつた人の話によると、水底の足許では人のうごめくのがわかつたさうで後で引上げて見たら、殆んど水ぶくれさへせず、現状のまゝの凄みを見せてゐた程で、如何に多數の者が押重なつて死んだか判る。此の池で死んだ者は凡そ千五六百はある見込みで、その内遊女は五百名に及んでゐる。

□漂う髪の毛

あくまで悲しい運命に呪はれた五百の遊女達の屍骸は、二十三十と人足の手ひとあしに焼かれて骨は

數個の石油箱に入れて、池の周圍に積み重ねてある。新潟福井關東北から上京した遊女の身内らしい人達は、顔も上げ得ずに佇ずんでゐる。新潟から来たといふおばアさんは「一つの死骸の側へ寄つら、たタラ〜と鼻血を出しました。あれが娘に相違ありません。」と云つて泣いた。池には今猶ほ腐爛した肉片や髪の毛が漂うて、ごす黒い水面を見ては、思はず顔をそむけずには居られない。遊女三千、五丁街もかうして滅んだ。

四、親子を引離した船

本所區綠町三丁目の鈴木金次郎と云ふ人は火が迫ると長女あき(十四)に二女たよ(四つ)を背負はせ、自分は長男正太郎(六つ)を背に、生れて二ヶ月の三女さこを抱き、産後の妻を肩にかけて、夢中で立川まで逃げ延びた。スルト川筋は一杯の避難者で、その内一人が岸に繋いであつた傳馬船を見つけ、てすばしこくそれに乗ると、後から大勢がドヤ〜と其船に乗込んだ。金次郎も逸早く長女のあきをそれに乗せ、續いて妻を乗せやうとする刹那、船はサツと岸を離れた。呼んでも叫んでもワツ〜と湧きかへる混雑で通ずればこそ、金次郎は狂氣の如く妻の

手を引き、火中をくわつて船を追ふたが、妻は忽ち人ごみに押倒されて無慘の死を遂げた。此の體を眺めて金次郎は、一時は茫然と爲す所を知らなかつたが、やがて自分の背中と腕にある二人の子供のいぢらしさを思ふて河中に飛び込み、火の粉を拂ひ〜杭につかまつて、やう〜命を助かつた。「船に乗せた二人の子供も無論死んでせうし、一番小さいさこも乳がないのと泥水を呑んだ爲め十一日に亡くなりました」と金次郎は毎日男泣きに泣いてゐる。

五、風呂敷に包んだ生首

避難民を満載した郵船山城丸は、九月五日横濱を解纜した。その多數の避難民の中にまだ若い二人の婦人がゐたが、二人ともたつた一つ宛の小さい風呂敷包みを抱えて、絶えずさめ〜と泣いてゐた。その内に彼女等の持つてる風呂敷包みから、變な臭ひがすると云ひ出した者があつたので、船長が二人をなだめすかして、それ〜の包みを開かせると、血がこびりついて、半ば腐爛してゐる男の生首が二つ轉がり出た。アツと船長も驚く、周圍に集つてゐた避難者達も飛退く。「これは煙に巻かれて死んだ私達の夫です、せめて顔だけでも故郷の人達に見せたいと

思つて——」と云さしてワツと二人とも泣き伏した。

六、一人の父

本所區林町に住む豫備軍曹安東兼吉氏の父は七十二の老齡で長い事病氣をわづらつてゐた。それに妻と、五歳と三歳になる二人の子供がゐた。丁度地震の際は淺草に出掛けてゐたので取る物も取敢へず我家に駆け付けて見ると家は倒壊した上に火に包まれ、父も妻子も棟木の下敷きとなつてゐた。聲を張り上げて名前を呼ぶと、まだ四人とも助かつてゐることはわかつたが、もう其時は前も後も一面の火で、とても四人を救ひ出すことが出來ず、最愛の妻子も一人の父には替へられぬと萬死を冒してやつと父だけを助け、見す／＼息ある妻子を置去りにして、父を背負ひ、猛火の中を東に西にかいくゞり、上野公園にたどりついて、ソツと背からおろして見れば、父は既に絶命してゐた。

其の後狂へる人のやうになつた兼吉氏は、麻布聯隊區司令官の高城大佐から、多少の金子と着物をもらつて、いさゝかの身寄りを持たより、悄然京都へ向つたと云ふ。

七、焰の下で念佛

神田今川小路二丁目の葛籠屋は地震と共に倒壊した。逃げ遅れて梁の下敷きになつた十一になる女の子は「おとうさん」と悲鳴をあげた。父親が驚いて駆けつけて見ると、身體は全く下敷きになつて二本の腕ばかりが見える。父親は一生懸命引出さうとしたが駄目である。子供はしきりに「おとうさん」と叫ぶ。父親は氣が氣でない。その時女子職業學校を焼き拂つた火の手が、紅蓮の舌凄まじく追つて來た。父親は必死となつて梁を取り除かうとしたが力及ばない。遂に我が家に火が燃え移つたのを見て、今はこれまでと涙を吞んで、「おとうさんは直き戻つて來るからそれまでお念佛を唱へて寝てゐなさい」と血を吐く思ひで愛兒に別れ、危く外に逃げ出した。

八、死遅れた老婆

千三百人からの焼死者を出した淺草區田中町の田中町小學校建設地には、被服廠跡と同じく

供養所が設けられ、十月五日には町内の生き残つた人々で、寂しい回向會が行はれた。此の町での哀話中の哀話は六十三番地の山本きう一家である。同家では主人と五人の子女が惨死し、七十近い老婆のきう一人が生き残つた。何と云ふ惨酷な運命であらう。

名は逸したが、これも田中町に住む大工の某は、お神さんと火の子の降る中を、聖天の境内に避難しやうと夢我夢中で走りつけ、やつと境内近くまで来て、ふと気がつく、女房の手が妙に硬ばつてゐる。病弱の妻は心臓麻痺を起して途中で死んだのも知らず、引張り通しに引張つて來たのだとわかつた時の大工の驚きと悲しみは云ふばかりなかつた。

九、此のチビが可愛想

三日の夕方、避難者の群でうづまる江戸川端に、所々に焼け焦げのある印半纏を着て、三歳ぐらひの女の子を背負つた労働者風の男がゐて、「深川の者ですが、女房は焼け死ぬ、ちつとばかり持つて出た荷物も、あつちこつちと逃げ回つてゐる間にスツカリなくなつた、このチビが泣いてく可愛想ですから、どうか助けると思つてもらつて下さい」と涙を流しながら、往來

の人をつかまへては、手を合せて頼んでゐた。

十、愛兒の死體を焼く

真先きに焼き拂はれた神田神保町の某酒店の主人、その焼跡から二十歳になる娘と十三歳になる男の子の死體を見付け出して、検視に立會つた警官の勧めで、我家の焼跡で愛兒の死體を始末することになつた。主人はまだあたりに焼け残つてゐる酒を無茶苦茶にあほりながら「酔つた勢ひでもなければどうして自分の子供を焼くませう」と云つてポロ／＼と涙をこぼした。

十一、攝政宮、謁を賜ふ

近衛師團では今度の震災で、一身一家を顧みずして社會公共のために奮闘した勇敢な人々に付き調査してゐたところ約百名に達し、その内から更に左の數名を選抜してその行狀を文書にしたため、桑田侍從武官を経て攝政宮殿下に献上し、殿下にはそれ等の人々に特に謁を賜ひ、その行爲を表彰あそばされた。

□神田佐久間町二三丁目及び平河町の一部即ち神田川筋の一部が焼け残つたがそれは同町の作間耕逸代議士及び魚住豫備中尉等が中堅となり土地の青年團、在郷軍人團を集め奮闘した賜で且つ逸早く神田川倉庫から白米一萬二千俵を出して市に提供した。下町の罹災民の口に眞先に入つたのはこの米で、作間氏等の機智の賜である。

□淺草區新旅籠町一七醫師小野養治氏は、自宅が焼失したに拘はらず、市から醫藥を分けて貰ひ、獨力で五日から十五日迄藏前專賣局跡に救護班を組織し、七百人の人を救つた。

□南葛飾郡寺島町有馬秀雄氏は、自己の米味噌衣類を持出し、負傷者に手當を加ふるなど約五萬人を救つた。

十二、五發の非常砲

毒焰全市を包んだ一日の午後三時半頃、東京衛戍司令部は五發の大砲を打つた。これこそ國家非常の場合の合圖であることを教へられてる現役軍人は、素破すはとばかりに西より東より宙を飛んで所屬の部隊に駆けつけた。中に、慰勞休暇で本所の我家に居つた麻布三聯隊の松尾一等

卒は、今しも老婆と幼弟を促して被服廠跡に逃げ行く途中、端なくこの非常砲を聞き、涙を揮つて老母達と別れ、營門指して飛んで行つた。老母達は其のあとでとうとう残らず焼け死んでしまつた。これも本所の自宅に歸つてゐた同聯隊の米本伍長は非常砲を耳にすると同時に、既に一面火の海の中を、右に左にくわりのめて、やう／＼營門に入ると等しく氣が緩み、數ヶ所の大火傷でドツと其場に打ち倒れた。此の外同隊の兵士にはこれに類した感話が澤山ある。

十三、宮城守護の勇士

宮城を安泰に守護し奉つた勇士として市村皇宮警察部長から表彰方を上申された人々は、同警察部に十數名からゐるが、中にも殊勳者として畏き邊の上聞に達したのは、田中、服部、杉本、熊谷、板橋の五警手で、田中、服部の兩氏は麴町赤坂方面からの火の子が、雨あられと振天府有光亭に降りそゞぐのを火傷を物ともせず消し止めた人々。杉本熊谷の兩氏は、林野管理局の火が、大手門の樓上に飛んで來るのを見ると、バラ／＼と瓦の落る中を猿さるの如く攀よち登つて、これを揉み消した人々。最後の板橋氏は、主馬寮踏鐵工場の潰れたのを見ると同工場に

は常に火氣のあることを知つて、飛鳥の如く駆けつけ、瓦を排して其の上から水をそそぎ、幸ひに事なからしめた人である。

十四、富川町の小父さん

大正四年警視廳巡査を命ぜられて以來、深川區富川町から猿江裏町にかけての細民街を擔當し彼等の救護善導に一身を獻げて、勞働者たちから「富川町の小父さん」と呼ばれて深くも慕はれてゐた扇橋署の巡査小野塚與八氏は、地震と共に直ぐ様富川町へ飛んで行つて、同町の親方大寅の子分二十餘名を指揮して、梁や屋根の下敷きになつてゐた勞働者六十餘名を救ひ出した上、更に猛火が富川町一帶猿江裏に迫つて來ると、幾度びか火中をかいくつて數千の避難者に安全な逃げ路を示した。もう其の時は身體數ヶ所に傷を負ひ、やがて官服に火が燃えついたので一旦川に飛込んで避難したが、間もなく再び這ひ上つて、逃げ遅れた人々を救はんとする刹那、突として起つた大旋風に吹き飛ばされ、遂に焰に包まれて悲壯な死をとげた。

十五、義人表彰

陸軍側では今回の震災について己れの身をわすれ、家をわすれて多數の人を救助した東京市方面委員の京橋月島稻垣末吉、小石川區太田宣次郎、淺草區島本龍太郎の三氏に對し表彰方を永田市長に申請し東京市では近く三委員の功に報いるためその表彰式を行ふといふ。稻垣氏は人も知る關東の俠客◎政の大親分であるが、氏は一日の大震災にあつて、三號地の自宅のみが焼けないので、附近一帶の罹災民全部に自宅を開放し、直に食糧を給與し、今なほ寢食を忘れて配給につとめつゝある篤志家、小石川の太田宣次郎氏は大震災當日家にあつたが、附近の博文館工場で職工數十名が屋根の下敷となつたのを認め直に自分のオートバイを操縦し赤羽工兵隊に急を訴へ、工兵四十名の出動をうながしたので下敷となつたものうち重傷十八名、死者卅六名を掘出し、館主大橋新太郎氏をして泣いて感謝させたと、淺草島本龍太郎氏は當日自宅は一面の火につまれ全焼したので願みず、吾妻橋に立つて逃げ行く數萬の避難民が、危険な吾妻橋を渡るをくひ止め、安全な上野公園にみちびき入れたといふ殊勳者である。

十六、住友銀行の決死隊

日本橋區久松町の住友銀行東京支店は、茫々たる焼野原の中に、奇蹟的に残つた建物の一つだ。一日の午後三時頃、行員は危険が迫つたと見てそれ〴〵引揚げた。中に庶務課長の平賀昌一氏ばかりは、飽迄銀行と生死を共にすると云つて残つた行員、守衛、小使等十名を勵まして全部の窓のシャッターを下して、「私は死を賭して銀行を守る、諸君は必らずしも止まるに及ばぬ」と言渡したので、その中の五名は見返りがちに立ち去つたが、残れる五名は平賀氏の悲壯な決心に感激して其の場を去らず、諸共に銀行内に立て籠ることゝなつた。その中に猛火は四方から襲ひかゝつて煙突からは煙が濛々と渦巻いてくる。刻々に熱氣は周囲の壁を徹して來て、今にも一同蒸し殺されさうになる。最早これまでと覺悟した六人は、ソコで住友社長等にあてゝ最後の遺書を認め、一同相擁して死を待つた。然るに此の時風位が俄かに變つたかして、さしも猛烈に迫つてゐた火が、見る〴〵他所へ移つて行き、萬に一つとも思はれた同行は、かくして焼野に唯一つ残つた。六人の決死隊は言葉もなく、互に手を握るばかりであつた。夜はし

ら〴〵と明けた。

十七、殉職校長

本所區北二葉町の二葉小學校長前澤誠助氏は同校が猛火に包まるゝ最後迄踏み止まり、他の二三訓導と共に御眞影及重要書類を一旦被服廠跡に搬出避難したが、單獨で再び取つて返し、終に學校と運命を共にして焼死した。尙同校職員中區内在住者は大半焼死した。

十八、震災餘話

一、射殺された猛獸

淺草公園名物の一つと云はれた花屋敷ではいよゝゝ猛火が燃え移ると、獅子も虎も豹も大蛇も悉く射殺した。「あの混乱の際に猛獸までも飛出しては大變だと思ひ、四五人が〴〵で射殺しましたが、虎の子五匹と鹿二頭とは無事に他へ移しました。象も大きいのは殺して小さいのは五重塔へ繋いで助けました。四十四匹からの猿は檻から出して自由行動を取らせたので、始めは

樹から樹へと逃げて喜んでゐましたがそれも東の間で僅か六匹生き残つた外は、皆んな火中に焼死しました。熊が一頭穴倉の奥の方に残つて不思議に助かりました。ペリカンは水中にもぐつて助かり、鶴も幸に焼死を免れましたがその他の小鳥や何かは大概死んでしまひました」と其の中の一人は暗然として語つた。

□銃口をそらした動物園

常盤華壇に火が移つて、最早や上野も駄目かと思つると、數十名の係員が、いづれも手に銃を持つて、スハと云は片ツ端から射殺しやうと身構へたが、その中だん／＼と火勢が衰へいよ／＼無事としまつたので、一旦向けた銃口をそらして、一同ホツと胸を撫でた。

二、水上で救つた五萬人

今度の大地震で陸上と相俟つて水上警察署の活動は實にめざましいものであつた。同署で助けた人命は、五萬を超えるが、寺坂署長の談によると、「地震と共に非常配置をして八重洲快心の兩汽艇を始め、千早外五艘のモーターを各川筋の救護に出し、同時に隅田川汽船の小蒸汽隅田丸を徴發して極力救護に努めたのであるが、フイゴの口から吐き出す様な勢ひで火足が速

いため陸上も容易に逃られなかつたものと見え川筋は大小を問はず、避難の人々が乗り込んだ荷足や傳馬船が數知れずまごついて居た。それも船頭が乗つて居ればよいが手當り次第苦しまぎれに飛び乗つたのであるから、火の迫るにつれ悲鳴を揚げて居るのみで船を動かすものもない。そうかと思へば家根がドン／＼焼えて居る倉庫の下に船を繋いだ儘安全のつもりで居るものもあり、實に危険極まるもの許り、各方面に出動した署の船は之等の船を手當り次第に引張つては安全地帯に運んだのだが、避難民の乗つて居る船は、何れも河岸に繋いである爲、淺くて汽艇が近づけぬ。止むを得ず網を投げ、或は署員が川の中へ這入つて先の船に結びつけ引いて逃げたのだが署員は悉く最後迄踏み止まり火の中でよく救助に努めた。二百四十名の署員の内勤務中自分等始め百四十一名の家が焼けてしまつた」と。

三、地震を豫知した鼠

鼠が家を出る時は屹度火事がある。鼠は火事を豫感するものだと言はれてゐるが、今度の大地震當日、外神田の乾物問屋川紋では、前夜かけておいた専賣特許の鼠取り網に四十何匹と云ふものが一時にかゝつたので、何かなければよいがと思つてた處、果して三時間を出

ずにあの大地震大火事がやつて来たを話してゐる。

四、お化粧遠慮の事

震災後市中到る所の電信柱に「この際御化粧を御遠慮下さい青年團」といふビラがベタ／＼貼つけてある。

五、焼跡から小判

銀座の丸八と云へば藥劑店の老舗として江戸名物である。焼出された當主松澤八右衛門を始め家族店員十數人は、目下目黒の借家に住んでゐるが、茲に意外な福運が湧いて起つたと云ふのは、同家には先祖代々一家の爲にと秘して傳へられた遺言状の一卷があつた。生命よりも大切に守られて来た其遺言状も着のみ着のまゝ逃げ延びた一家の爲には遂に開かれねばならぬ破目に陥つた。「困つた時には土藏のごころを掘り返せ」との簡単な文句が其全文であつた。主人は雀躍りして人知れず遺言状にある場所を掘り返してみたところ、果して小判を一杯に入れた重たい壺が三箇見出され一家は夢かと思ひ喜び合つてると云ふのである。

六、鯉も猿も

猛火に追はれて何萬と云ふ人が日比谷公園に逃げ込んだが、夕飯はもとより中には晝飯も食つてゐないと云ふ人が多かつたので、大事に公園の池に飼養してあつた鯉や金魚や家鴨や鶴を始め、運動場の猿までも残らずそれ等の人々に食ひつくされてしまつた。

七、銅像の貼紙

行方不明になつた家族や、親戚や、友人や、又は自家の雇人などの在所を捜すため、塀と云はず電柱と云はず、所構はず「何々居所知らせ」と書いた紙が到る所べた一面に貼られてあつた。上野の西郷さんや二重橋前の楠公の銅像までが此の貼紙で満艦飾。

八、寛永寺に記念塔

上野東叡山寛永寺では、今度の大地震で逸早く一山廿五ヶ院、徳川家兩靈屋を開放して約一萬八千人の避難者を收容し、同時に多數の焼死者を生じた場所を巡廻して讀經をなし、且つ有縁無縁の横死者の靈を集め、寛永寺境内に記念塔を建て、永代回向する事となつた。

十九、門外不出

一、帝大の五十萬冊

帝國大學圖書館の全焼した事は學界に取りて償い難き一大損失である。帝大の蔵書七十五萬冊の中五十萬冊以上を失ひ、之れを金額に見積れば約一億圓の損失になるさうだ。特に惜しむべきは莫大の自筆本で其中には眞版の續萬葉本とか、足利時代の蔭涼軒目錄とか、馬琴自筆の日記、マックス、ミラー著の吠陀の原稿本等がある。

□日本貿易史も灰

大藏省所管の圖書全部の焼失も惜むべきものだ。大藏省關稅局で明治十八年から廿三年までかゝつて完成した神功皇后以來明治初代までの貿易史の未定稿の如き、又金座(今の日本銀行)銀座、錢座に關する書類三千冊、舊幕府理財會要十冊、お仕置類例集百六十冊、大日本和稅史千冊の如き、とりかへしのつかぬ珍本異書を灰にして終つた。

□吃又の屏風

天下の珍と云はれる書畫骨董の焼失したものも少くない。就中井伊伯爵家所蔵の吃又の屏風菊池惺堂氏(東海銀行頭取)愛蔵の華山筆の千公高門、麴町越又質店主人所蔵の金岡の地藏等は天下の書畫愛好家をして垂涎せしめたのだが悉く灰燼に歸した。

又た淺草藏前の舊家たる酒井清兵衛氏は先第一に光悦七種茶碗の一たる名物「鐵壁」を亡つた。天下屈指の名質と稱された銅羅も亡つた。雪舟三觀音の一で小堀遠洲が褒めちぎつた書簡の副つてる小牡丹古金襴表装の名幅も亡した。「鐵壁」茶碗の如きは、「大正名器鑑」を編纂するに方つて之を一見した高橋帯庵氏が垂涎三尺に及んだ代物である、——少くとも五萬圓以上には評價し得るものですネ——同氏は暗中を漏らした事もあつた。不思議にも今度の震火災の祟りでは光悦七種茶碗に向一品鎌倉で「雪片」といふのが破損の厄に逢つた。これは金澤の好事家松岡氏の所蔵であつて、先般鎌倉へ來遊に際して携へて來つた數種の稀世品中の一である。七種茶碗が二個まで一時に滅びたのは、惜しみても餘りあるが松岡氏の座右には此れ以外茶器中の貴重品とされてゐる井戸茶碗のうちで大關格の無二品「寶珠庵」が在つた處、家屋の倒塌した際如何なる拍子か屋上に飛び上つて、無事に儼存して居たといふ事が、當の所蔵家は

素より斯道家は皆胸を撫下した。

二、土手の道哲も回向院も

江戸名所の灰になつた所を舉げて見れば、淺草北清島町の源空寺、此寺には幡隨院長兵衛と我國天文学の始祖高橋國時の古墳があつた。次は同區新谷町の幸龍寺。此寺には吉原百人斬の佐野治郎左衛門の墓があつた。次は同區聖天寺の西方寺一名土手の道哲。初代高尾の墓に依つて知られてゐる。又山谷町の易行院には花川戸助六、永住町の東陽院には十返舎一九、同町の誓嚴寺には畫家葛飾北齋の古墳があつた。明暦年間振袖火事で死んだ十萬幾千人の靈を弔ふ爲に建立された本所の回向院も灰になり、白河樂翁公の墓所のある深川區の靈巖寺も焼け、江戸時代の大學であつた湯島聖堂も焼失した。

皇室の御救恤

一、御内帑金壹千萬圓

天皇陛下には、未曾有の慘禍を開召されて太く宸襟を惱ませられ、直ちに罹災民御救恤の思召を以て、御内帑金壹千萬圓御下賜の旨を仰出された。右御内帑金は、三日午後六時三十分、山本總理大臣が赤坂離宮に於て、攝政宮殿下より拜授した。同時に攝政宮殿下より、左の如き御沙汰を賜はつた。

御沙汰書

今回稀有の大地震東京及近縣を襲ひ、之に加ふるに大火を以てして、其の慘害甚だ大なるは、實に國家生民の不幸なり。予は其の實況を見聞して日夜憂戚し、殊に罹災者の境遇に對しては、心深く之を傷む。茲に内帑を頒ちて其の苦痛の情を慰めんと欲す。官民其れ協力して適宜應急の處置を爲し、以て遺憾なきを期せよ。

而して此の御下賜金の處分については、政府は出來得るかぎり聖旨に副ふやう慎重審議中であつたが、九月二十日の閣議でいよいよ東京を始め、神奈川、静岡、千葉、埼玉の一府四縣に

對し、各其の罹災者の數に應じて配分することに決定した。尙ほ各府縣に於ける配分方法は、各個人に對し現金にて支給し、遺憾なく聖旨を徹底せしむる方針であると云ふ。

□社會事業團體へ

倒壊焼失の厄に逢つた優良な社會事業團體社會事業協會以下三十五團體に對し、應急の資として金三萬圓を下賜せられ、内務司法文部の三大臣をして傳達せしめられた。

二、皇后宮の御仁慈

今回の震災に殊の外御痛心遊ばされて、日々侍臣に罹災民の救恤その他に關して、種々の御下問と御注意を賜はり、深く罹災民の境遇に御同情あつて、自分は一汁一菜でも苦しからぬとの仰出あつた皇后陛下には、九月二十九日午前七時四十五分日光發、十一時二十五分上野着御召列車で還啓遊ばされた。

御出迎の山本首相以下に、一々慰勞の御言葉を賜はりつゝ、災害の帝都に第一歩を印せられた、サツと御顔色を曇らせられた陛下には、それより御召自動車で上野臺へ御立寄りになり、

御目のあまり全市の惨状を御覽せられ、終つて「罹災民の實状を」と仰せられて、御疲れも厭はせられず、博物館附近のパラツクを仔細に御覽あつて、市の救護所へ玉歩を運ばれた。此所には渡邊ついで(三十二)と云ふ婦人が、四つを頭に二つの子と、二十七日に生んだばかりの赤子に乳を哺ませてゐた。陛下には其の四歳の子を御覽せられて、「おいしくつ？」と御問ひになつた。子供は四本の指を出して(四つ)と答へると、「丈夫なお子」とおほめになつた陛下の温かき御情には母親を始め、拜する人々感涙にむせんだ。それより神田の和泉橋病院へ向はせられ、井上勝之助侯の御先導、田代博士の御説明を聞召されて、洩れなく病室を御見舞になり、種々の有難き御心葉を賜はつて再び自動車に御召になり、途々焼跡に御目を配らせつゝ、二時過ぎ宮城に還啓になつた。

翌三十日の皇后陛下は、午前八時三十分大森太夫、關屋宮内次官以下の供奉で自動車に御召になり、焦土の都を下澁谷の日本赤十字病院に成らせられ、平山社長の御先導で隈なく病室を御巡覽あつて、罹災傷病者に厚き御慰問の御言葉を賜はり、職員にも優渥な御説があつて、同十時十五分御出門青山六丁目の青山學院に御成り、聖路加病院の診療班と、東京市の孤兒迷ひ

子收容所を御慰問あり、特に孤兒迷ひ子のいちらしい姿に御目を止めさせ、御涙をさへ浮べさせられて、何くれと厚き御心付けの御言葉があつて、同十一時過ぎ同所御出門、十一時四十分赤坂離宮に成らせられて攝政殿下と御對顔、午餐を御一緒に召させられて午後一時三十分御出門、更に四谷慶大病院、三宅坂陸軍衛戍第一病院等を御見舞遊ばし、傷病者一同を御慰問あり、三時三十五分還啓遊ばされた。

□ 巡 回 救 療 班

陛下の厚き思召を證して宮内省では、宮内省巡回救療班と云ふを設け、數組に分れて自動車です市内の罹災地を回り、至る所多數の妊産婦や病兒の救療に従事してゐる。

三、攝政宮殿下の御痛心

震災以來、畏くも玄米食に罹災民と辛酸を俱にさせ給ふた攝政宮殿下には、親しく災害地御視察のため、豪雨を冒して九月十五日午前六時赤坂離宮御出門、カーキ色陸軍少佐の軍服を召されて御愛馬にまたがり、奈良武官長、西郷事務官等の扈從で、四谷見附から市ヶ谷見附、

九段上に出で、須橋、水道橋、春日町、本郷三丁目を經て上野公園に御着。西郷銅像前で御少憩、供奉の近衛師團長の御説明によつて、荒廢せる下谷、淺草、本郷、深川方面を望ませられ、燒野原に焦げたる樹木の點々たる様に御感慨深く、更に遙か本所方面に煙の立ち上つてゐるのは三萬六千の死者を出した被服廠跡なることを申し上げると、殿下は御悲痛の御面持で暫し御注視遊ばされた。續いて湯淺警視總監が火災の狀況、死傷者の數、傳染病及避難者の狀況等を一々統計について御説明申し上げた。次に永田東京市長は食糧配給の苦心、水道の破壊狀況を申し上げた。次に宇佐美東京府知事は各地方青年團、在郷軍人等が今日まで約二萬人も上京して秩序の維持に努めてゐることを言上し、最後に後藤内務大臣より罹災民の狀況を巨細に申し上げた。御説明終ると殿下には、永田市長を顧みさせられ、「食物は足りてもこれから寒い時節に向ふから着物がなくては困るだらう、其の方はどうか」と御下問になつたので市長は恐懼して、地方よりの同情で續々衣服が到着してゐること、政府から補助金のあること、市でも目下衣服の調達に努力してゐることを申上げ、宇佐美知事からも「愛國婦人會なども此事を心配して居ります」と申し添へたので殿下は御安心遊ばされた御様子であつた。それより殿下は再び御乗馬

で、神田旅籠町、萬世橋、須田町から日本橋を御通過、櫻田門に出で、三宅坂半藏門を經て八時半離宮に還啓遊ばされた。

□被服廠跡を弔はせ給ふ

同月十八日午前六時、殿下は再び下町方面を御視察のため、奈良武官長以下を隨へさせられ自動車で赤坂離宮御出門、一路上野驛前に成らせられ、此所にて御愛馬山吹に乗御になり、むさくるしい天幕張りやバラックに、辛かに雨露を凌いでゐる哀れな市民の群を、痛ましげに御愛撫遊ばされつゝ、車坂から御徒町への電車線路に沿うて、一望果てしなき燒野原を過ぎ、橋をお渡りになつて川岸を右へ、三萬六千の生靈が、悲惨な最期を遂げた被服廠跡を馬上から弔はせられ、しばし御兩眼を曇らせ給ひつゝ、兩國驛に御着になつた。

此の時後方にあつた小泉少將が御前に進んで、憲兵隊副官の神砂大尉が、その日最愛の妻子四人が危険な被服廠跡に避難したことを知りつゝも、公務のために顧みる暇なく、それが爲め一家は全滅したが、職務に忠實なる大尉は、涙を飲んで勤務に服し、末だ一日も缺勤しないと云ふ悲狀な物語を言上すると、殿下はそとろに涙ぐまれ、親しく大尉を御前に召されて、いろ

く、と御慰撫の御言葉を賜はつた。

やがて此所をお立ちになり、兩國橋から順路日本橋、京橋を御視察になつて、九時五分離宮に御歸還になつた。

□御成婚式御延期

攝政宮殿下と良子女王殿下との御成婚式は、今秋十一月を以て御舉行の御豫定であつたが、九月十六日攝政宮殿下には、牧野宮相を赤坂離宮に召させられ、

予は親しく帝都並に近縣の災害實況を見聞し、傷心益々深し。就いては今秋舉行すべかりし予の結婚式は、この際これを行ふに忍びず、宜しく延期すべし。

この御言葉があつたので、宮相は感激恐懼して御趣旨を奉戴し、直ちに日光御用邸に參候して兩陛下に言上した。兩宮下におかせられても即座に御嘉納になり、明春一月下旬から二月下旬までの間に取行はせられることに決定し、久邇宮殿下に對しても十七日宮相から此の旨を言上した。

右について關屋宮内次官は「東京市會からは成るべく御延期遊ばされず御豫定通り御舉行を

願ひたいと申出で、内閣の方も同様の意見であつたが、攝政宮殿下には右の御趣旨で延期したいと仰せ出されたのである。御手廻りの御調度品の中には災害に遭つたものもあるが、賢所前で行はせられるお式のものは一つも差支へがない。尙ほ殿下の思召によつて明春の御式も極めて質素嚴肅に取行はせられると語つた。

□御苑御料地開放

攝政宮殿下には思召を以て罹災民救済のバラツク建設地として左記御料地の一時使用を御許可相成るべき旨御沙汰あつた。

芝離宮内	約二千坪	高輪東宮御所内	約一萬坪
新宿御苑内	約二千坪	猿江御料地内	約二萬坪
上野公園の内	若干坪	白金御料地内(火藥庫跡)	約六千五百坪
高田御料地内(學習院)	約五千坪以上		

四、銘仙矢絰の良子女王

御兩親宮と御一緒に信州赤倉温泉に御滞在中であつた良子女王殿下には、九月二十三日午前五時二十五分上野驛着の列車で御兩親宮御同道バラック點々たる災後の帝都に御歸還遊ばされた。父宮殿下は霜降の背廣、母宮殿下は縞の御單衣、良子女王殿下には銘仙矢絰の御單衣に海老茶袴と云ふ中流家庭の令嬢かとも見まつる質素な御輕装で、變り果てた東京市の有様を、御憂はしげに御覽せられつゝ御歸邸になつた。殿下に隨行した國府宮務監督、後閑御用掛は交もく語る。「一日の強震の際には殿下方には別荘の樓上におゐでになつたので、早くお降りになるやうにと御注意申し上げ、御三方ともお庭に御避難遊ばされた。大宮殿下は日光の兩陛下と、東京の攝政宮殿下の御身の上を深く御心配遊ばされ、直ちに電報を打たれたが通せず、汽車も不通と云ふのでいよいよ御痛心遊ばされた。夜の八時頃になつて東京全滅の噂を聞いたが、詳細は知れず、翌日の午後六時に東京の御本邸から發した急使が、震災の様様をもたらして到着したので、稍や詳細を知ることが出來た。大宮殿下は三日に御見舞の御親書を兩陛下と攝政殿

下にお出しになつたが、其の時良子女王殿下にも、攝政殿下に御心をこめさせられた御見舞の御手紙を御出しになつた。殿下方には深く罹災民の上に御同情遊ばされ、土地にあるだけの反物を御買上げになつて、良子女王殿下には、母宮殿下其他の人々と共に晝夜針の手を休めさせられず、數々の衣服をお仕立てになつて、縣知事の手を経て罹災者に下賜された。」

五 秩父宮の御慰問

麻布歩兵第三聯隊附として親しく軍務に服せられつゝある秩父宮殿下には、華頂宮博忠王殿下御同伴、御附武官を随へさせられ、皇族御總代の御資格で、九月二十三日午前七時、芝浦海軍棧橋から驅逐艦で横濱、横須賀方面の災害地に向はせられ、懇ろに罹災傷病者を御慰問あらせられた。

□兩妃殿下の御慰問

竹田宮妃殿下には、九月十九日皇族各殿下の御代表として、三井家の和泉橋病院に臺臨あらせられ、院長田代博士の御案内で、親しく罹災入院患者を御慰問、多大の御救恤品を下賜され

た。又伏見宮博義王妃朝子殿下には九月二十三日、市外淀橋町柏木なる有隣園内に收容されてゐる罹災兒童を御慰問遊ばされ、種々の有難き御言葉があつた。

□御用地開放

高松宮家では震災と共に避難者收容のため麻布御用地内の約五千坪を開放されたが、其の後更に殿下の思召で、日本赤十字社に對して診療用大天幕設置の爲め、同御用地内約五六千坪を開放された。

六 十二宮家の御同情

大震災犠牲者達の悲惨な有様を親しく御覽になり、深く御心をいためさせられた各宮様方には、時を同じうして、これ等罹災者救済の儀を思ひ立たれ、秩父宮家他十二宮家協力して罹災者中の傷病者の爲めに衣服を與へることになり、東久邇家の川島宮務官が委員長になつて、京都の高島屋及び大丸の兩呉服店へそれぞれ澤山の品々を御註文に及んだ。そして其の最初の出來品の一部として男物、女物、子供物等十三箱千五百枚が九月廿六日に東久邇宮家へ到着した

ので直に東京横濱の各傷病者收容所へ配給することになり、逸早く一部分は大學病院へ下賜された。これ等品々にはいづれも針、糸の類まで附屬し、各宮方の厚い御心遣りの程がしのばれる。尙引續いて毛布その他約五千點の調度類が同宮邸に到着することになつてゐるが、これ等は直に救護事務局へ廻される筈である。この他、各宮家にては妃殿下方が、おみづから罹災者の爲めに晝夜を分たず、衣類をお縫いになる外各宮内官連の家族も夫々所藏の衣類は申すに及ばず、靴下腰卷の類まで東久邇宮邸に持ち寄つて、罹災者に寄贈する爲、その種類分けに目下忙殺されてゐる。今年お八つの東久邇宮盛厚王殿下には御弟宮師正殿下を失はれた上、御自身は前額部に御負傷なされたにも係はらず、成人された方々と同じやうにお思ひ遣り深く邸内の避難者の子供達を度々御見舞はれ、菓子、牡丹餅などの類を御手づからお分かちになり慰められてゐる。

御悼はしき三殿下

山階宮佐紀子女王殿下には折柄御懷妊中で震災当日は、鎌倉由井ケ濱なる御用邸の一室で吾妻勝剛博士 拜診を受けさせられつゝあつたが、最初の一震に御別邸は倒壊して御立ちになる暇もなく梁の下敷きになられて御悼はしき御最期を遂げさせた。御母賀陽宮大妃殿下も御列座であつたが大妃殿下は三尺程御隔りがあつた爲め御怪我だけで済んだ。

次に閑院宮寛子女王殿下には小田原御用邸で、又東久邇宮第二王子師正王殿下には鶴沼御別邸で御遭難薨去あらせられた。

世界を擧げて